

埼玉県志木市

埋蔵文化財調査報告書 4

城山遺跡第18地点

城山遺跡第19地点

城山遺跡第21地点

城山遺跡第22地点

2009

埼玉県志木市教育委員会

埼玉県志木市

埋蔵文化財調査報告書 4

城山遺跡第18地点

城山遺跡第19地点

城山遺跡第21地点

城山遺跡第22地点

2009

埼玉県志木市教育委員会

はじめに

志木市遺跡調査会
会長 白砂 正明

志木市は、埼玉県の南西部に位置し、面積9.06km²、人口7万人の水と緑、人と自然が調和した都市です。また、当市は、首都近郊25km圏内で、都心まで20分という地理的条件に恵まれていたため、昭和40年代以降、急速な都市化とともに、人口も急増し、住宅都市として大きく移り変わってきました。

こうした環境の中、台地縁辺部や沖積地の自然堤防上には、我々の先人たちが遺した足跡とも言うべき埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が14ヶ所確認されていますが、近年の増加傾向にある開発行為によって破壊や消滅の危機にさらされています。

埋蔵文化財は、国民共通の財産であるため、これらを保護し後世に伝えていくことは、私たちに課せられた責務であるということは言うまでもありません。しかし、本来は“地域の歴史と文化に根ざした歴史的遺産”はその地域で守ることに意味があるものと考えられたため、今後は行政と市民、そして開発業者とのより一層の連携を保ち推進して行きたいという所存しております。

さて、本書は、城山遺跡第18・19・21・22地点の発掘調査報告書です。

その内容ですが、まず、第18地点からは、弥生時代後期の住居跡1軒、古墳時代後期の住居跡7軒が検出されました。特に、「柏の城」関連と思われる6本の堀跡が検出されていますが、これらは、唯一、「柏の城」の区割りを示す文献の『館村旧記』にも見られないもので、今後の解明に期待されるものになりました。

第19地点では、古墳時代後期の住居跡5軒と中世の土坑1基が検出されています。

第21地点では、縄文時代早期の炉穴1基、古墳時代後期の住居跡2軒、近世の土坑3基が発見されています。

第22地点では、縄文時代の集石1基、古墳時代後期の住居跡1軒が検出されています。また、日本最古の土器群と知られ、志木市では最古に位置付けられる縄文時代草創期の爪形文系土器が1点出土し、市内では2点目の発見につながりました。

以上、ここではほんの数例でしか紹介できませんが、本地点からの貴重な発見により、志木市の歴史にまた新たなる1ページが追加されたことは大変喜ばしいことであり、同時に本書が郷土の歴史研究のために広く活用されますよう切に願っております。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、格別のご理解とご協力を頂いた事業主体者、そして深いご理解とご協力を賜りました地元の方々並びに関係者に対し、心から感謝申し上げます。

例 言

1. 本書は、埼玉県志木市に所在する城山遺跡（県Na09-003）の第18・19・21・22地点の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、志木市教育委員会の幹旋により、各開発主体者から志木市遺跡調査会が委託を受け実施した。整理作業及び報告書刊行は、志木市教育委員会が実施した。
3. 本書の作成において、編集は尾形則敏・深井恵子が行い、執筆は下記以外を尾形則敏が行った。
なお、朝霞市教育委員会の野沢 均氏には、中世以降の遺構についてご教示を頂いた。
深井恵子 第2章第3～5節の遺構、第3～5章第2節の遺構
青木 修 第2～5章の縄文土器、第6章第1節
4. 旧石器・縄文時代の石器に関する実測及び観察表の作成等は、(株)アルケーリサーチ（代表取締役 藤波啓容）に依頼した。
5. 遺物の実測は、星野恵美子・松浦恵子・鈴木浩子が行い、遺構・遺物のデジタルトレースは深井恵子・青木 修が行った。写真撮影は青木 修が行った。
6. 各遺跡の発掘調査及び整理作業・報告書作成には、以下の諸機関・諸氏のご教示・ご援助を賜った。記して感謝する次第である（敬称略）。

埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課・埼玉県立埋蔵文化財センター・朝霞市教育委員会・新座市教育委員会・和光市教育委員会・朝霞市博物館・富士見市立水子貝塚資料館

荒井幹夫・上田 寛・江原 順・加藤秀之・片平雅俊・隈本健介・栗原和彦
小出輝雄・肥沼正和・小滝 勉・渋谷寛子・齋藤欣延・笹森健一・斯波 治
鈴木 一郎・高橋 学・照林敏郎・根本 靖・野沢 均・早坂 廣人・藤波啓容
堀 善之・松本富雄・三田光明・柳井彰宏・山田尚友・山本 龍・和田晋治
城山遺跡第18・21地点（開発主体者 志木市中宗岡1-1-1 志木市長 細田喜八郎）


城山遺跡第19地点（開発主体者 個人）

城山遺跡第22地点（開発主体者 個人）

凡 例

1. 本報告書で使用した地図は、以下のとおりである。
第1図 1:10,000「志木市全図」アジア航測株式会社調製 平成9年3月志木市1:2,500をデジタルマップにより縮図編集
第2図 1:2,500「志木市No.6」東日本航空株式会社 アジア航測株式会社調製 平成8年測量
2. 挿図版の縮尺は、それぞれに明記した。
3. 遺構挿図版中の水糸レベルは、海拔標高を示す。
4. ビット・掘り込み内の数値は、床面もしくは確認面からの深さを示し、単位はcmである。
5. 遺構挿図版中のドットは、遺物出土位置を示し、その番号は遺物挿図版中の遺物番号と一致する。
6. 挿図版中のスクリーン・トーンは、以下のとおりであるが、その他は個々に凡例を示した。

遺 構

 カマドの範囲を示す。

遺 物



石器…使用面を示す。

土器…赤彩範囲を示すが、遺物番号下に黒彩とあるものは、黒色土器の黒彩範囲を示す。

7. 遺構の略記号は、以下のとおりである。

F P = 炉穴 S = 集石 D = 土坑 Y = 弥生時代末葉～古墳時代初頭の住居跡

H = 古墳・平安時代の住居跡 M = 溝跡

志木市遺跡調査会組織

〈役員〉

会 員	長	秋山太藏 (志木市教育委員会教育長) (昭和63年7月～平成12年6月)
		細田信良 (") (平成12年7月～平成17年6月)
		柚木博 (") (平成17年10月～平成20年3月)
		白砂正明 (") (平成20年4月～)
	会長職務代理者	新井茂 (") (平成17年7月～9月)
	副 会 長	星野昭次郎 (志木市教育委員会教育総務部長) (平成2年4月～平成7年3月)
		川日憲夫 (") (平成7年4月～平成12年3月)
		谷合弘行 (志木市教育委員会教育政策部長) (平成12年4月～平成15年3月)
		白砂正明 (") (平成15年4月～平成16年3月)
		杉山勇 (") (平成16年4月～平成17年3月)
理 事		新井茂 (") (平成17年10月～)
		神山健吉 (志木市文化財保護審議会委員長)
		井上國夫 (志木市文化財保護審議会委員)
		高橋長次 (")
		高橋豊 (")
		内田正子 (")
		並木勝司 (志木市教育委員会教育総務部参事兼生涯学習課長)
理事兼事務局長		(平成3年4月～平成8年3月)
		鈴木重光 (生涯学習課長) (平成8年4月～平成12年3月)
		土橋春樹 (志木市教育委員会教育政策部参事兼生涯学習課長)
		(平成12年4月～平成16年3月)
		大熊章只 (生涯学習課長) (平成16年4月～平成18年3月)
		宮川英夫 (志木市教育委員会教育政策部参事兼生涯学習課長)
		(平成18年4月～平成19年3月)
	吉田洋 (志木市教育委員会教育政策部生涯学習課長) (平成19年4月～)	

〈監 査〉

監 査	事	武川洋子 (志木市郷土資料館長) (平成5年4月～平成8年3月)
		萩原洋子 (") (平成8年4月～平成14年3月)
		野口泰 (社会教育指導員) (平成5年4月～平成6年3月)
		鈴木憲三 (") (平成5年4月～平成9年3月)
		佐藤茂 (") (平成6年4月～平成10年3月)
		永田伸夫 (") (平成10年4月～平成14年3月)
		福田鮎子 (") (平成14年4月～平成16年3月)
		金子雅佳 (生涯学習課主幹) (平成14年4月～8月、平成15年8月～平成16年3月)
		荒井正夫 (生涯学習課主査) (平成14年8月～平成15年7月)
		樺嶋秀俊 (生涯学習課主任) (平成16年4月～平成18年3月)
		並木貴子 (") (平成16年4月～平成17年3月)
		古屋大輔 (") (平成17年4月～平成18年3月)
		原田隆一 (志木市教育委員会教育総務課長) (平成18年4月～平成20年3月)
		菊原龍治 (") (平成20年4月～)
		鈴木幸治郎 (志木市出納室長) (平成18年4月～)

〈事務局〉

担 当	課	志木市教育委員会教育総務部社会教育課 (～平成12年3月)
		志木市教育委員会生涯学習部生涯学習課 (平成12年4月～平成14年3月)
事 務 局		志木市教育委員会教育政策部生涯学習課 (平成14年4月)
		山中満 (生涯学習課長補佐兼生涯学習課係長)
		(平成5年4月～平成6年3月)
		尾崎健市 (")
		(平成7年4月～平成10年3月)
	金子雅佳 (生涯学習課主幹) (平成14年8月～平成16年3月、平成14年8月～平成17年3月)	

下河辺信行(生涯学習課主幹)(平成14年4月～8月)
 醍醐一正(") (平成16年4月～平成18年3月)
 今野美香(") (平成19年4月～11月)
 大熊克之(") (平成19年12月～)
 土岐隆一(生涯学習課副課長)(平成20年4月～)
 岡本孝(生涯学習課係長)(平成3年4月～平成9年3月)
 関根正明(生涯学習課主査)(平成9年4月～平成15年7月)
 内田誠(") (平成18年4月～7月)
 佐々木保俊(") (昭和61年～)
 清水隆(") (平成19年5月～7月)
 今野美香(") (平成15年8月～平成19年3月)
 清水あや子(生涯学習課主任)(平成8年4月～平成12年3月)
 新井由紀子(") (平成12年4月～平成14年3月)
 尾形則敏(") (昭和62年～)
 倉部恵子(") (平成14年4月～平成18年3月)
 松永真知子(") (平成18年4月～)
 高野雅也(") (平成20年4月～)

〈城山遺跡第18地点の発掘調査〉

調査担当者 佐々木保俊
 調査員 深井恵子
 調査協力員 阿部公子・石原和子・出雲佐智子・伊東恵子・市来昌枝
 伊野部三千子・岩森都・高田美智子・内田やよい・海野ひとみ
 生沼和子・大野涼子・木村知恵子・木村千枝子・河本智恵子・葛生八重子
 桑原美保子・佐々木志野・佐々木荘治・佐藤博美・鈴木百合香・鈴木洋子
 鈴木陽子・須藤京子・高田美智子・高橋恭子・冨塚聡史・永井真理
 中田優子・中村マキ子・仲村靖宏・二階堂美知子・二川智子
 原島千香子・東浦久美子・広沢奈津子・藤森栄・古市美貴子・古田トシ子
 古徳扶美子・北條スミ・松川光一・丸山恵美子・宮川幸佳・宮田洋美
 村井京子・森文子・柳沢美子・矢野恵子・山口明美・山田伸弥
 油橋由美・吉谷顕子
 重機オペレータ 田中三二(大塚屋商店)

〈城山遺跡第19地点の発掘調査〉

調査担当者 佐々木保俊
 調査員 内野美津江
 調査協力員 足立裕子・海野ひとみ・太田敦子・尾崎美智子・桑原美保子・佐々木志野
 中村マキ子・二階堂美知子・北條スミ・松崎陽子・森文子
 重機オペレータ 田中三二(大塚屋商店)

〈城山遺跡第21地点の発掘調査〉

調査担当者 尾形則敏
 調査員 深井恵子
 調査協力員 伊野部三千子・太田敦子・尾崎美智子・鈴木美佐江・成田しのぶ
 東浦久美子・古田トシ子・星野恵美子・宮川幸佳
 重機オペレータ 田中三二(大塚屋商店)

〈城山遺跡第22地点の発掘調査〉

調査担当者 尾形則敏
 調査員 深井恵子
 調査協力員 太田敦子・尾崎美智子・大平祐子・鈴木美佐江・星野恵美子・松崎陽子
 永井真理
 重機オペレータ 田中三二(大塚屋商店)

〈整理作業〉

調査担当者 尾形則敏
 調査員 深井恵子
 調査補助員 青木修
 調査協力員 鈴木浩子・星野恵美子・増田千春・松浦恵子

目 次

はじめに

例 言／凡 例／志本市遺跡調査会組織／目 次／挿図目次／表目次／図版目次

第1章 遺跡の立地と環境	1
第1節 市域の地形と遺跡	1
第2節 城山遺跡の概要	11
第2章 城山遺跡第18地点の調査	19
第1節 調査の経過	19
第2節 縄文時代の遺構・遺物	23
第3節 弥生時代後期の遺構・遺物	24
第4節 古墳時代後期・平安時代の遺構・遺物	27
第5節 中世以降の遺構・遺物	48
第6節 遺構外出土遺物	59
第3章 城山遺跡第19地点の調査	71
第1節 調査の経過	71
第2節 検出された遺構・遺物	72
第4章 城山遺跡第21地点の調査	84
第1節 調査の経過	84
第2節 検出された遺構・遺物	85
第5章 城山遺跡第22地点の調査	97
第1節 調査の経過	97
第2節 検出された遺構・遺物	99
第6章 調査のまとめ	118
第1節 縄文時代	118
第2節 弥生時代後期	122
第3節 古墳時代後期	122
第4節 平安時代	126
第5節 中世以降	126
第7章 城山遺跡出土の板碑紹介（補遺）	129

報告書抄録

図 版

插图目次

第1図	市域の地形と遺跡分布 (1/20000)	2
第2図	城山遺跡の調査地点 (1/3000)	15
第3図	遺構分布図 (1/1000)	21
第4図	2・3区遺構分布図 (1/200)	22
第5図	79号土坑 (1/60)	23
第6図	3号住居跡 (1/60)	24
第7図	3号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)	25
第8図	88号住居跡・1区17号溝跡・出土板碑 (1/60・1/6)	28
第9図	88号住居跡出土遺物1 (1/4)	29
第10図	88号住居跡出土遺物2 (1/4)	30
第11図	89号住居跡 (1/60)	31
第12図	89号住居跡出土遺物 (1/4)	31
第13図	90号住居跡 (1/60)	32
第14図	90号住居跡出土遺物1 (1/4)	33
第15図	90号住居跡出土遺物2 (1/4)	34
第16図	91号住居跡・カマド (1/60・1/30)	35
第17図	91号住居跡出土遺物1 (1/4)	36
第18図	91号住居跡出土遺物2 (1/4)	37
第19図	92号住居跡 (1/60)	39
第20図	92号住居跡出土遺物 (1/4)	39
第21図	93号住居跡・カマド (1/60・1/30)	40
第22図	93号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)	41
第23図	94号住居跡・出土遺物 (1/60・1/4)	42
第24図	95号住居跡 (1/60)	43
第25図	95号住居跡出土遺物 (1/3・1/4)	43
第26図	土坑 (1/60)	49
第27図	16・18・19号溝跡 (1/60)	51
第28図	16号溝跡出土遺物 (1/3・1/6)	54
第29図	2区17号溝跡 (1/60)	56
第30図	2区17号溝跡出土遺物 (1/4・4/5)	56
第31図	20号溝跡 (1/60)	57
第32図	21号溝跡・出土遺物 (1/60・1/3)	58
第33図	遺構外出土石器 (2/3・1/3)	60
第34図	遺構外出土遺物1 (1/3)	63
第35図	遺構外出土遺物2 (1/3)	64
第36図	遺構外出土遺物3 (1/3)	65
第37図	遺構外出土遺物4 (1/3・1/4・4/5)	66
第38図	遺構分布図 (1/200)	73
第39図	96・97号住居跡 (1/60)	74
第40図	96・97号住居跡出土遺物 (1/4)	75
第41図	98・99号住居跡 (1/60)	76
第42図	98号住居跡出土遺物 (1/4)	76
第43図	100号住居跡 (1/60)	78
第44図	100号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)	78
第45図	82号土坑 (1/60)	80
第46図	遺構外出土遺物 (2/3・1/3)	81
第47図	遺構分布図 (1/300)	85
第48図	3号炉穴 (1/60)	86

第49図	64号住居跡 (1/60)	87
第50図	64号住居跡出土遺物 (1/4)	87
第51図	101号住居跡 (1/60)	88
第52図	101号住居跡出土遺物 (1/4)	88
第53図	土坑 (1/60)	90
第54図	86号土坑出土遺物 (1/3・1/4)	91
第55図	遺構外出土遺物 (2/3・1/3・1/4)	94
第56図	遺構分布図 (1/200)	98
第57図	2号集石 (1/30)	100
第58図	2号集石出土遺物 (1/3)	100
第59図	102号住居跡 (1/60)	102
第60図	102号住居跡遺物出土状態 (1/60)	103
第61図	102号住居跡カマド (1/30)	103
第62図	102号住居跡出土遺物 1 (1/4)	104
第63図	102号住居跡出土遺物 2 (1/4)	105
第64図	102号住居跡出土遺物 3 (1/4・1/3)	106
第65図	遺構外出土遺物 1 (2/3・1/3)	110
第66図	遺構外出土遺物 2 (1/3)	111
第67図	遺構外出土遺物 3 (1/3)	112
第68図	遺構外出土遺物 4 (1/3)	113
第69図	遺構外出土遺物 5 (1/3・4/5)	114
第70図	城山遺跡出土の板碑 (1/6)	129

目 次

第1表	志木市埋蔵文化財蔵地一覧	1
第2表	志木市の時代別にみた考古資料一覧 (1)	6
	志木市の時代別にみた考古資料一覧 (2)	7
	志木市の時代別にみた考古資料一覧 (3)	8
	志木市の時代別にみた考古資料一覧 (4)	9
第3表	志木市の発掘調査報告書一覧 (1)	12
	志木市の発掘調査報告書一覧 (2)	13
第4表	城山遺跡調査一覧 (1)	16
	城山遺跡調査一覧 (2)	17
第5表	城山遺跡第18地点の発掘調査工程表	20
第6表	3号住居跡出土遺物一覧	26
第7表	88号住居跡出土遺物一覧	44
第8表	89号住居跡出土遺物一覧	44
第9表	90号住居跡出土遺物一覧	45
第10表	91号住居跡出土遺物一覧 (1)	45
	91号住居跡出土遺物一覧 (2)	46
第11表	92号住居跡出土遺物一覧	46
第12表	93号住居跡出土遺物一覧	47
第13表	94号住居跡出土遺物一覧	47
第14表	95号住居跡出土遺物一覧	48
第15表	16・17号溝跡出土の陶磁器・土器一覧	53
第16表	16号溝跡出土の瓦一覧	55
第17表	遺構外出土の石器一覧	61
第18表	遺構外出土の縄文土器一覧 (1)	67
	遺構外出土の縄文土器一覧 (2)	68

第19表	遺構外出土の陶器一覧	69
第20表	出土板碑一覧	69
第21表	96・97号住居跡出土遺物一覧	79
第22表	98号住居跡出土遺物一覧	79
第23表	100号住居跡出土遺物一覧	80
第24表	遺構外出土の石器一覧	80
第25表	遺構外出土の縄文土器一覧	82
第26表	遺構外出土の陶磁器・土器一覧	83
第27表	64号住居跡出土遺物一覧	89
第28表	101号住居跡出土遺物一覧	89
第29表	85・86号土坑出土の陶磁器・土器一覧	92
第30表	遺構外出土の石器一覧	95
第31表	遺構外出土の縄文土器一覧	95
第32表	遺構外出土の陶磁器・土器一覧	95
第33表	102号住居跡出土遺物一覧(1)	107
	102号住居跡出土遺物一覧(2)	108
第34表	遺構外出土の石器一覧	108
第35表	遺構外出土の縄文土器一覧(1)	115
	遺構外出土の縄文土器一覧(2)	116
	遺構外出土の縄文土器一覧(3)	117
第36表	城山道跡の縄文遺構・土器検出地点一覧(1)	120
	城山道跡の縄文遺構・土器検出地点一覧(2)	121

図版目次

図版 1	城山道跡第18地点 1. 確認調査風景 2. 79号土坑 3. 3号住居跡・20号溝跡 4. 88号住居跡 5. 88号住居跡遺物出土状態 6. 発掘風景 7. 89号住居跡 8. 89号住居跡遺物出土状態
図版 2	城山道跡第18地点 1. 90号住居跡 2. 90号住居跡遺物出土状態 3. 90号住居跡貯蔵穴遺物出土状態 4. 91号住居跡 5・6. 91号住居跡遺物出土状態 7. 91号住居跡カマド
図版 3	城山道跡第18地点 1. 92号住居跡 2. 93号住居跡 3・4. 93号住居跡遺物出土状態 5. 93号住居跡貯蔵穴遺物出土状態 6. 93号住居跡カマド 7. 94号住居跡 8. 95号住居跡
図版 4	城山道跡第18地点 1. 2区土坑群 2. 75号土坑 3. 76号土坑 4. 77号土坑 5. 78号土坑 6. 80号土坑 7. 81号土坑 8. 発掘風景
図版 5	城山道跡第18地点 1. 1区17号溝跡 2. 2区17号溝跡(西から) 3. 2区17号溝跡(南から) 4. 16・18号溝跡(西から) 5. 18・16号溝跡(東から) 6. 16号溝跡(南から) 7. 21号溝跡(西から)
図版 6	城山道跡第18地点 1. 3号住居跡出土遺物 2. 89号住居跡出土遺物
図版 7	城山道跡第18地点 88号住居跡出土遺物
図版 8	城山道跡第18地点 90号住居跡出土遺物
図版 9	城山道跡第18地点 91号住居跡出土遺物

- 図版10 城山遺跡第18地点
1. 92号住居跡出土遺物 2. 93号住居跡出土遺物
- 図版11 城山遺跡第18地点
1. 94号住居跡出土遺物 2. 95号住居跡出土遺物 3. 17・21号溝跡出土遺物
- 図版12 城山遺跡第18地点
16号溝跡出土遺物
- 図版13 城山遺跡第18地点
遺構外出土遺物1
- 図版14 城山遺跡第18地点
遺構外出土遺物2
- 図版15 城山遺跡第18地点
遺構外出土遺物3
- 図版16 城山遺跡第19地点
1. 調査区近景 2. 確認調査風景 3. 発掘風景 4～7. 96号住居跡遺物出土状態
8. 96・97号住居跡
- 図版17 城山遺跡第19地点
1. 発掘風景 2. 98号住居跡 3. 99号住居跡柱穴 4. 99号住居跡貯蔵穴
5・6. 100号住居跡遺物出土状態 7. 100号住居跡 8. 82号土坑
- 図版18 城山遺跡第19地点
1. 96・97号住居跡出土遺物 2. 98号住居跡出土遺物
- 図版19 城山遺跡第19地点
1. 100号住居跡出土遺物 2. 遺構外出土遺物
- 図版20 城山遺跡第21地点
1. 表土剥ぎ風景 2. 調査風景 3. 3号炉穴 4. 発掘風景 5. 64号住居跡(東から)
6. 64号住居跡(南から) 7. 64号住居跡遺物出土状態
- 図版21 城山遺跡第21地点
1・2. 101号住居跡遺物出土状態 3. 101号住居跡・86号土坑(南から)
4～6. 86号土坑遺物出土状態 7. 86・87号土坑
- 図版22 城山遺跡第21地点
1. 64号住居跡出土遺物 2. 101号住居跡出土遺物 3. 85号土坑出土遺物
4. 86号土坑出土遺物1
- 図版23 城山遺跡第21地点
1. 86号土坑出土遺物2 2. 遺構外出土遺物
- 図版24 城山遺跡第22地点
1. 調査区近景 2. 発掘風景 3～7. 102号住居跡遺物出土状態
8. 102号住居跡貯蔵穴付近遺物出土状態
- 図版25 城山遺跡第22地点
1. 調査風景 2. 102号住居跡貯蔵穴 3. 102号住居跡入口ピット付近
4. 102号住居跡カマド 5. 102号住居跡 6・7. 2号集石 8. 2号集石調査風景
- 図版26 城山遺跡第22地点
1. 2号集石出土遺物 2. 102号住居跡出土遺物1
- 図版27 城山遺跡第22地点
1. 102号住居跡出土遺物2
- 図版28 城山遺跡第22地点
遺構外出土遺物1
- 図版29 城山遺跡第22地点
遺構外出土遺物2
- 図版30 城山遺跡第22地点
1. 遺構外出土遺物3 2. 城山遺跡出土の板碑

第1章 遺跡の立地と環境

第1節 地域の地形と遺跡

(1) 地理的環境と遺跡分布

志木市は、埼玉県の南西部に位置し、市域はおおよそ南北4.71km、東西4.73kmの広がりを持ち、面積は9.06㎢、人口約7万人の自然と文化の調和する都市である。

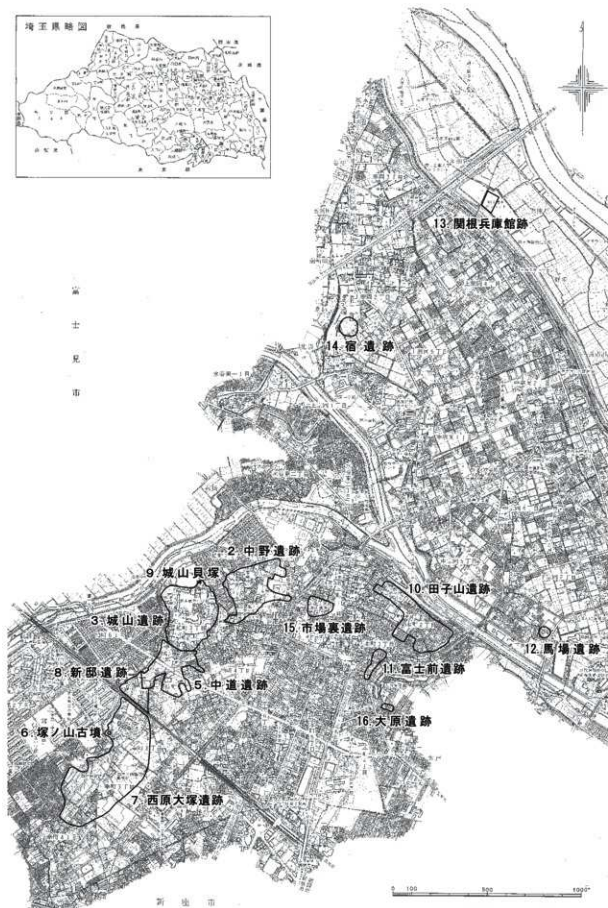
地理的景観を眺めて見ると、市域東部の宗岡地区は、荒川（旧入間川）の形成した沖積低地が広がり、市域西部の本町・柏町・幸町地区は、古多摩川によって形成された武蔵野台地の上にある。また、市内には東部に荒川、中央に古くは舟運で利用された新河岸川、そして西部から中央に新河岸川と合流する柳瀬川の3本の川が流れている。

こうした自然環境の中で、市内遺跡の大部分は、柳瀬川・新河岸川右岸流域の台地縁辺部に帯状に分布している。遺跡は柳瀬川上流から順に、西原大塚遺跡（7）、中道遺跡（5）、新郷遺跡（8）、城山遺跡（3）、中野遺跡（2）、市場裏遺跡（15）、田子山遺跡（10）、富士前遺跡（11）、大原遺跡（16）と名付けられている。また、荒川・新河岸川が形成した沖積低地でも、馬場遺跡（12）、宿遺跡（14）、

No	遺跡名	遺跡の規模	地目	遺跡の種類	遺跡の時代	主な遺構	主な遺物
2	中野	63,010 m ²	畑・宅地	集落跡	旧石器、縄（早～晩）、弥（後）、古（前～後）、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、井戸跡、溝跡等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器等
3	城山	79,280 m ²	畑・宅地	城館跡・集落跡	旧石器、縄（草創～晩）、弥（後）、古（前～後）、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、土坑墓、地下室、井戸跡、溝跡、柏城跡関連、跡造関連等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭、鋳造関連遺物等
5	中道	45,860 m ²	畑・宅地	集落跡	旧石器、縄（早～晩）、弥（後）、古（前～後）、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、方形周溝墓、土坑墓、地下式坑、溝跡、道路状遺構等	石器、縄文土器、土師器、須恵器、古銭、人骨等
6	塚の山古墳	800 m ²	林	古墳?	古墳?	古墳?	なし
7	西原大塚	163,930 m ²	畑・宅地	集落跡	旧石器、縄（前～晩）、弥（後）、古（前～後）、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、方形周溝墓、井戸跡、溝跡等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭等
8	新郷	16,400 m ²	畑・宅地	貝塚・集落跡	縄（早～中）、古（前～後）、中・近世、近代	貝塚、住居跡、土坑、方形周溝墓、井戸跡、溝跡、段切状遺構、ピット群等	石器、貝、縄文・弥生土器、土師器、陶磁器、古銭等
9	城山貝塚	900 m ²	林	貝塚	縄（前）	斜面貝塚	石器、縄文土器、貝
10	田子山	62,200 m ²	畑・宅地	集落跡	縄（草創～晩）、弥（後）、古（後）、奈・平、中・近世、近代	住居跡、土坑、方形・円形周溝墓、井戸跡、溝跡、段切状遺構、ピット群等	縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、炭化種子等
11	富士前	7,100 m ²	宅地	集落跡	弥（後）～古（前）	住居跡	弥生土器、土師器
12	馬場	2,800 m ²	畑	集落跡	古（前）	住居跡?	土師器
13	関根兵庫館跡	4,900 m ²	グラウンド	館跡	中世	不明	なし
14	宿	7,700 m ²	田	館跡	中世	溝跡・舟状構造物	木・石製品
15	市場裏	10,700 m ²	宅地	集落跡・墓跡	弥（後）～古（前）、近代	住居跡・方形周溝墓	弥生土器、土師器、かわらけ
16	大原	1,700 m ²	宅地	不明	近世以降?	溝跡	なし
合	計	467,280 m ²					

平成21年1月30日 現在

第1表 志木市埋蔵文化財包蔵地一覧



第1図 市域の地形と遺跡分布 (1/20000)

関根兵庫館跡(13)のように自然堤防上に存在する遺跡も明らかにされつつあり、将来的には新たな遺跡が相次いで発見される可能性がある。なお、現在市内の遺跡総数は、前述した12遺跡に塚の山古墳(6)、城山貝塚(9)を加えた14遺跡である(第1図)。

(2) 歴史的環境

次に市内の遺跡を時代順に概観してみることにする。

1. 旧石器時代

旧石器時代の遺跡は、柳瀬川右岸の中野・城山・中道・西原大塚遺跡で確認されている。

中道遺跡では、昭和62(1987)年の富士見・大原線(現ユリノキ通り)の工事に伴う発掘調査により、立川ローム層のⅣ層上部・Ⅵ層・Ⅷ層で文化層が確認されており、礫群、石器集中地点が検出されている。これにより、黒曜石製のスクレイパーやナイフ形石器、安山岩や凝灰岩の石核や剥片などが発見されている。

西原大塚遺跡では、西原特定土地地区画整理事業に伴う発掘調査により、石器集中地点が検出されている。石器集中地点は、平成6(1994)年度には2ヶ所、平成7年(1995)度には1ヶ所が検出され、ナイフ形石器・剥片などが発見されている。

平成11～14(1999～2002)年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点からも立川ローム層のⅣ層下部から、黒曜石・頁岩の石核・剥片が約60点出土している。

平成13(2001)年に発掘調査が実施された城山遺跡第42地点では、立川ローム層のⅣ層上部と第Ⅶ層の2ヶ所で石器集中地点が確認され、黒曜石・安山岩・チャート・頁岩などの挟入石器・剥片など32点が出土している。

2. 縄文時代

縄文時代では、西原大塚遺跡を中心に中期後葉の遺跡が集中し、城山貝塚の周辺の城山遺跡からは、前期末葉(諸磯式期)の住居跡や土器がやや多く検出される傾向にある。

ここでは、時代の推移に従って説明することにする。まず、草創期では、平成4(1992)年に発掘調査が実施された城山遺跡第16地点から爪形文系土器1点と平成10(1998)年に発掘調査が実施された田子山遺跡第51地点から有茎尖頭器1点が出土していたが、新たに今回報告する城山遺跡第22地点から出土した爪形文系土器1点に加わり、さらに城山遺跡第21地点からは、市内では初めて、多縄文系土器3点が出土した。

早期では、遺構の検出例はまだ少ないが、住居跡として、平成18(2007)年に発掘調査が実施された中道遺跡第65地点で検出された早期末葉(条痕文系)の10号住居跡1軒が最古のものと言える。土器としては、田子山遺跡で捺糸文・沈線文・条痕文系土器が出土しているが、御嶽神社を中心とする東側でやや多く出土する傾向がある。また、富士前・新邸・城山遺跡からは、捺糸文系土器が数点出土し、条痕文系土器は、中野・田子山遺跡では炉穴に伴い出土している。

前期では、西原大塚・新邸遺跡で住居跡(黒浜式期)、城山遺跡では住居跡3軒(諸磯式期)が検出されている。そのうち、新邸遺跡のものは貝層をもつ住居跡である。また、平成2年度に市指定文化財に認定された城山貝塚も縄文海進期にあたるこの頃の時代に形成された斜面貝塚と考えられる。

中期になると遺跡が最も増加する。特に、中期中葉から後葉の勝坂式～加曾利E式期にはその傾向が

強くなり、中野・城山・中道・西原大塚・田子山遺跡で住居跡を中心に土坑が検出されている。特に西原大塚遺跡では、住居跡が環状に配置していることが判明しつつある。

中期末葉からは遺跡が減少し、現在のところ西原大塚遺跡から敷石をもつ住居跡が1軒確認されるのみである。

後期では、西原大塚遺跡から堀之内式期の住居跡1軒と加曾利B式期の住居跡1軒、遺物集中地点1ヶ所が検出されている。また、その他の遺構としては、平成6（1994）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点で、土坑1基が検出され、下層から称名寺I式期の土器、上層からII式の特徴をもつ土器が出土している。西原大塚遺跡第54地点でも2基の土坑が検出されている。

晩期では、中野・田子山遺跡から安行ⅢC式・千網式の土器片が少量発見されるにとどまり、以降市内では弥生時代後期まで空白の時代となる。

3. 弥生時代～古墳時代前期

弥生時代では、現時点において、前・中期の遺跡は検出されていないが、後期末葉から古墳時代前期と考えられる遺跡が数多く検出されている。中でも、平成6（1994）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点の21号住居跡は後期中葉に比定される可能性があり、その住居跡からは、多数の土器をはじめ、大量の炭化種子（イネ・アワ・ダイズなど）、炭化材が出土し、当時の食糧事情を考える上で重要である。富士前遺跡では、志木市史にも掲載されているが、不時の発見に伴い、籠目痕をもつ壺形土器をはじめとした多くの土器が発見されている。

西原大塚遺跡では後期末葉から古墳時代前期にかけての住居跡が500軒以上確認されており、市内最大の集落跡であることが判明している。特に、122号住居跡からは全国的にも稀な「イヌ」を象ったと思われる動物形土製品が出土している。

昭和62（1987）年以降、西原大塚・田子山・市場裏遺跡の3遺跡において、方形周溝墓が検出されてきたが、最新では、平成15（2003）年に発掘調査が実施された新邸遺跡第8地点と平成18（2006）年に実施された中道遺跡第65地点でも、それぞれ1基が確認されている。これにより当時の墓域が、集落と単位的なまとまりをもって存在することが明らかになってきたと言えるであろう。

市内で最も多く方形周溝墓が検出されている西原大塚遺跡では、10号方形周溝墓の溝底から一括出土した中に畿内系の庄内式の長脚高環が出土していることに注目される。また、平成11（1999）年に発掘調査が実施された西原大塚遺跡第45地点では、一辺20mを超える市内最大規模の17号方形周溝墓が発見されている。この方形周溝墓の溝からは、珍しい鳥形土器をはじめ、畿内系の有段口緑壺、吉ヶ谷式系の壺、在地系の壺などと大きく畿内・比企地域・在地の3要素の特徴を示す壺が出土している。こうした地域に関わる被葬者の人物像が浮き彫りにされたことで、当地域の弥生時代後期から古墳時代前期の歴史を紐解く手がかりになったことは重要である。

4. 古墳時代中・後期

古墳時代でも前期末葉から中期になると、遺跡が減少する傾向にある。その中で、西原大塚遺跡に隣接する新邸遺跡で検出されている第2地点の1号住居跡と平成15（2003）年に発掘調査が実施された第8地点の2～8号住居跡は、古墳時代前期でも比較的新しい段階に比定される可能性がある。このことから、新邸遺跡で検出された住居跡は、隣接する西原大塚遺跡から継続して広がった集落跡ではない

かと推測される。

中期の遺跡では、中道・城山・中野遺跡から住居跡が発見されている。その中でも、平成7（1995）年に発掘調査が実施された中道遺跡第37地点19号住居跡は、5世紀中葉に比定され、カマドをもつ住居跡としては市内最古のものである。

5世紀末葉になると、遺跡が増加傾向にあり、特に6世紀後半から7世紀後半にかけては、縄文中期を越えるほどの爆発的な増加をみる。こうした集落跡は現在、中道・城山・中野遺跡に比較的古い5世紀代の住居跡が確認されていることから、柏町地区を中心に存在した集落が、6世紀後半以降、周辺の地域に拡散するという動きを読み取ることができる。

なお、新郷遺跡では第8地点で初めて古墳時代後期（7世紀中葉）の住居跡が1軒検出されている。この住居跡は、3×3.5mの小型の長方形を呈するもので、焼失住居であり、床面上からは土器・炭化材の他ベンガラ塊が出土している。

現在、5世紀後半から7世紀後半にかけての時期に比定できる住居跡の軒数は、最も多い城山遺跡で120軒を越え、次いで中野遺跡で約50軒、中道遺跡で約15軒、田子山遺跡で約10軒、新郷遺跡で1軒を数える。

また住居跡以外では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第24地点から、6世紀後半以降のものと考えられる4.1×4.7mの不整形で2ヶ所にブリッジをもつ小型の円形周溝墓が1基確認されている。さらに、平成14（2002）年に発掘調査された田子山遺跡第81地点を契機に御嶽神社を取り囲むように外周で推定約33mの巨大な溝跡の存在が明らかになり、現時点では古墳の周溝ではないかと考えられている。

5. 奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺跡は、古墳時代後期以降に拡散した集落内で確認される傾向にあり、現在のところ、中野・城山・中道・西原大塚・田子山遺跡で検出されている。中でも城山・田子山遺跡はこの時代を代表とする遺跡として挙げる事ができる。

城山遺跡では、平成8（1996）年に発掘調査が実施された第35地点の128号住居跡から、印面に「冨」1文字が書かれた完成品の銅印が出土しているが、これは県内でも稀少な例で貴重な資料である。この住居跡からはその他、須恵器や猿投産の緑軸陶器の小破片1点、布目瓦の小破片2点などが出土している。

田子山遺跡では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された第24地点からは、住居跡の他、掘立柱建築遺構・溝跡そして100基を越える土坑群が検出されている。平成6（1994）年に発掘調査が実施された第31地点の44号住居跡からは、腰帯の一部である銅製の丸柄が出土している。さらにカマド右横の床面上からは、東金子窯跡群の前内製品と鳩山製品の須恵器が1点ずつ出土し、土器編年の基本資料として貴重であると言える。

6. 中・近世

中・近世の遺跡は、「柏の城」を有する城山遺跡と千手堂関連である新郷・中道遺跡、そして関根兵庫館跡・宿遺跡が代表される遺跡と言える。

城山遺跡では、数次にわたる発掘調査により、『たてむらあきゅう籠村旧記』（註1）にある「柏之城落城後の屋敷割の

第1章 遺跡の立地と環境

1. 旧石器時代

No.	遺跡名	地点名	掲載された主な遺構・遺物	報告書一覧及び資料索引
2	中野	第19地点	石器集中地点1ヶ所、ナイフ形石器、角雉状石器など	志本市遺跡調査会調査報告第7集
3	城山	第42地点	石器集中地点2ヶ所、石器・礫	志本市遺跡調査会調査報告第10集
7	西原大塚	区画整理 ナ史掲載 第110地点	石器集中地点2ヶ所 ナイフ形石器、尖頭器など 石器集中地点2ヶ所、ナイフ形石器・剥片・石核	西原大塚の遺跡(西原特定地区区画整理事業に伴う発掘調査概報) 1984「志本市史 原始・古代資料編」 志本市遺跡調査会調査報告第9集
2. 縄文時代				
2	中野	第2地点	包含層出土石器	中期 志本市遺跡調査会調査報告第1集
		第16地点	集石1基	不明 志本市の文化財第24集
		第25地点	住居跡1軒、土坑9基、砂穴5基、土器、石器	早～晩期 志本市の文化財第31集
		第43地点	包含層出土石器	早～後期 志本市の文化財第27集
		第49地点	住居跡1軒、土坑10基、砂穴1基、遺物包含層	早期～後期 志本市遺跡調査会調査報告第7集
3	城山	A地点	住居跡1軒	前期 「志本市史 原始・古代資料編」
		第3地点	包含層出土石器	早～後期 志本市の文化財第11集
		第4地点	埋糞1基	中期 志本市の文化財第13集
		第9地点	土坑1基	不明 志本市の文化財第15集
		第11地点	住居跡1軒、土坑3基、砂穴1基、土器	前・中期 志本市の文化財第17集
		第12地点	包含層出土石器	早～晩期 志本市の文化財第24集
		第16地点	包含層出土石器、集石1基、土器(爪形文系など)、石器	草前～後期 志本市の文化財第34集
		第29地点	土坑1基	早～後期 志本市の文化財第25集
		第32地点	包含層出土石器	早～中期 志本市の文化財第25集
		第34地点	包含層出土石器	早～中期 志本市の文化財第27集
		第35地点	包含層出土石器	早～後期 志本市の文化財第27集
		第42地点	土坑21基、砂穴1基、土器・石器	早～中期 志本市遺跡調査会調査報告第10集
		第46地点	住居跡1基、土坑1基、土器・石器	前期・不明 志本市の文化財第38集
		第49地点	土坑1基、土器	不明 志本市の文化財第39集
		第55地点	土坑2基、土器・石器	不明 志本市の文化財第38集
		第57地点	土坑3基、土器	不明 志本市の文化財第39集
		第61地点	土坑1基、土器小片	不明 志本市遺跡調査会調査報告第16集
5	中道	第2地点	住居跡3軒、土坑8基、集石2基、土器、石器	中期 志本市遺跡調査会調査報告第5集
		第12地点	住居跡2軒、土器	中期 志本市の文化財第18集
		第13地点	住居跡1軒、土坑1基、土器	中期 志本市の文化財第18集
		第21地点	包含層出土石器	前期 志本市の文化財第24集
		第27地点	包含層出土石器	前～後期 志本市の文化財第29集
		第41地点	包含層出土石器	早～後期 志本市の文化財第27集
		第44地点	包含層出土石器	早～後期 志本市の文化財第29集
		第65地点	住居跡2軒、砂穴1基、集石1基、土器、石器、陶磁器・土器、土製品、瓦	早・中期 志本市遺跡調査会調査報告第12集
7	西原大塚	第1地点	住居跡4軒、土坑8基、土器、石器	中期 志本市の文化財第4集
		第3地点	住居跡3軒、土坑2基、土器	中期 志本市遺跡調査会調査報告第1集
		第8地点	住居跡1軒、土坑24基、土器、石器	中期 志本市の文化財第14集
		第34地点	住居跡3軒、土坑6基、土器、石器	中期 志本市の文化財第25集
		第39地点	住居跡3軒、土器、石器	中期 志本市の文化財第28集
		第43地点	住居跡10軒、土坑22基、土器、石器	中期 志本市の文化財第30集
		第47地点	土坑1基、遺構外出土土器	中期 志本市の文化財第32集
		第54地点	土坑7基、土器	中・後期 志本市の文化財第35集
		第65地点	遺構外出土土器・石器	前～後期 志本市の文化財第36集
		第67地点	住居跡8軒、土坑8基、集石1基、土器・石器多数	中期 志本市の文化財第37集
		第110地点	土坑1基、集石1基、土器片	中期 志本市遺跡調査会調査報告第9集
		第113地点	砂穴1基、土器	早期 志本市の文化財第30集
		第120地点	住居跡1軒、土坑62基、土器・石器	中期 志本市遺跡調査会調査報告第15集
8	新郷	第1地点	住居跡1軒(住居)、土坑2基、包含層出土土器	前・中期 志本市遺跡調査会調査報告第2集
		第2地点	住居跡1軒(第1地点と同一)、土器、石器、貝類	前期 志本市遺跡調査会調査報告第3集
		第3地点	包含層出土土器	早・前期 志本市の文化財第15集
		第8地点	土坑21基、土器小片	不明 志本市遺跡調査会調査報告第11集
		第4地点	土坑1基	不明 志本市の文化財第18集
10	田子山	第10地点	住居跡1軒、土器	中期 志本市の文化財第24集
		第19地点	土坑2基、遺構外出土土器	早～後期 志本市の文化財第29集
		第21地点	遺構外出土土器片	早～後期 志本市の文化財第29集
		第25地点	砂穴1基、遺構外出土土器	早～後期 志本市の文化財第29集
		第32地点	土坑1基、遺構外出土土器	早～中期 志本市の文化財第25集
		第37地点	遺構外出土土器	早期 志本市の文化財第23集
		第39地点	土坑3基、集石2基、砂穴2基、土器	早期 志本市の文化財第25集
		第47地点	遺構外出土土器	早・前期 志本市の文化財第27集
		第49地点	遺構外出土土器	早期 志本市の文化財第27集
		第69地点	集石1基	中期 志本市の文化財第32集
		第78地点	集石1基、土器	前期 志本市の文化財第35集
		第81地点	遺構外出土土器・石器	早期～中期 志本市の文化財第36集

第2表 志本市の時代別みた考古資料一覧(1)

3. 弥生時代

No.	遺跡名	地点名	掲載された主な遺構・遺物	報告書一覧表及び資料索引		
2	中野	第2地点	住居跡 2軒、土器	後期 志本市遺跡調査会調査報告第1集		
		第9地点	住居跡 1軒、土器	後期 志本市の文化財第15集		
		第25地点	住居跡 1軒、土坑 1基、土器	後期 志本市の文化財第31集		
3	城山	第49地点	住居跡 1軒、土器	後期 志本市遺跡調査会調査報告第7集		
		B地点	住居跡 1軒	後期 「志本市史 原始・古代資料編」		
		第4地点	住居跡 2軒、土器	後期 志本市の文化財第13集		
5	中道	第35地点	住居跡 2軒、土器、砥石	後期 志本市の文化財第27集		
		第66地点	方形周溝墓 1基、土器	後期～古墳 志本市遺跡調査会調査報告第12集		
		第1地点	住居跡 1軒、土器	後期～古墳 志本市の文化財第4集		
7	西原大塚	第2地点	住居跡 3軒、土器	後期～古墳 「志本市史 原始・古代資料編」		
		第3地点	住居跡 2軒、土器	後期～古墳 志本市遺跡調査会調査報告第1集		
		第4地点	住居跡 3軒、土器、砥石	後期～古墳 志本市遺跡調査会調査報告第3集		
		第6地点	住居跡 1軒、土器	後期～古墳 志本市の文化財第13集		
		第7地点	小塚穴状遺構 1基	後期～古墳 志本市の文化財第15集		
		第8地点	住居跡 13軒、方形周溝墓 1基、竪立柱建物跡 1基	後期～古墳 志本市の文化財第14集		
		第9地点	住居跡 1軒、土器	後期～古墳 志本市の文化財第14集		
		第10地点	住居跡 1軒、土器	後期～古墳 志本市の文化財第14集		
		第14地点	住居跡 1軒、土器	後期～古墳 志本市の文化財第21集		
		第21地点	方形周溝墓 1基、土器	後期～古墳 志本市の文化財第29集		
		第32地点	住居跡 2軒、土器	後期～古墳 志本市の文化財第23集		
		第36地点	住居跡 4軒、土器	後期～古墳 志本市の文化財第27集		
		第37地点	住居跡 7軒、土器	後期～古墳 志本市の文化財第28集		
		第39地点	住居跡 1軒、方形周溝墓 1基、土器、石器	後期～古墳 志本市の文化財第25集		
		10	田子山	第43地点	住居跡 9軒、土器	後期～古墳 志本市の文化財第30集
第45地点	住居跡 72軒、方形周溝墓 1基、土器（鳥型土器）			後期～古墳 志本市遺跡調査会調査報告第6集		
第47地点	溝跡 1本			後期～古墳 志本市の文化財第32集		
第54地点	方形周溝墓 1基、土器			後期～古墳 志本市の文化財第35集		
第65地点	住居跡 3軒、土器、土師器、石器			後期～古墳 志本市の文化財第36集		
第67地点	住居跡 8軒、竪立柱建物遺構 1棟、土器・石器			後期～古墳 志本市の文化財第37集		
第120地点	住居跡 4軒、方形周溝墓 1基、土器			後期～古墳 志本市遺跡調査会調査報告第15集		
第124地点	住居跡 3軒、土器			後期～古墳 志本市の文化財第39集		
第131地点	住居跡 2軒、方形周溝墓 5基、土器			後期～古墳 志本市遺跡調査会調査報告第15集		
第138地点	溝跡 1軒、土器小片			後期～古墳 志本市遺跡調査会調査報告第14集		
第154地点	住居跡 1軒、土器			後期～古墳 志本市遺跡調査会調査報告第14集		
	区画整理			住居跡 30軒、方形周溝墓 4基（記述のみ）	後期～古墳 西原大塚の遺跡内特定地区区画整理事業に伴う発掘調査概観	
15	市場裏			第1地点	住居跡 1軒、土器	後期 志本市の文化財第14集
				第4地点	住居跡 1軒、土器	後期 志本市の文化財第18集
				第10地点	住居跡 6軒、土器	後期 志本市の文化財第21集
		第19地点	遺構外出土土器	後期 志本市の文化財第29集		
		第31地点	住居跡 17軒（21号住居跡記述のみ）	後期 「田子山出土」文化財第22集		
		第32地点	方形周溝墓 1基	後期～古墳 志本市の文化財第23集		
4	古墳時代	第1地点	住居跡 1軒、土器	後期～古墳 志本市の文化財第24集		
		第2地点	方形周溝墓 2基、土器小片	後期～古墳 志本市の文化財第24集		
		第3地点	方形周溝墓 1基、土器小片	後期～古墳 志本市の文化財第20集		

4. 古墳時代

2	中野	第2地点	住居跡 1軒、土師器	後期 志本市遺跡調査会調査報告第1集		
		第7地点	住居跡 1軒	後期 志本市の文化財第15集		
		第12地点	住居跡 1軒、土師器多数	後期 志本市の文化財第17集		
		第16地点	住居跡 1軒、土師器	後期 志本市の文化財第24集		
		第18地点	住居跡 1軒、土師器、鉄器多数	後期 志本市の文化財第20集		
		第25地点	住居跡 10軒、土師器多数	後期 志本市の文化財第31集		
		第31地点	住居跡 1軒、土師器、鉄器、砥石	後期 志本市の文化財第21集		
		第41地点	住居跡 1軒、土師器多数、紡績車	後期 志本市の文化財第25集		
		第49地点	住居跡 1軒、土坑 2基、土師器	後期 志本市遺跡調査会調査報告第7集		
		第50地点	住居跡 1軒	後期 志本市の文化財第30集		
		3	城山	B地点	住居跡 2軒、土師・埴土器	後期 「志本市史 原始・古代資料編」
				第1・2地点	住居跡 54軒、土師器多数、須恵器、鉄・土製品	前・後期 志本市遺跡調査会調査報告第4集
				第3地点	住居跡 4軒、土師器	前・後期 志本市の文化財第11集
				第4地点	住居跡 1軒、土師器多数	後期 志本市の文化財第13集
				第6地点	住居跡 2軒、土坑 1基、土師器多数	後期 志本市の文化財第15集
第7・9地点	住居跡 7軒、土師器多数、鉄製品			中・後期 志本市の文化財第16集		
第11地点	住居跡 3軒、土師器			前・後期 志本市の文化財第17集		
第13地点	住居跡 1軒、土師器			後期 志本市の文化財第24集		
第15地点	住居跡 6軒、土師器			後期 志本市の文化財第34集		
25	第25地点	住居跡 2軒、土師器、初期須恵器	中・後期 志本市の文化財第23集			
		住居跡 1軒、土師・須恵器	後期 志本市の文化財第25集			
		住居跡 3軒、土師器	後期 志本市の文化財第27集			

第2表 志本市の時代別みた考古資料一覧（2）

第1章 遺跡の立地と環境

No.	遺跡名	地点名	掲載された主な遺構・遺物	報告書一覧No.及び資料索引
3	城山	第35地点	住居跡 1軒、土師器多数	後期 志本市の文化財第27集
		第42地点	住居跡 16軒、土師・須恵器、土製品、鉄製品多数	後期 志本市遺跡調査会調査報告第10集
		第46地点	住居跡 5軒、土師・須恵器、ミネチュア土器、ガラス小玉	中・後期 志本市の文化財第38集
		第49地点	住居跡 2軒、土師器	後期 志本市の文化財第39集
		第55地点	住居跡 3軒、土師・須恵器、土製品、炭化種実	後期 志本市の文化財第38集
		第57地点	住居跡 2軒、土師器	不明 志本市の文化財第39集
		第61地点	住居跡 2軒、土師器	後期 志本市遺跡調査会調査報告第16集
		第2地点	住居跡 3軒、土師器	後期 志本市遺跡調査会調査報告第5集
		第12地点	住居跡 3軒、土師器	後期 志本市の文化財第18集
		第13地点	住居跡 1軒、土師器	後期 志本市の文化財第18集
第21地点	住居跡 2軒、溝跡 1本、土師器、鉄製品(鎌彩色1点)	後期 志本市の文化財第24集		
第33地点	住居跡 1軒、土師・須恵器	後期 志本市の文化財第23集		
第36地点	住居跡 1軒、土師器	前期 志本市の文化財第25集		
第37地点	住居跡 1軒、土師器多数、須恵器小片、土製品	中期 志本市の文化財第25集		
7	西原大塚	市史掲載 土師器	前期 「志本市史 原始・古代資料編」	
		第11地点	方形埴溝竪 1基、壟槽 1基、土師器	前期 志本市の文化財第16集
		第43地点	住居跡 1軒、土師器	後期 志本市の文化財第30集
		第45地点	住居跡 2軒、土師器	後期 志本市遺跡調査会調査報告第6集
		第111地点	住居跡 1軒、土師器	前期 志本市遺跡調査会調査報告第9集
		第110地点	住居跡 7軒、壟・壘・高坏・鉢形土器	前期 志本市遺跡調査会調査報告第8集
		第2地点	住居跡 1軒、土師器	前期 志本市遺跡調査会調査報告第3集
8	新 郷	第2地点	住居跡 1軒、土師器	前期 志本市遺跡調査会調査報告第3集
		第3地点	住居跡 3軒、方形埴溝竪 1基、土坑 2基、土師器、ガラス小玉、ペンガ埴	前・後期 志本市遺跡調査会調査報告第11集
		第5地点	住居跡 1軒、土師・須恵器、炭化種子(ヤマモモ多数)	後期 志本市の文化財第18集
10	田子山	第13地点	住居跡 1軒、土師器(断文土器1点あり)	後期 志本市の文化財第24集
		第29地点	住居跡 2軒、土師・須恵器	後期 志本市の文化財第21集
		第48地点	住居跡 1軒、土師器(楕円型坏あり)	後期 志本市の文化財第27集
		第69地点	住居跡 1軒、土師器	後期 志本市の文化財第32集
		市史掲載 土師器多数	前期 「志本市史 原始・古代資料編」	
11	富士前	第15地点	住居跡 1軒、土師器(元屋敷系高坏あり)	前期 志本市の文化財第27集
		市史掲載 土師器(S字型小)	前期 「志本市史 原始・古代資料編」	
6. 奈良・平安時代	2 中野	第2地点	住居跡 1軒、須恵器	8c後半 志本市遺跡調査会調査報告第1集
		第16地点	住居跡 3軒、須恵器	9c中葉 志本市の文化財第24集
		第25地点	住居跡 2軒	平安時代 志本市の文化財第31集
		第41地点	住居跡 1軒、土師・須恵器、鉄製品、転用紡錘車	9c後半 志本市の文化財第25集
		第43地点	住居跡 1軒、土師・須恵器、鉄器	9c前半 志本市の文化財第27集
		第49地点	住居跡 1軒、土坑 5基、土師・須恵器、磁石	9c中葉～後葉 志本市の文化財第27集
		第1・2地点	住居跡 6軒、灰釉陶器、土師・須恵器多数、鉄・石製品	8～10c 志本市遺跡調査会調査報告第4集
		第4地点	土坑 2基、灰釉陶器、須恵器(新簡・粟谷ツ座)	10c前半 志本市の文化財第13集
		第7地点	住居跡 1軒、灰釉陶器	9cか? 志本市の文化財第16集
		第11地点	住居跡 1軒	平安時代 志本市の文化財第17集
		第16地点	住居跡 1軒、土師・須恵器	平安時代 志本市の文化財第34集
		第29地点	住居跡 1軒	平安時代 志本市の文化財第25集
第35地点	住居跡 2軒、刷印、布目瓦、緑釉陶器片、土師・須恵器	9c後半 志本市の文化財第27集		
第42地点	住居跡 5軒、土坑 13基、ビッド 4本、土師器、須恵器、布目瓦、偏向唐草文の軒平瓦、鉄製品、	8代 9c後半 志本市遺跡調査会調査報告第10集		
第46地点	住居跡 1軒、溝跡 1本、土師・須恵器小片、鉄製品	9c中～末葉 志本市の文化財第38集		
第55地点	溝跡 1本、土師・須恵器小片、第46地点と同一溝跡	9c中～末葉 志本市の文化財第38集		
第61地点	住居跡 2軒、土師・須恵器	8c後半～9c 志本市遺跡調査会調査報告第16集		
5 中道	12地点	住居跡 2軒、土師・須恵器	9c後半 志本市の文化財第18集	
		住居跡 1軒	9c後半 志本市の文化財第24集	
		住居跡 1軒、溝跡 1本、灰釉陶器片、土師・須恵器	9c後半 志本市の文化財第24集	
		住居跡 1軒、溝跡 1本、灰釉陶器片、須恵器、炭化米	9～10c 志本市の文化財第27集	
		土坑 1基	平安～中世 志本市の文化財第28集	
		住居跡 1軒、土坑 3基、額立柱建遺構 1棟、土師・須恵器	奈良・平安 志本市遺跡調査会調査報告第12集	
		住居跡 3軒	平安時代 志本市の文化財第14集	
7 西原大塚	第34地点	住居跡 1軒	平安時代 志本市の文化財第25集	
		土坑 1基、溝跡 1本、土師器・須恵器小片	平安時代 志本市の文化財第37集	
		住居跡 1軒、ビッド 1本、土師・須恵器	8c前半 志本市遺跡調査会調査報告第14集	
		住居跡 1軒、土師・須恵器	8～10c 志本市の文化財第18集	
10 田子山	第5地点	住居跡 1軒、土師・須恵器	8～10c 志本市の文化財第18集	
		住居跡 1軒、土師・須恵器、刀子、土師	9c後半 志本市の文化財第17集	
		住居跡 1軒、布目瓦小片2点、格子目叩き瓦小片1点	8c後半 志本市の文化財第17集	
		住居跡 1軒、土師・須恵器、鉄製品	9～10c 志本市の文化財第29集	
		住居跡 3軒、土坑 1基、土師・須恵器、鉄製品	8代 志本市の文化財第29集	
		住居跡 5軒、土師・須恵器、磁石	9c後半 志本市の文化財第29集	
		住居跡 1軒、須恵器・布目瓦1点	9～10c 志本市の文化財第21集	
第37地点	土坑 2基、須恵器	9～10c 志本市の文化財第23集		

第2表 志本市の時代別みた考古資料一覧(3)

No.	遺跡名	地点名	掲載された主な遺構・遺物		報告書一覧No.及び資料索引
10	田子山	第39地点	溝跡 3本、土師・須恵器小片	9c代	志本市の文化財第25集
		第41・42地点	住居跡 1軒、土坑 1基、土師・須恵器、鉄・銅製品	9b~10c	志本市の文化財第25集
		第47地点	住居跡 2軒、土坑 1基、土師・須恵器、鉄・石製品	9c以降	志本市の文化財第27集
		第49地点	住居跡 2軒、土師・須恵器	10c代	志本市の文化財第27集
		第69地点	住居跡 1軒、溝跡 1本、土師・須恵器	9c以降	志本市の文化財第32集
		第78地点	住居跡 2軒、土師・須恵器	9c前~後半	志本市の文化財第35集
		第81地点	住居跡 1軒、土坑 1基、溝跡 1本、須恵器、鉄製品	9後半、 1Mは古墳か?	志本市の文化財第36集
		第97地点	住居跡 2軒、溝跡 1本、掘立柱建遺構 1本、土師・須恵器	9後半	志本市遺跡調査会調査報告第15集
6. 中・近世					
2	中野	第2地点	溝跡 1本	不明	志本市遺跡調査会調査報告第1集
		第6地点	溝跡 1本	不明	志本市の文化財第13集
		第8地点	土坑 1基	不明	志本市の文化財第15集
		第11地点	土坑 1基、陶磁器小片	18~19c	志本市の文化財第24集
		第25地点	土坑 15基、陶磁器・瓦器小片	近世	志本市の文化財第31集
		第43地点	井戸跡 1基	不明	志本市の文化財第27集
		第49地点	段切状遺構 1ヶ所、井戸跡 4基、土坑 12基、人骨、陶磁器、鉄製品、石製品、板碑など	中・近世	志本市遺跡調査会調査報告第7集
		C地点	柏城跡の大堀跡 1本、陶磁器	中・近世	「志本市史 原始・古代資料編」 「志本市史 中世資料編」
3	城山	A地点	溝跡 1本	中世	「志本市史 原始・古代資料編」
		C地点	柏城跡の大堀跡 1本、陶磁器	中・近世	「志本市史 中世資料編」
		第1・2地点	柏城跡関連の堀跡 5本、土坑 32基、井戸跡 10基、掘立柱建遺構・ピット群、陶磁器多数、銅鏡、鉄・石製品	中・近世	志本市遺跡調査会調査報告第4集
		第3地点	土坑 16基、溝跡 2本	中・近世	志本市の文化財第11集
		第4地点	土坑 1基	14~15c	志本市の文化財第13集
		第6地点	土坑 7基	中・近世	志本市の文化財第15集
		第7・9地点	土坑 3基、土製品	中・近世	志本市の文化財第16集
		第11地点	土坑 3基、井戸跡 1基、陶磁器、板碑、馬歯	中・近世	志本市の文化財第17集
		第12地点	土坑 2基、井戸跡 1基、溝跡 5本、陶磁器、古銭	中・近世	志本市の文化財第24集
		第15地点	溝跡 2本（柏城関連）、陶磁器、かわらけ	中・近世	志本市の文化財第31集
		第16地点	井戸跡 2基、溝跡 2本（柏城関連）、陶磁器、かわらけ、鉄製品（火打金・釘）、板碑	中・近世	志本市の文化財第31集
		第25地点	土坑 2基	中・近世	志本市の文化財第25集
		第29地点	土坑 11基、溝跡 1本、ピット群、板碑、陶磁器、馬歯、古銭など	中・近世	志本市の文化財第25集
		第35地点	土坑 15基（掘遺土坑1基・溶解9基）、井戸跡 1基、銅型、土・鉄製品、陶磁器、古銭など	中・近世	志本市の文化財第27集
		第42地点	土坑 151基、井戸跡8基、溝跡 4本（柏城関連）、ピット群、陶磁器・かわらけ・瓦・鉄製品・銅製品・板碑	中世以降	志本市遺跡調査会調査報告第10集
		第46地点	土坑 25基、地下室 2基、井戸跡 4基、道路状遺構 1基、ピット群、陶磁器、土器、銅銭	中世以降	志本市の文化財第38集
第49地点	土坑 3軒、地下室 1基、井戸跡 1基、陶磁器・土器、土製品	中世以降	志本市の文化財第39集		
第55地点	土坑 1基、地下室 1基、陶磁器、土器、土製品・石製品、瓦	中世以降	志本市の文化財第38集		
第57地点	土坑 6基、土坑墓 1基、地下室 1基、陶磁器・土器、骨片	中世以降	志本市の文化財第39集		
第61地点	土坑 28軒、地下室 1基、井戸跡 1基、溝跡 2本、陶磁器、銅銭	中世以降	志本市遺跡調査会調査報告第16集		
5	中道	第2地点	土坑4基、土坑墓2基、地下式坑2基、溝跡 14本、掘立柱建物跡4棟、古銭、陶磁器	中・近世	志本市遺跡調査会調査報告第5集
		第6地点	土坑 1基、陶磁器小片	15c代	志本市の文化財第13集
		第26地点	土坑 6基（土坑墓2基）、掘立柱建物跡、人骨、古銭など	17c代	志本市の文化財第24集
		第27地点	土坑 2基、土坑 2基、陶磁器	14~15c	志本市の文化財第24集
		第36地点	溝跡 2本、ピット群、陶磁器小片	中・近世	志本市の文化財第25集
		第37地点	土坑墓 1基、道路遺構 1本、人骨、青磁盤、古銭	中世	志本市の文化財第25集
		第44地点	溝跡 2本	中・近世	志本市の文化財第28集
		第65地点	土坑 16基、ピット、陶磁器、土器、土製品、瓦	近世遺構	志本市遺跡調査会調査報告第12集
7	西原大塚	遺構外出土陶磁器・土器	中・近世	志本市の文化財第14集	
		第154地点	土坑 1基	中世以降	志本市遺跡調査会調査報告第14集
		第1地点	土坑 17基、井戸跡 1基、溝跡 2本	中・近世	志本市遺跡調査会調査報告第2集
		第3地点	土坑 1基、溝跡 2本、陶磁器	中・近世	志本市の文化財第15集
8	新郷	第8地点	火葬墓 2基、土坑 1基、人骨、陶磁器、土器、石製品、銅銭	中・近世	志本市遺跡調査会調査報告第11集
		第25地点	遺構外出土陶磁器	中・近世	志本市の文化財第29集
10	田子山	第81地点	遺構外出土陶磁器・土器、泥面子	近世	志本市の文化財第36集
		第1地点	溝跡 1本	近世	志本市の文化財第29集
7. 近世以降					
3	城山	第35地点	かわらけ 2点	19c後半	志本市の文化財第27集
		第8地点	土坑 1基、井戸跡 1基、溝跡（野火止用水跡）2本、陶磁器、土器、石製品、練瓦、銅銭	近・現代	志本市遺跡調査会調査報告第11集
10	田子山	第31地点	ローム採掘遺構 2ヶ所	19c後半	「田子山富士」文化財第22集
		第49地点	土坑 1基	近・現代	志本市の文化財第27集
15	市場裏	第3地点	かわらけ 2点	19c代	志本市の文化財第20集

第2表 志本市の時代別みた考古資料一覧（4）

図」に相当する堀跡などが多数発見されている。最新では、『廻回雑記』(註2)に登場する「大石信濃おおいししのぶからのからのかた守館」が「柏の城」に相当し、「大塚十玉坊」についても市内の「大塚」に由来があるという説が有力と言えるであろう(神山 1988・2002)。

また、平成7(1995)年に発掘調査が実施された第29地点の127号土坑からは、馬の骨が検出されている。この土坑からは、板碑と土師質土器の他、炭化種子(イネ・オオムギ・コムギなど)も出土しており、イネの塊状のものは「おにぎり」あるいは「ちまき」のようなものであるという分析結果が報告されている。

さらに、第35地点では、鑄造関連の遺構も検出されている。130号土坑については鑄造遺構、134号土坑については溶解炉に該当し、遺物としては、大量の鉄滓(スラッグ)、鋳型、三叉状の土製品、砥石などが出土している。また平成13年の第42地点からは、多くの土坑・地下室・井戸跡が検出される中、234号土坑から、鉄鍋の完形品が出土したことは特筆すべきである。この鉄鍋は、土坑の坑底面に伏せてある状況で出土しており、「鍋被り葬」と呼ばれる風習が志木市でも実在していた可能性が高い。

今回報告する城山遺跡第21地点では、当市では初めて、鍔の札である鉄製品1点と鉄織1点が出土した。出土した遺構は、19世紀前半の86号土坑であるため、混入品となるが、戦国期の資料としては、「柏の城」に関連して大変貴重な資料に加わったと言える。

平成11~14(1999~2002)年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点からは、頭を北に向け横臥屈葬された人骨を出土した67号土坑が検出されている。その他、ビット列・土坑・溝跡などが検出されていることから、この一帯が『館村旧記』に記載がある「村中の墓場」関連に相当する施設ではないかと考えられる。

中道遺跡では、昭和62(1987)年の第2地点から人骨を伴う地下式坑、掘立柱建築遺構が検出され、平成7(1995)年の中道遺跡第37地点からは、人骨と古銭5枚を出土した土坑墓1基と13世紀に比定される青磁盤1点を出土した道路状遺構1条が検出されている。

新邸遺跡では、昭和60(1985)年の第1地点から段切状遺構の平場から多数の土坑・地下式坑が検出され、平成15(2003)年の新邸遺跡第8地点からは、人骨と六文銭を伴う火葬墓2基が検出されている。おそらく、この新邸遺跡から中道遺跡一帯は、『館村旧記』に記載がある「大塚千手堂」であり、古くは天台宗の「七堂大伽藍」を誇る「松林山観音寺大受院しょうりんざんくわんおんじどううけいん」関連遺構として、今後は体系的な究明が必要とされるであろう。

7. 近代以降

近代以降の遺跡では、平成5(1993)年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点から、敷島神社境内に存在する富士塚の築造(明治2~5年)に関連するローム採掘遺構が検出されている。この遺構の坑底面からは、鋤・鍬などの無数の工具痕が観察され、採掘作業がかなり組織的な単位で行われていたこともわかり、地域研究の重要な資料と言える。

平成15(2003)年の新邸遺跡第8地点からは、野火止用水跡が検出され、市内初の発掘調査例となった。用水路の基盤面からは水付きの銹着面が確認され、底面からは大量の陶磁器が出土した。

第2節 城山遺跡の概要

ここで、今回本書で報告する城山遺跡について概観することにする。

城山遺跡は、志木市柏町3丁目を中心に広がる遺跡で、東武東上線志木駅の北西約1.2kmに位置している。遺跡は、柳瀬川右岸の台地上に立地しており、標高は約12m、低地との比高差は約5mである。

遺跡の周辺を眺めると、現況は住宅地を主としているが、小学校・神社・墓地などが存在することから、市内の台地上では比較的緑地を多く残している地区と言える。しかし、平成13(2001)年度の第42地点、そして平成18・19年度の第58・60地点により、大規模開発は一段落し、今後は個人住宅建設の新築及び建て替え等を中心とする小規模開発の増大が予想される。

さて、城山遺跡は、これまでに61回の調査(平成20年9月まで)が実施され、縄文時代草創・前・中期、弥生時代後期、古墳時代前・中・後期、奈良・平安時代、中・近世に至る複合遺跡であることが判明している。そこで、これまでに城山遺跡からどのような遺構・遺物が検出されたかを今までの発掘調査の成果から代表的な例を挙げ、大まかに振り返ってみることにしたい(第4表)。

まず、城山遺跡における最初の発掘調査は、昭和49(1974)年に実施されたA地点に始まる。この調査は、市史編さん事業の一環で志木市立志木第3小学校の校庭内を発掘調査したものである。この調査により、縄文時代前期の諸磯a式期の住居跡1軒と弥生時代後期の住居跡1軒、中世の溝跡1本が検出されている。特に、この地区から縄文時代前期の住居跡が検出されたことは、同遺跡に存在する城山貝塚との関連で注目されるものとなった。

昭和55(1980)年には「柏の城」の大堀の実体を解明する目的で、市史編さん室によるトレンチ発掘が実施され、上幅9.02m・下幅1.6m・深さ4.7mの大堀跡の細部形態が明らかになった。

昭和60(1985)年には、志木市遺跡調査会により、城山遺跡第1地点の発掘調査が実施された。この調査は、面積約5,000㎡という市内では初の大規模調査となり、古墳時代前期の住居跡1軒、後期の住居跡53軒、奈良・平安時代の住居跡6軒、中・近世では「柏の城」の大堀跡を含め、土坑・井戸跡・溝跡・ピット群など多くの遺構・遺物が検出された。同時にこの調査を契機に志木市では、本格的に発掘調査体制が整備されたことは重要であろう。

昭和61(1986)年、志木ロータリークラブのボランティア事業の一環として、市教育委員会が主体となり、発掘調査が行われ、弥生時代末葉から古墳時代初頭の住居跡1軒、古墳時代後期の住居跡3軒、中・近世の土坑17基が検出された。

昭和62(1987)年、本市では、国庫及び県費の補助金を導入し、個人専用住宅建設等に伴う発掘調査を開始した。この年は城山遺跡では第4地点の発掘調査が実施され、縄文時代中期の埋篋1基、弥生時代末葉から古墳時代初頭の住居跡1軒、平安時代の土坑2基、中・近世の地下室1基が検出された。

平成元(1989)年、第7・9地点の発掘調査が実施され、古墳時代後期の住居跡7軒、平安時代の住居跡1軒、中・近世の土坑5基が検出された。この調査は、第1地点よりも台地の奥まった地区ではあったが、古墳時代後期の住居跡が密集して分布することが判明し、改めて集落の広がりを理解するのに重要であったと言える。

平成2(1990)年の第12地点の調査では、中・近世に比定される地下室・井戸跡・溝跡が検出されている。これらについては、『館村日記』(註3)の屋敷割之図では表記されていないが、「柏の城」関連

第1章 遺跡の立地と環境

No.	報告書名	発行年	シリーズ名	発行者	執筆者
1	西原・大塚遺跡発掘調査報告書	1975	志本市の文化財第4集	志本市教育委員会	井上誠夫・高谷芳男 谷津由・志賀利明
2	西原大塚遺跡第3地点・中野遺跡第2地点発掘調査報告書	1985	志本市遺跡調査会調査報告第1集	志本市遺跡調査会	佐々木保俊・尾形明敏
3	新原遺跡発掘調査報告書	1986	志本市遺跡調査会調査報告第2集	志本市遺跡調査会	佐々木保俊・尾形明敏
4	新原遺跡第2地点・西原大塚遺跡第4地点発掘調査報告書	1987	志本市遺跡調査会調査報告第3集	志本市遺跡調査会	佐々木保俊・尾形明敏
5	城山遺跡発掘調査報告書	1988	志本市遺跡調査会調査報告第4集	志本市遺跡調査会	佐々木保俊・尾形明敏 神山隆吉
6	中道遺跡発掘調査報告書	1988	志本市遺跡調査会調査報告第5集	志本市遺跡調査会	佐々木保俊・尾形明敏
7	城山遺跡長持院地穴発掘調査報告書	1987	志本市の文化財第11集	志本市教育委員会 志本市遺跡調査会 志本ロータリークラブ	佐々木保俊
8	志本市遺跡群 I	1989	志本市の文化財第13集	志本市教育委員会	佐々木保俊・尾形明敏
9	志本市遺跡群 II	1990	志本市の文化財第14集	志本市教育委員会	佐々木保俊・尾形明敏
10	西原大塚遺跡第7地点・新原遺跡第3地点・中野遺跡第7地点・中野遺跡第8地点・城山遺跡第6地点発掘調査報告書	1991	志本市の文化財第15集	志本市教育委員会	佐々木保俊・尾形明敏
11	志本市遺跡群 III	1991	志本市の文化財第16集	志本市教育委員会	佐々木保俊・尾形明敏
12	志本市遺跡群 IV	1992	志本市の文化財第17集	志本市教育委員会	佐々木保俊・尾形明敏
13	中道遺跡第12地点・中道遺跡第13地点・田子山遺跡第4地点・田子山遺跡第5地点発掘調査報告書	1992	志本市の文化財第18集	志本市教育委員会	佐々木保俊・尾形明敏
14	志本市遺跡群 V	1993	志本市の文化財第20集	志本市教育委員会	尾形明敏
15	志本市遺跡群 VI	1995	志本市の文化財第21集	志本市教育委員会	尾形明敏
16	志本市遺跡群 VII	1996	志本市の文化財第23集	志本市教育委員会	佐々木保俊・尾形明敏 深井恵子
17	城山遺跡第12地点・城山遺跡第13地点・西原大塚遺跡第14地点・中野遺跡第11地点・中野遺跡第16地点・市場遺跡第1地点・田子山遺跡第10地点・中道遺跡第11地点・田子山遺跡第13地点・西原大塚遺跡第21地点・市場遺跡第2地点・中道遺跡第26地点発掘調査報告書	1996	志本市の文化財第24集	志本市教育委員会	佐々木保俊・尾形明敏
18	志本市遺跡群 VIII	1997	志本市の文化財第25集	志本市教育委員会	佐々木保俊・尾形明敏 深井恵子
19	西原大塚の遺跡・西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査概報	1988	-	志本市遺跡調査会 西原特定土地区画整理組合	佐々木保俊
20	志本市遺跡群 9	1999	志本市の文化財第27集	志本市教育委員会	尾形明敏・深井恵子
21	志本市遺跡群 10	2000	志本市の文化財第28集	志本市教育委員会	尾形明敏・深井恵子
22	埋蔵文化財調査報告書 1	2000	志本市の文化財第29集	志本市教育委員会	尾形明敏・深井恵子
23	西原大塚遺跡第45地点発掘調査報告書	2000	志本市遺跡調査会調査報告第6集	志本市遺跡調査会 小松フォークリフト株式会社	佐々木保俊・内野美津江 宮川幸佳・土田寛
24	志本市遺跡群 11	2001	志本市の文化財第30集	志本市教育委員会	尾形明敏・佐々木保俊 内野美津江
25	埋蔵文化財調査報告書 2	2001	志本市の文化財第31集	志本市教育委員会	尾形明敏・深井恵子
26	志本市遺跡群 12	2002	志本市の文化財第32集	志本市教育委員会	尾形明敏・佐々木保俊 深井恵子
27	埋蔵文化財調査報告書 3	2002	志本市の文化財第34集	志本市教育委員会	尾形明敏・佐々木保俊 深井恵子・佐々木尚
28	志本市遺跡群 13	2003	志本市の文化財第35集	志本市教育委員会	尾形明敏・深井恵子
29	中野遺跡第49地点・東京電力志本変電所の埋蔵文化財発掘調査報告書一	2004	志本市遺跡調査会調査報告第7集	志本市遺跡調査会	尾形明敏・深井恵子 青木藤
30	志本市遺跡群 14	2004	志本市の文化財第36集	志本市教育委員会	尾形明敏・深井恵子 青木藤
31	西原大塚遺跡第111地点	2005	志本市遺跡調査会調査報告第8集	志本市遺跡調査会	佐々木保俊・内野美津江 宮川幸佳
32	西原大塚遺跡第110地点	2005	志本市遺跡調査会調査報告第9集	志本市遺跡調査会	佐々木保俊・内野美津江 宮川幸佳
33	城山遺跡第43地点	2005	志本市遺跡調査会調査報告第10集	志本市遺跡調査会	尾形明敏・深井恵子 青木藤
34	志本市遺跡群 15	2006	志本市の文化財第37集	志本市教育委員会	尾形明敏・深井恵子

第3表 志本市の発掘調査報告書一覧(1)

No.	報告書名	刊行年	シリーズ名	発刊者	執筆者
35	新居遺跡第8地点	2007	志本市遺跡調査会調査報告第11集	志本市遺跡調査会	尾形明敏・深井亜子 青木藤
36	中道遺跡第65地点	2007	志本市遺跡調査会調査報告第12集	志本市遺跡調査会	尾形明敏・藤波啓容 青柳英尚
37	志本市遺跡群16	2008	志本市の文化財第38集	志本市教育委員会	尾形明敏・深井亜子 青木藤
38	西原大塚遺跡第138地点西原大塚遺跡第154地点埋蔵文化財発掘調査報告書	2008	志本市遺跡調査会調査報告第14集	志本市遺跡調査会	尾形明敏・深井亜子 青木藤
39	西原大塚遺跡第120地点西原大塚遺跡第131地点田子山遺跡第97地点埋蔵文化財発掘調査報告書	2008	志本市遺跡調査会調査報告第15集	志本市遺跡調査会	佐々木保俊・内野美津江 宮川幸佳
40	志本市遺跡群17	2008	志本市の文化財第39集	志本市教育委員会	尾形明敏・深井亜子 青木藤
41	城山遺跡第61地点埋蔵文化財発掘調査報告書	2008	志本市遺跡調査会調査報告第16集	志本市遺跡調査会	尾形明敏・深井亜子 青木藤

第3表 志本市の発掘調査報告書一覧(2)

の遺構と考えられる。

平成4(1992)年には、第15・16地点の調査が実施された。第15地点は志本市立志本第3小学校の西校舎裏の道路工事に伴うもので、この調査では、柏城の本丸を囲む大堀と考えられる遺構が検出されたことに注目される。第16地点は、第15地点から東方向に150m程の近距離に位置しており、ここでも「柏の城」関連の溝跡等が検出されている。また、第16地点は縄文時代の遺物包含層が発達しており、多くの縄文土器が出土している。中でも草創期の爪形文土器が1点検出されたことには注目される。

平成5(1993)年には、志本市立志本第3小学校の雨水抑制工事に伴う調査により、縄文時代の土坑1基、弥生時代後期の住居跡1軒、古墳時代の住居跡8軒、中・近世の土坑6基・溝跡6本が検出された。中・近世の溝跡については、「柏の城」関連の堀跡に相当するものと考えられる。

平成6(1994)年、第25地点の発掘調査が実施され、古墳時代中期の住居跡1軒・後期の住居跡1軒、近世の地下室1基・溝跡1本が検出された。古墳時代中期の住居跡については、屋内炉を有するもので、遺物には土師器・須恵器が出土している。特に須恵器は、陶邑産の大型器台の脚部破片の他、坏蓋の破片で、その特徴からTK216型式(5世紀前葉から中葉)に比定される可能性があり、市内では最古のものとなった。

平成7(1995)年の第29地点の調査では、縄文時代早期の土坑1基、古墳時代後期の住居跡2軒、平安時代の住居跡1軒、中・近世の土坑11基・溝跡1本・ビット群が検出されている。特筆すべきは、中世に比定される127号土坑から、馬の埋葬土坑が検出されたことである。馬は頭部及び上半部を欠くが、板碑の直下で、横臥屈葬された状態で埋葬されており、同時に土師質土器・炭化種子(イネ・オオムギ・コムギ)が出土している。中でも、イネの塊状のものは、「おにぎり」あるいは「ちまき」のようなものと分析結果が報告されている。

平成8(1996)年の第35地点の調査では、個人専用住宅という狭小な面積(84.40㎡)ではありながら、調査区全面から、弥生時代後期の住居跡1軒、古墳時代後期の住居跡1軒、平安時代の住居跡2軒、中・近世の鋳造土坑1基・溶解炉1基・井戸跡1基などが密集して検出された。この調査で特筆すべきは、平安時代の128号住居跡から、県内初の出土である「冨」印と市内初の猿投製品の緑釉陶器片が出土したこと、さらに、17世紀中頃から後半に比定される鋳造遺構に関連する鋳造土坑・溶解炉、そして数多くの鋳型・鉄滓・道具類が出土したことである。

平成10・11・12年は、城山遺跡での発掘調査は実施されなかった。

平成13(2001)年には、第42地点の調査が実施された。この調査からは、旧石器時代の石器集中地点2ヶ所、縄文時代の土坑21基・炉穴1基、古墳時代後期の住居跡16基、奈良・平安時代の住居跡5軒・土坑13基・ピット4本、中世以降の土坑151基・井戸跡8基・溝跡4本などの多くの遺構・遺物が検出された。

平成15(2003)年には、第46地点の調査が実施され、縄文時代前期諸磯期の住居跡1軒、古墳時代後期の住居跡5軒、平安時代の住居跡1軒・溝跡1本、中・近世の道路状遺構1本・土坑26基・井戸跡4本・ピット列が検出された。

平成16(2004)年度には、第49地点と第55地点の発掘調査が実施された。第49地点からは、縄文時代の土坑1基、古墳時代後期の住居跡2軒、近世の土坑6基が検出された。第55地点は、第46地点のすぐ東側に隣接し、縄文時代の土坑2基、古墳時代後期の住居跡3軒、平安時代の溝跡1本、近世の土坑2基が検出された。溝跡については、第46地点と同一遺構と思われ、東西方向に延びていることが判明した。近世の土坑のうち1基は地下坑で、主体部は通路状の横坑構造をもつ特殊タイプであった。

平成18・19(2006・2007)年には、第58・60地点の調査が実施された。この調査からは、縄文時代の土坑4基、古墳時代中・後期の住居跡52軒、奈良・平安時代の住居跡10軒・溝跡1本・掘立柱建築遺構2棟、中世以降の土坑213基・溝跡12本・井戸跡5基・道路状遺構1本など多くの遺構・遺物が検出された。

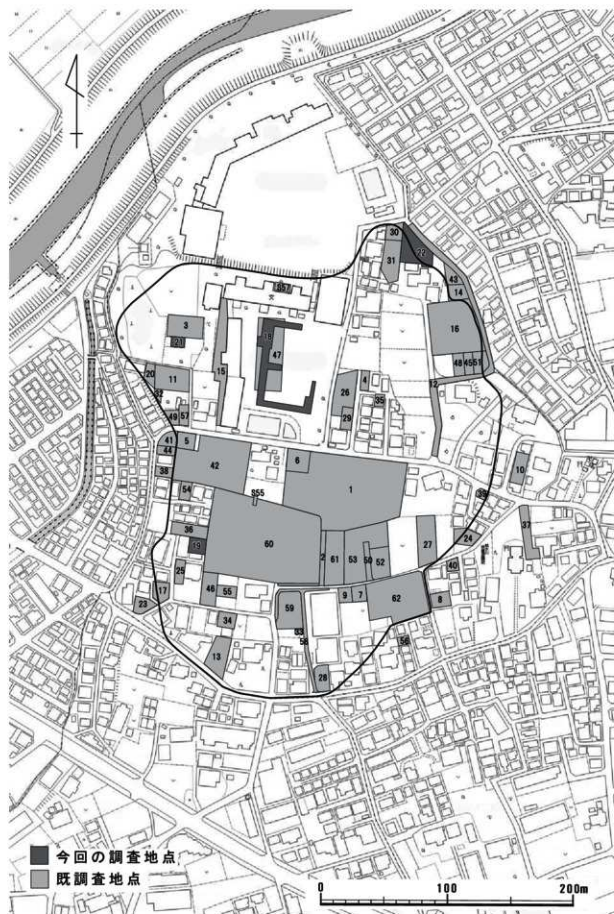
また、第59・61地点の調査も実施され、第59地点からは、縄文時代前期の住居跡1軒、古墳時代後期の住居跡4軒、平安時代の住居跡2軒・掘立柱建築遺構2棟・近世の土坑1基が検出された。第61地点からは縄文時代の土坑1基、古墳時代後期の住居跡2軒、平安時代の住居跡2軒、中世以降の土坑28基・地下室1基・井戸跡1基・溝跡2本が検出された。

平成20年度からは、志木市における発掘調査は、従来からの遺跡調査会方式は廃止され、市直営によるものに変更された。第62地点は、分譲住宅建設に伴うものであるが、市直営による初めての発掘調査になった。この調査は、工事計画により第1期(第62-1地点)と第2期(第62-2地点)に分けて実施された。第62-1地点では、古墳時代後期の住居跡2軒、平安時代の住居跡1軒、中世以降の土坑7基、地下室1基、溝跡1本が検出された。第62-2地点は現在調査が進行中である。

以上の調査から、城山遺跡は、旧石器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代・平安時代・中・近世、近代の複合遺跡であり、また、複合する密度も散在的ではなく、市内では最も濃密な地区であることが判明してきている。

最後に、本遺跡の特色を時代別にまとめると、以下のとおりである。

- 旧石器時代 第42地点から石器集中地点2ヶ所が検出された。
- 縄文時代 草創期の土器として、第16地点と本報告の第22地点から草創期の爪形文系土器1点ずつが出土した。また、本報告の第21地点から草創期の多縄文系土器3点が出土した。市指定文化財の城山貝塚が存在する。城山貝塚は前期の斜面貝塚で、未調査である。前期の諸磯期の住居跡が3軒検出されている。第4地点から中期後葉(加曾利E2式期)の住居跡1軒が検出されている。
- 弥生時代 後期末葉から古墳時代前期の住居跡4軒が検出されている。
- 古墳時代 前期の住居跡2軒検出されている。中期から後期の大集落である。5世紀後半から7世紀後半にかけての住居跡が約200



第2図 城山遺跡の調査地点 (1/3000)

平成21年1月20日現在

第1章 遺跡の立地と環境

調査地点	面積(m ²)	確認調査日	発掘調査期間	調査原因	遺構の概要	報告書№
A地点	90.00		昭和49年7月29日 ～8月4日	学術調査	(縄文前期)住居跡1軒(弥生後期)住居跡1軒(中世)溝跡1本	1984『志木市史原稿・古写真編』
C地点	30.00		昭和55年7月20日 ～8月21日	学術調査	(中世)柏城大堀跡	1986『志木市史中世資料編』
B地点	50.00		昭和57年3月25日 ～3月31日	学術調査	(古墳後期)住居跡2軒(中世)溝跡1本	1984『志木市史原稿・古写真編』
第1・2地点	4,964.39		昭和60年4月8日 ～11月26日	共同住宅建設	(古墳前期)住居跡1軒(古墳後期)住居跡53軒(奈良・平安)住居跡6軒(中・近世)土坑31基・溝跡5本・井戸跡9基・ビット	№5
第3地点	300.00		昭和61年7月21日 ～8月30日	学術調査	(古墳前期)住居跡1軒(古墳後期)住居跡3軒(中・近世)土坑16基・溝跡2本	№7
第4地点	92.28		昭和62年6月19日 ～7月1日	個人住宅建設	(縄文中期)埋蔵1基(弥生後期)住居跡1軒(平安)土坑2基(中世)土坑1基(不明)土坑1基	№8
第5地点	125.00	昭和63年 6月10日		共同住宅建設	検出されなかった	№9
第6地点	166.08		昭和68年12月12日 ～12月28日	共同住宅建設	(古墳後期)住居跡2軒、土坑1基(中・近世)土坑7基	№10
第7地点	130.00	平成元年 11月17日	11月20日～12月4日	宅地造成	(古墳後期)住居跡1軒(平安)住居跡1軒	№11
第8地点	132.13	11月23日		共同住宅建設	検出されなかった	№11
第9地点	115.71	12月4日	12月4日～18日	宅地造成	(古墳後期)住居跡6軒(中・近世)土坑5基	№11
第10地点	330.49	平成2年 3月16日		共同住宅建設	検出されなかった	№11
第11地点	192.00	4月6日	4月7日～20日	個人住宅建設	(縄文早期)穴2基(縄文前期)土坑1基(縄文中期)住居跡1軒、土坑2基(古墳前期)住居跡1軒(古墳後期)住居跡2軒(平安)住居跡1軒(中・近世)土坑3基、井戸跡1基	№12
第12地点	1,074.00	4月19日 ～24日	4月25～5月22日	道路改良工事	(中・近世)土坑2基、溝跡4基、井戸跡1基	№17
第13地点	400.44	5月7日	5月8日～17日	共同住宅建設	(古墳後期)住居跡1軒	№17
第14地点	181.90	平成4年 5月1日		個人住宅建設	検出されなかった	№15
第15地点	560.00	平成4年7月21日 ～8月21日		道路工事	(古墳後期)住居跡6軒(中・近世)溝跡2本・土坑1基	№27
第16地点	1,556.00	平成4年10月2日 ～12月11日		共同住宅建設	(縄文)遺物包含層、集石1基(古墳後期)住居跡1軒(中・近世)土坑1基、井戸跡2基、溝跡2本	№27
第17地点	130.56	平成5年 3月22日	6月3日～8月28日	個人住宅建設	検出されなかった	№15
第18地点	115.45	6月3日	6月3日～8月28日	雨水流木抑制工事	(縄文)土坑1基(弥生後期)住居跡1軒(古墳後期)住居跡3軒(中・近世)土坑6基、溝跡6本	未
第19地点	361.93	10月28日	11月1日～15日	共同住宅建設	(古墳後期)住居跡5軒(不明)土坑1基	未
第20地点	100.38	12月24日	平成6年1月13日 ～17日	個人住宅建設	(古墳後期)住居跡1軒(不明)土坑2基	№15
第21地点	48.00		2月18日～2月24日	樹木土壌改良	(縄文早期)穴1基(古墳後期)住居跡2軒(近世)土坑3基	未
第22地点	498.13	平成6年 3月2日	3月9日～30日	共同住宅建設	(縄文早期)穴6基(古墳後期)住居跡1軒	未
第23地点	157.94	5月31日		個人住宅建設	検出されなかった	№16
第24地点	277.68	7月6日		個人住宅建設	検出されなかった	№16
第25地点	127.38	7月15日	7月15日～29日	個人住宅建設	(古墳中期)住居跡1軒(古墳後期)住居跡1軒(近世)土坑1基、溝跡1本(不明)土坑1基	№16
第26地点	410.00	8月18日	8月22日～10月14日	共同住宅建設	(縄文)土坑1基(古墳後期)住居跡7軒(平安)住居跡4軒、土坑1基(中・近世)土坑5基、溝跡4本(不明)土坑1基	未
第27地点	371.52	平成7年 1月30日	2月27日～4月7日	共同住宅建設	(古墳後期)住居跡2軒(中・近世)土坑15基、溝跡2本、井戸跡1基	未
第28地点	233.30	平成6年 12月13日	平成7年1月10日 ～2月17日	事務所建設	(縄文前期)土坑1基(古墳後期)住居跡5軒(不明)土坑1基	未
第29地点	146.41	平成7年 4月5日	4月11日～28日	個人住宅建設	(縄文早期)土坑1基(古墳後期)住居跡2軒(平安)住居跡1軒(中・近世)土坑11基、溝跡1本、ビット器	№18
第30地点	300.85	4月24日		分譲住宅建設	検出されなかった	№18

第4表 城山遺跡調査一覧(1)

調査地点	面積(m ²)	確認調査日	発掘調査期間	調査原因	遺 構 の 概 要	報告書№
第31地点	164.27	6月6日		個人住宅建設	検出されなかった	№18
第32地点	59.62	11月14日	11月15日	倉庫建設	(中世)ピット1本(不明)土坑1基	№18
第33地点	30.00	平成28年 6月12日		防火水槽設置工事	検出されなかった	№20
第34地点	162.00	7月12日	7月15日～8月1日	個人住宅建設	(古墳後期)住居跡3基(平安)土坑1基	№20
第35地点	84.40	11月15日	11月18日～12月25日	個人住宅建設	(弥生後期)住居跡1軒(古墳後期)住居跡1軒(平安)住居跡2軒(中・近世)竊道土坑1基、赤銅1基、土坑13基、井戸跡1基、ピット	№20
第36地点	361.18	平成10年 4月23日		駐車場建設	盛土保存適用	№21
第37地点	430.00	平成11年 11月5日		駐車場建設	検出されなかった	№24
第38地点	120.38	平成12年 7月25日		分譲住宅建設	検出されなかった(現地踏査)	№26
第39地点	94.97	8月21日		個人住宅建設	盛土保存適用	№26
第40地点	76.32	12月7日		個人住宅建設	検出されなかった	№26
第41地点	140.33	12月12日		個人住宅建設	検出されなかった(現地踏査)	№26
第42地点	2,173.79	12月18日	平成13年2月23日 ～6月29日	共同住宅建設	(旧石器)石器集積地点2ヶ所(縄文)土坑21基、竊穴1基(古墳後期)住居跡16軒(平安)住居跡5軒、土坑13基(中世以降)土坑151基、溝跡4本、井戸跡8基、ピット群	本報告
第43地点	117.00	平成13年 5月29日		分譲住宅建設	検出されなかった	№26
第44地点	132.30	6月20日		分譲住宅建設	検出されなかった(現地踏査)	№26
第45地点	100.00	平成15年 1月31日		個人住宅建設	検出されなかった	№30
第46地点	348.29	2月18日	平成15年2月28日 ～4月30日	個人住宅建設	(縄文前期)住居跡1軒(古墳中・後期)住居跡5軒(平安)住居跡1軒、溝跡1本(中世以降)土坑23基、地下室1基、井戸跡1基、道路伏道構1本	№37
第47地点	1,200.00	2月21日		仮設校舎建設	検出されなかった(現地踏査)	№30
第48地点	100.00	3月14日		個人住宅建設	検出されなかった(現地踏査)	№30
第49地点	232.23	8月26日	平成17年1月11日 ～2月1日	個人住宅建設	(縄文)土坑1基(古墳後期)住居跡3軒(中世以降)土坑5基、地下室1基、井戸跡1基	№40
第50地点	199.54	9月5日		道路新設工事	工事立会い	№37
第51地点	200.19	9月16日		個人住宅建設	検出されなかった(現地踏査)	№37
第52地点	300.42	10月14日		分譲住宅建設	盛土保存適用	№37
第53地点	771.55	11月12日		宅地造成	盛土保存適用	№37
第54地点	122.70	平成16年 8月11日		個人住宅建設	盛土保存適用	№37
第55地点	115.10	10月8日	平成16年10月12日 ～11月30日	個人住宅建設	(縄文)土坑3基(古墳後期)住居跡3軒(平安)溝跡1本(近世)土坑2基	№37
第56地点	80.01	平成17年 4月11日		個人住宅建設	検出されなかった	№40
第57地点	165.30	平成15年 8月26日	平成17年8月29日 ～9月24日	個人住宅建設	(縄文)土坑3基(古墳後期)住居跡2軒(中世以降)土坑6基、土坑3基、地下室1基	№40
第58地点	880.77	平成18年 4月18～21日	平成18年6月29日 ～8月28日	道路新設工事	(縄文)土坑3基、竊穴1基(古墳後期)住居跡20軒(平安)掘立柱建築遺構2棟、溝跡1本(中世以降)土坑72基、溝跡4本、道路伏道構1本	未
第59地点	496.94	4月6日	平成18年4月10日 ～6月22日	個人住宅及び倉庫建設	(縄文前期)住居跡1軒(古墳後期)住居跡4軒(平安)住居跡2軒、掘立柱建築遺構2棟(近世)土坑1基	未
第60地点	5,332.66	平成18年12月 20～22日	平成19年2月15日 ～6月12日	福祉施設建設	(縄文)土坑1基、竊穴3基(古墳後期)住居跡32軒(平安)住居跡10軒(中世以降)土坑142基、溝跡8本、井戸跡5基	未
第61地点	710.96	平成19年7月 18・19日	平成19年8月27日 ～10月19日	分譲住宅建設	(縄文)土坑4基(古墳後期)住居跡3軒(平安)住居跡2基(中世以降)土坑28基、地下室1基、井戸跡1基、溝跡2本	№41
第62-1地点	516.49	平成20年10月 29・30日	平成20年11月17日 ～12月26日	分譲住宅建設	(古墳後期)住居跡2軒(平安)住居跡1基(中世以降)土坑7基、地下室1基、溝跡1本	未
第62-2地点	1,076.96	平成20年12月 18・19日	平成21年2月2日 ～現在進行中	調査進行中	調査進行中	未

第4表 城山遺跡調査一覧(2)

- 軒検出されている。平成18・19年度に発掘調査が実施された城山遺跡第58・60地点からは、52軒の住居跡が密集して検出された。
- 奈良時代 8世紀代の住居跡は少なく、5軒程度である。
第42地点の1号ピットから偏行唐草文の軒平瓦片1点出土した。
第59地点から掘立柱建築遺構2棟が検出される。
- 平安時代 9世紀前半から9世紀後半にかけての住居跡は約30軒検出されている。
第35地点128号住居跡からは、印面に「富」と書かれた銅印と猿投製品の緑釉陶器片1点・布目瓦・土器が出土。
- 中・近世 「柏の城」関連の大堀を含めた溝跡・井戸跡・土坑が多く検出されている。
第29地点27号土坑は馬の埋葬土坑である。
第35地点からは鋳造関連遺構が検出されている。

【註】

- 註1 『館村旧記』は、館村（現在の志木市柏町・幸町・館）の名主宮原伸右衛門仲恒が、享保12～14（1727～1729）年にかけて執筆したものである。
- 註2 『廻回雜記』は、左大臣近衛房嗣の子で、京都聖護院門跡をつとめた道興准后が、文明18年（1486）6月から10ヶ月間、北陸路から関東各地をめくり、駿河甲斐にも足をのぼし、奥州松島までの旅を紀行文にまとめたものである。

【引用文献】

- 神山健吉 1988 「『廻回雜記』に現れる 大石信濃守の館と十玉坊の所在についての一考察」『郷土志木』第7号
2002 「道興をめぐる二つの謬説を糾す」『郷土志木』第31号

第2章 城山遺跡第18地点の調査

第1節 調査の経過

(1) 調査に至る経過

平成5年4月、志木市長細田喜八郎から志木市教育委員会（以下、教育委員会）へ開発計画地内における埋蔵文化財の有無及び取り扱いについての照会があった。計画は志木市柏町3丁目2608-1、2609他（面積560㎡）内にある志木市立志木第3小学校の校定に雨水流出抑制工事を実施するというものである。

これに対し、教育委員会は当該開発予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である城山遺跡（コード11228-003）に該当するため、大旨下記のとおり回答した。

1. 本地点は埋蔵文化財包蔵地に該当し、さらに遺構が密集して分布することが予想される。
2. 埋蔵文化財確認調査を実施して、その結果に基づき、当該開発予定地の埋蔵文化財の有無及び取り扱いについて回答する。
3. 上記2の調査の結果、埋蔵文化財が確認された場合、埋蔵文化財の保存措置を講ずること。また、やむを得ず土地の現状を変更する場合は、記録保存のための発掘調査を実施する必要があること。

平成5年6月1日、教育委員会は、開発者である志木市長細田喜八郎より埋蔵文化財発掘届・埋蔵文化財確認調査依頼書を受理し、6月3日、午前9時30分から確認調査を実施した。

確認調査は、調査区に合わせたトレンチを設定し、バックホーで表土を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った。その結果、調査したすべてのトレンチで、弥生時代～古墳時代後期の住居跡、近世の溝跡（柏の城関連遺構）と考えられる遺構を検出した。

教育委員会は、この結果をただちに志木市長細田喜八郎に報告し、埋蔵文化財の保存措置について協議を行った。その結果、記録保存のための発掘調査を実施することに決定した。

その後、教育委員会では、発掘調査にあたる組織として、志木市遺跡調査会（以下、遺跡調査会）を幹旋した。遺跡調査会ではこれを受け、志木市長細田喜八郎氏と委託契約を締結し、埋蔵文化財発掘調査届を教育委員会に提出する。教育委員会は、これらの届出書をすみやかに埼玉県教育委員会経由で文化庁長官に提出した。

これにより、6月3日から遺跡調査会を主体として発掘調査を実施した。なお、発掘調査通知書番号は教文第5-66号 平成5年10月19日付である。

(2) 発掘調査の経過

ここでは、第5表の発掘調査工程表にも示したが、発掘調査の経過についてを説明することにする。

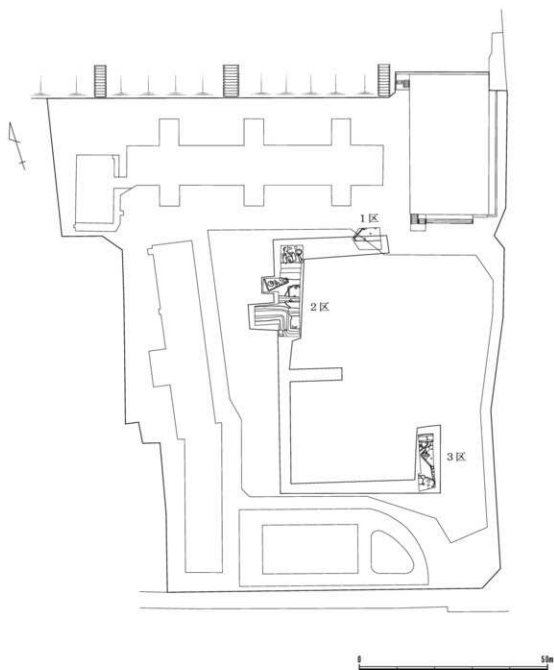
- 6月3日 午後から重機による表土剥ぎ作業を開始する。その結果、調査区域内は校舎の改修工事
～11日 等の影響で著しく遺存状態は悪かった。遺構が検出された箇所は、大きく3箇所に区分
できることから、北側から1・2・3区とした。
- 15日 本日より人員導入による遺構確認作業を開始する。調査の順序は、北側の1区から行う

こととし、順次2・3区に移行する予定である。

- 16日 1区の88号住居跡(88H)の精査を開始する。時期は古墳時代後期と考えられる。
- 17日 88Hの精査に併行し、2区の16号溝跡(16M)の精査を開始する。
- 18日 1区は新たに88Hの南側に17号溝跡(17M)を検出したため、精査を開始する。2区は16Mの精査を行う。
- 21日 1区の88H・17Mの精査を行う。午後は雨天のため、調査を中止した。
- 22日 昨日の雨のため、終日雨水の除去作業を行った。17Mから板碑が出土した。
- 23日 本日は雨天のため、調査を中止する。
- 24日 1区は、88H・17Mの写真撮影・実測を行う。2区は16Mの精査を行う。さらに、北端部分の遺構確認作業を行った結果、土坑・ピットがまとめて検出されたことから、75号土坑(75D)の精査を開始し、掘り終了後に写真撮影を行った。
- 25日 1区は88H・17Mの精査を行う。2区は16M精査を行い、75Dの実測を行う。
- 28日 2区は16Mの精査に併行し、76号土坑(76D)の精査を開始する。
- 29日 2区では16Mの東側部分から住居跡の床面を確認したため、89号住居跡(89H)とする。

	平成5年6月								7月							
	2日	3日	10日	13日	20日	21日	28日	30日	6日	8日	10日	11日	13日	20日	25日	30日
表土削き作業	[Bar chart showing work from 2nd to 30th]															
遺構確認作業	[Bar chart showing work from 6th to 13th]															
① [K]	[Bar chart showing work from 6th to 13th]															
17M	[Bar chart showing work from 6th to 13th]															
88H	[Bar chart showing work from 6th to 13th]															
② [K]	[Bar chart showing work from 6th to 13th]															
16M	[Bar chart showing work from 6th to 13th]															
17M	[Bar chart showing work from 6th to 13th]															
18M	[Bar chart showing work on 7th]															
19M	[Bar chart showing work on 7th]															
20M	[Bar chart showing work from 7th to 13th]															
75D	[Bar chart showing work from 6th to 13th]															
76D	[Bar chart showing work from 6th to 13th]															
77D	[Bar chart showing work from 6th to 13th]															
78D	[Bar chart showing work from 6th to 13th]															
79D	[Bar chart showing work on 11th]															
89H	[Bar chart showing work from 6th to 13th]															
90H	[Bar chart showing work on 7th]															
92H	[Bar chart showing work from 7th to 13th]															
3Y	[Bar chart showing work on 11th]															
③ [K]	[Bar chart showing work from 7th to 13th]															
遺構確認作業	[Bar chart showing work from 7th to 13th]															
21M	[Bar chart showing work from 7th to 13th]															
80D	[Bar chart showing work from 7th to 13th]															
81D	[Bar chart showing work on 11th]															
91H	[Bar chart showing work from 7th to 13th]															
93H	[Bar chart showing work from 7th to 13th]															
94H	[Bar chart showing work from 7th to 13th]															
95H	[Bar chart showing work from 7th to 13th]															
埋戻し作業	[Bar chart showing work on 11th and 13th]															
残土搬出作業	[Bar chart showing work on 13th]															

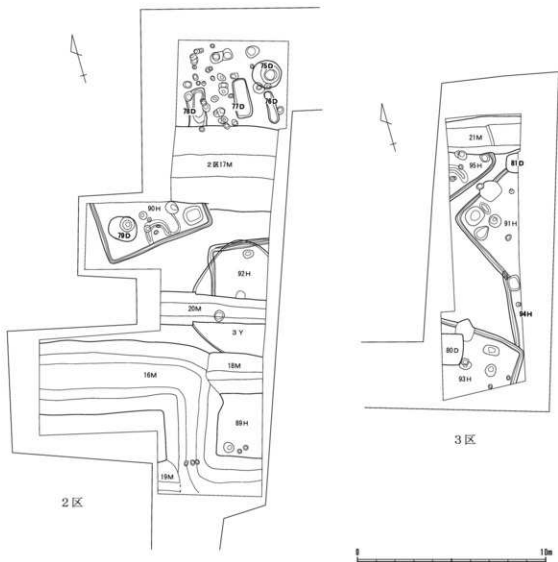
第5表 城山遺跡第18地点の発掘調査工程表



第3図 遺構分布図 (1/1000)

時期は古墳時代後期と考えられる。

- 7月1日 2区は89H・16Mの精査に併行し、新たに18・19号溝跡(18・19M)の精査を開始する。
- 2日 2区の89H・16・18・19Mの精査を行う。
- 5日 本日は雨天のため、調査を中止する。
- 6日 2区の16・17Mの精査を行う。
- 7日 2区では16・17Mの精査に併行し、新たに古墳時代後期の90号住居跡(90H)の精査を開始する。時期は古墳時代後期と考えられる。
- 8日 2区の90H・16・17Mの精査を行う。
- 9日 2区は90Hの精査に併行し、92号住居跡(92H)の精査を開始する。時期は平安時代と考えられるが、弥生時代後期の住居跡(3Y)が1軒重複していると思われる。さらに、17Mの写真撮影・実測を行う。また、3区の遺構確認作業を開始する。
- 12日 2区の16Mの実測を行う。また、本日から確認調査で遺構が検出されなかった箇所には砂利を入れ、重機により埋戻し作業を開始する。



第4図 2・3区遺構分布図(1/200)

- 13日 2区の16Mの実測と併行し、90・92Hの精査を行い、3Yの精査を開始する。午後は併行して重機により2区の一部の埋戻し作業を開始する。
- 14日 2区の3Y・90・92Hの精査を行う。
- 15日 2区は92Hの写真撮影・実測を行う。3区は遺構確認作業を行う。
- 16日 2区は3Y・79号土坑(79D)の写真撮影・実測を行う。3区内には、古墳時代後期の住居跡4軒(91・93～95H)が密集して存在するものと思われる。
- 17日 重機により2区の埋戻し作業を行う。
- 19日 3区の91・93・94H・80号土坑(80D)・21号溝跡(21M)の精査を開始する。
- 20日 3区の91・93・94H・21Mの精査を行う。93Hは遺物出土状態の写真撮影を行う。
- 21日 本日は雨天のため、調査を中止する。
- 22日 3区の21Mの精査、93Hの実測を行う。併行して95Hの精査を開始する。
- 23日 3区の95・21Mの精査に併行し、94Hの写真撮影、80・81Dの実測を行う。
- 26日 雨天のため、午後から調査を行う。3区の91Hのカマドの精査を開始する。95Hの写真撮影・実測を行う。
- 27日 3区の91・93Hのカマド実測・写真撮影を行う。
- 28日 3区の91Hのカマド実測・写真撮影を終了し、すべての精査を完了する。
- 29日 最終的な埋戻し作業は行わず、残土をダンプに積載し、搬出作業を行うのみで終了する。

第2節 縄文時代の遺構・遺物

(1) 概要

縄文時代の遺構は、2区から土坑1基(79D)が検出されたのみである。出土遺物は、土器小破片のみであるため、詳細時期は不明である。

(2) 土坑

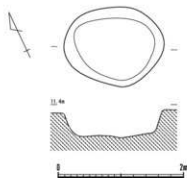
79号土坑

遺構 (第5図)

〔構造〕 90Hに切られる。坑底はほぼ平坦である。(平面形) 楕円形。(規模) 1.56×1.26m。(深さ) 90Hの床面から42cmを測る。(長軸方位) N-62°-W。

〔遺物〕 土器小破片のみで図示できるものはなかった。

〔時期〕 覆土の観察から縄文時代と考えられる。



第5図 79号土坑 (1/60)

第3節 弥生時代後期の遺構・遺物

(1) 概要

弥生時代後期の遺構としては、2区から住居跡1軒(3Y)が検出されるのみである。3Yは中世以降の溝跡(18M・20M)と古墳時代後期の住居跡(92H)に切られている。

(2) 住居跡

3号住居跡

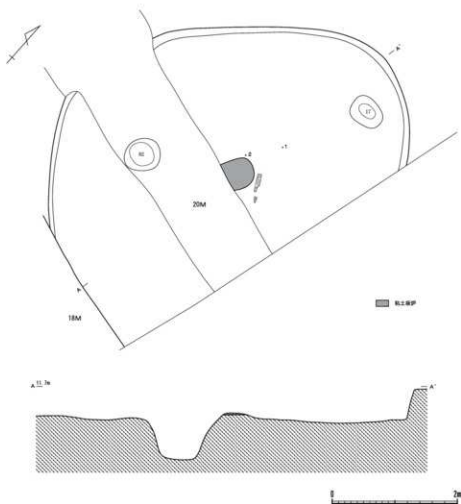
遺構 (第6図)

[位置] 2区。

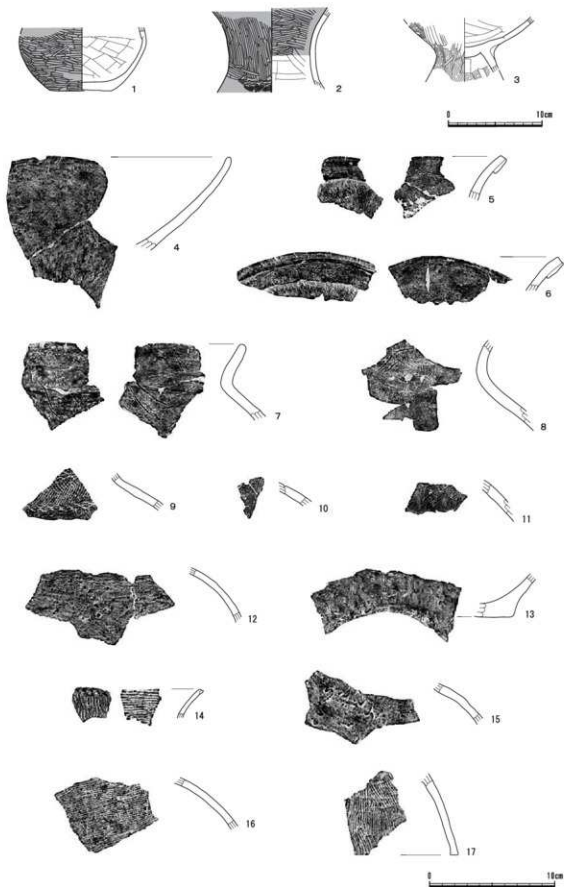
[住居構造] 住居の東側は調査区域外であり、92H・18M・20Mに切られる。(平面形) 隅丸方形。(規模) 不明×5.70m。(壁高) 残りの良いところで43cmを測る。(炉) 住居中央に粘土板炉が検出された。粘土の厚さは1.5cmで、下端は被熱により赤化している。(柱穴) 検出されなかった。

[遺物] 壺・高坏・甕形土器が出土した。

[時期] 弥生時代後期。



第6図 3号住居跡 (1/60)



第7図 3号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)

()は埋存確及び埋定率

検出番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存率
第7図1	壺	(6.8)	-	6.4	口縁部へ胴部上半を欠損／胴部中に最大径をもつ／底部はやや基部状／外面赤彩	胎土：暗灰褐色	黄褐色粒子・砂粒を含む	内面：ハケナデ／外面：ヘラ磨き調整	住居中央やや北寄りの床面	胴部中位以下80%
第7図2	壺	(8.8)	-	-	頸部から胴部へは緩やかに移行する／胴部上半に2条の白縄結文とその直下はLR縄文が施文される／内面頸部上半と外面頸部は赤彩	胎土：暗黄褐色	黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒・小石を含む	内面：ハケ目調整後、胴部上半はヘラ磨き調整、下半はハケナデ／外面：ヘラ磨き調整	頸部のすぐ北側の床面上	胴部へ胴部上半100%
第7図3	甕	(6.9)	-	-	台付甕／胴部下半から脚台部にかけて前曲する／胴部底はソケット状を呈し、脚台部にはめ込み式	暗黄褐色～暗褐色	黄褐色粒子を多く含む	内面：ヘラナデ、脚台部はナデ後ハケ目調整／外面：ハケ目調整後部分的にヘラ磨き調整	覆土中	胴部下半へ脚台部60%
第7図4	高坏	-	-	-	坏部／口縁部から底部にかけて湾状を呈する／内外面赤彩	胎土：淡黄褐色を基調	黄褐色粒子・砂粒を僅かに含む	内外面：ヘラ磨き調整、口縁部は横方向、底部付近は縦方向、外面口縁部直下にはハケ目目が顕著に現れる	覆土中	坏部（口縁部へ体部下半）破片
第7図5	壺	-	-	-	幅狭の複合口縁／口縁部は外反する／口唇部は平坦に面取り／内外面赤彩	胎土：暗黄褐色	黄褐色粒子・砂粒を含む	内外面：ハケ目調整、内面は縦方向、外面は複合部が縦方向、頸部が縦方向	覆土中	口縁部へ頸部破片
第7図6	壺	-	-	-	5よりやや幅広い複合口縁／口縁部は外反する／口唇部は平坦に面取り／内外面赤彩	胎土：暗赤褐色	黄褐色粒子・白色砂粒を含む	内面：ハケ目調整後ヘラ磨き調整、外面：ハケ目調整、複合部は縦方向、頸部は縦方向	覆土中	口縁部へ頸部破片
第7図7	壺	-	-	-	口縁部は「く」の字に屈曲する／単純口縁／内面口縁部と外面は赤彩	胎土：暗黄褐色	黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒・小石を含む	内面：口縁部はハケ目調整後ヘラ磨き調整、胴部はハケナデ／外面：ハケ目調整後ヘラ磨き調整	覆土中	口縁部へ胴部破片
第7図8	壺	-	-	-	頸部から胴部へは緩やかに移行する／無文／外面赤彩	暗黄褐色	黄褐色粒子・砂粒を多く含む	内面：頸部は横方向のヘラ磨き調整、胴部はハケナデ／外面：縦方向のハケ目調整後縦方向のヘラ磨き調整	覆土中	頸部へ胴部破片
第7図9	壺	-	-	-	文様は上下2段の単節縄文による羽状縄文を施文し、その上下を3条の白縄結文が区画する／文様帯以下赤彩	暗黄褐色	黄褐色粒子・白色砂粒を含む	内面：頸部はヘラ磨き調整、胴部はハケナデ／外面：文様帯以下は横方向のヘラ磨き調整	覆土中	頸部から胴部破片
第7図10	壺	-	-	-	文様は波線文を施した後、単節縄文が充填／外面赤彩	黒褐色	茶褐色粒子・白色砂粒を含む	内面：ヘラナデ／外面：文様帯以外はヘラ磨き調整	覆土中	胴部小破片
第7図11	壺	-	-	-	日本一単位による縞波状文が左回りに施文される	暗黄褐色	黄褐色粒子を多く含む	内面：ヘラナデ／外面：ハケ目調整後ヘラ磨き調整	覆土中	胴部小破片
第7図12	壺	-	-	-	破片のために判断はしづらいが、3箇所(3cm間隔)で縞筋文が止まる部分が観察できることから、縞状文であろうか／文様帯以下は赤彩か	暗褐色	砂粒を多く含む	内面：口縁部は横ナデ、以下ヘラナデ／外面：口縁部横ナデ、以下ヘラ磨き調整後縦方向のヘラナデ(スリップか?)	覆土中	口縁部へ体部中位30%
第7図13	壺	(2.9)	-	(9.0)	底部は平底／外面赤彩	淡暗黄褐色を基調	黄褐色粒子を多く含む	内面：ヘラナデ／外面：ヘラ磨き調整	覆土中	胴部下半へ底部30%
第7図14	甕	-	-	-	口唇部外面にハケ状工具による削み	暗茶褐色	黄褐色粒子・砂粒を含む	内外面：ハケ目調整、内面は横方向、外面は縦方向	覆土中	口縁部小破片
第7図15	甕	-	-	-	球胴を呈する胴部	明褐色	黄褐色粒子・褐色粒子を多く含む	内外面：粗いハケ目調整、外面はスリップ状の粘土膜が観察できる	覆土中	胴部上半破片
第7図16	甕	-	-	-	球胴を呈する胴部	内面：暗茶褐色、外面：黒	黄褐色粒子・褐色粒子を多く含む	内面：ヘラナデ／外面：ハケ目調整	覆土中	胴部上半破片
第7図17	甕	-	-	-	台付甕の脚台部／底部の端部は平坦	暗黄褐色を基調に黒斑あり	黄褐色粒子・砂粒を含む	内面：ヘラナデ、外面：縦方向のハケ目調整	覆土中	脚台部破片

(単位：cm)

第6表 3号住居跡出土遺物一覧

遺物 (第7図、第6表)

1・2・5～13は壺形土器、4は高環形土器、3・14～17は甕形土器である。

第4節 古墳時代後期・平安時代の遺構・遺物

(1) 概要

古墳時代後期の遺構としては、住居跡7軒(88～91・93～95H)が検出された。調査区単位では、1区から1軒(88H)、2区から2軒(89・90H)、3区から4軒(91・93～95H)である。住居跡の時期は、95Hが6世紀前葉、90・94Hが6世紀中葉、88・89・91・93Hは7世紀中葉に位置づけられる。

平安時代の遺構は、2区から住居跡1軒(92H)が検出されたのみである。時期は9世紀後葉に位置づけられる。

(2) 住居跡**88号住居跡****遺構** (第8図)

[位置] 1区。

[住居構造] 南側は17Mに切られ、東側は調査区域外である。(平面形) 方形と思われる。(規模) 不明。(壁高) 44～64cmを測る。(壁溝) 確認できた範囲ではカマドを除き巡らされている。上幅15～22cm・下幅6～8cm・深さ9～11cmを測る。(カマド) 左袖と燃焼部の一部が確認できた。袖部はロームを馬蹄形状に残していると思われ、燃焼部は被熱により赤化していた。(柱穴) 3本検出された。深さは東側から87cm・38cm・92cm。直線的にほぼ等間隔に並んでいることから、主柱穴は6本あるいは8本の可能性がある。

[遺物] 土師器甕・甕形土器、須恵器甕形土器、土製支脚が出土した。

[時期] 古墳時代後期(7世紀中葉)。

遺物 (第9・10図、第7表)

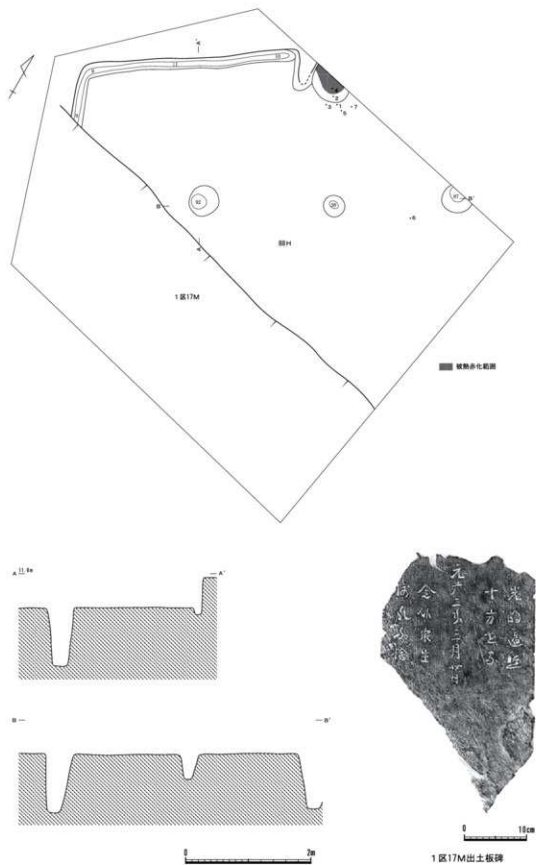
1～6は土師器甕形土器、7は土師器甕形土器である。8は須恵器の大甕で、この製品は、胎土に片岩を僅かに含むことから、末野製品の可能性がある。末野製品であれば、当市では、古墳～奈良・平安時代を通して初めての出土例となる。

9は土製支脚である。円筒形タイプで、中心に穿孔をもつ。上部は欠損するが、下部面が若干遺存する。高さ7.2cm・幅5.3cm・穿孔径0.7cm・重さ221g。表面には成形痕の指頭押捺痕が残る。色調は暗黄褐色を呈し、胎土には砂粒を僅かに含む。覆土中からの出土である。

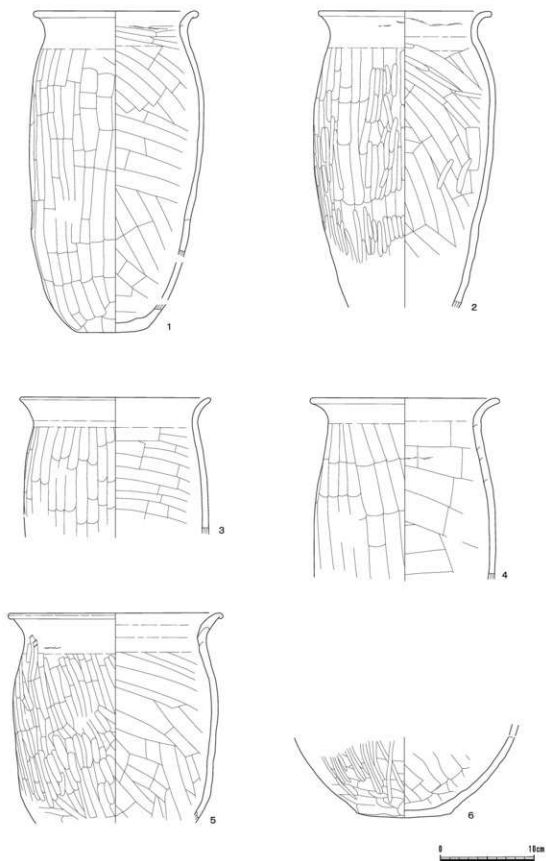
89号住居跡**遺構** (第11図)

[位置] 2区。

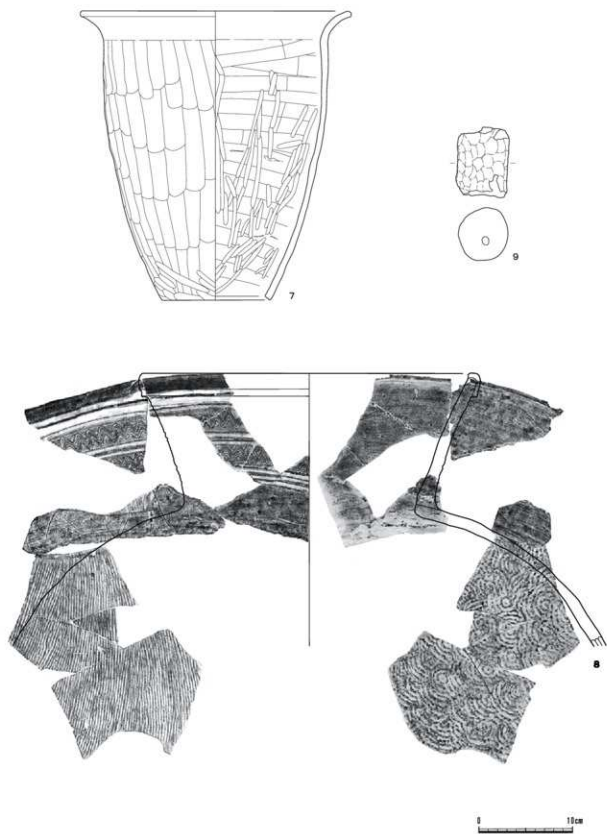
[住居構造] 16・18Mに切られ、さらに東側は調査区域外のため、床面の一部と柱穴のみの確認で、詳



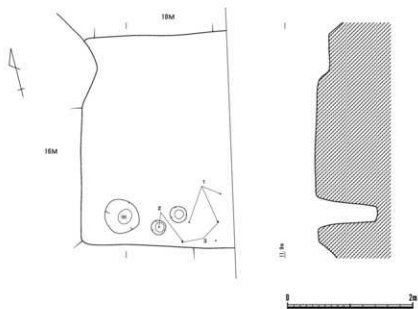
第8図 88号住居跡・1区17号溝跡・出土板碑 (1/60・1/6)



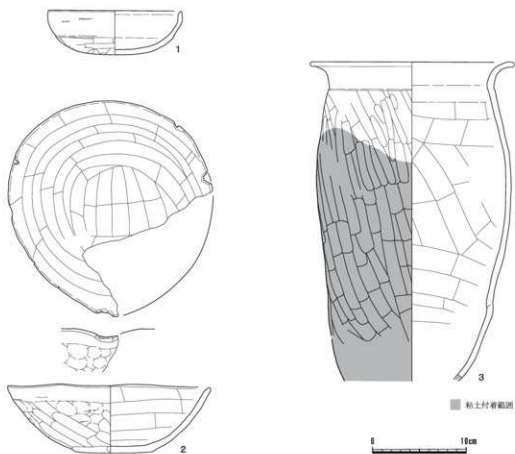
第9図 88号住居跡出土遺物1 (1/4)



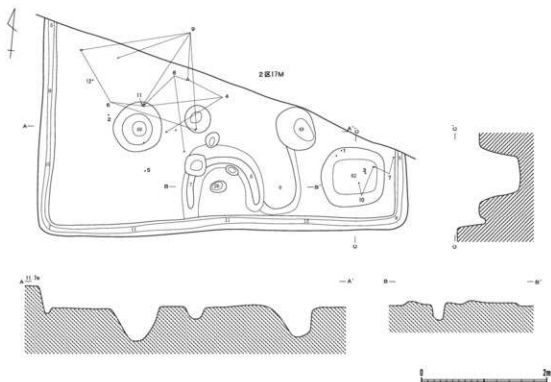
第10図 88号住居跡出土遺物2 (1/4)



第11図 89号住居跡 (1/60)



第12図 89号住居跡出土遺物 (1/4)



第13図 90号住居跡 (1/60)

細不明である。(柱穴) 3本検出されたが、深さ98cmのものが主柱穴の可能性ある。

[遺物] 土師器環・鉢・甕形土器が出土した。

[時期] 古墳時代後期(7世紀中葉)。

遺物 (第12図、第8表)

1は土師器環形土器、2は土師器鉢形土器、3は土師器甕形土器である。

90号住居跡

遺構 (第13図)

[位置] 2区。

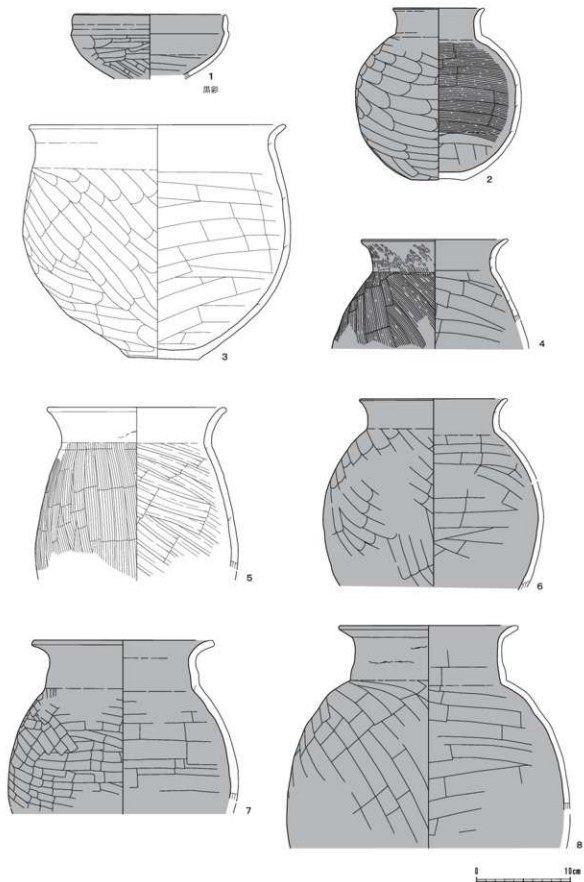
[住居構造] 北側は17Mに切られている。(平面形) 方形と思われる。(規模) 不明×5.88m。(壁高) 21~40cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝) 確認できる範囲では巡らされていた。上幅20~25cm・下幅6~10cm・深さ5~12cmを測る。(床面) 入口部から主柱穴の内側が、良く踏み固められていた。(柱穴) 南東・南西コーナーから主柱穴が2本検出された。深さは49cmを測る。(入口部) 南壁中央付近に深さ26cmの入口梯子穴1本が確認され、その周りには高さ7cm程のU字状の凸堤が巡らされていた。(貯蔵穴) 南東コーナーに位置し、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は92×100cm、深さは62cmを測る。

[遺物] 土師器環・鉢・壺・甕・甕形土器、石製品が出土した。

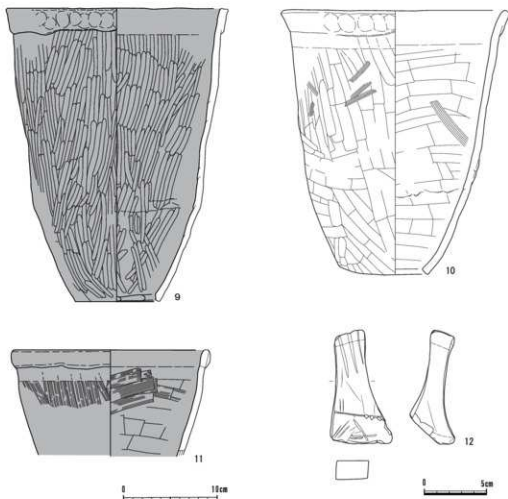
[時期] 古墳時代後期(6世紀前葉)。

遺物 (第14・15図、第9表)

1は土師器環形土器、2・4・6~8は土師器壺形土器、3は土師器鉢形土器、5は土師器甕形土器、



第14図 90号住居跡出土遺物1 (1/4)



第15図 90号住居跡出土遺物2 (1/4)

9～11は土師器甕形土器である。

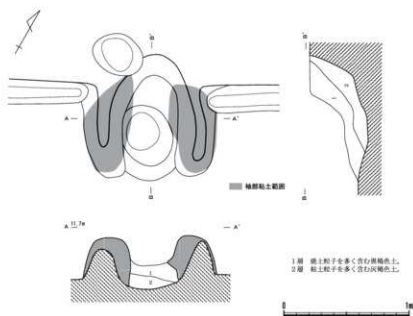
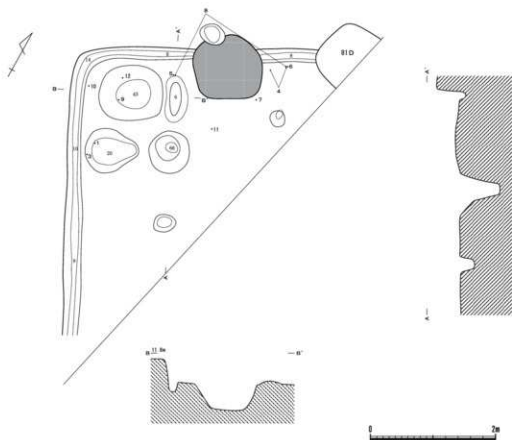
12は石製品で、砥石である。長さ9.0cm・最大幅4.9cm・最大厚2.8cm・重さ107g。撥形を呈し、使用面は平滑な面である4面（上下2面を除く）を基本とするが、下面も使用痕の細線が残ることから、若干の使用があったと思われる。石質は凝灰岩である。

91号住居跡

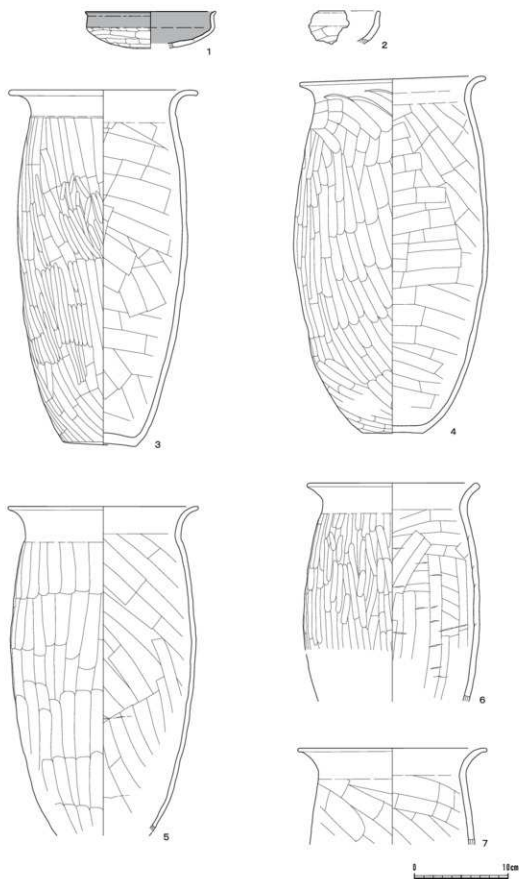
遺構 (第16図)

〔位置〕 3区。

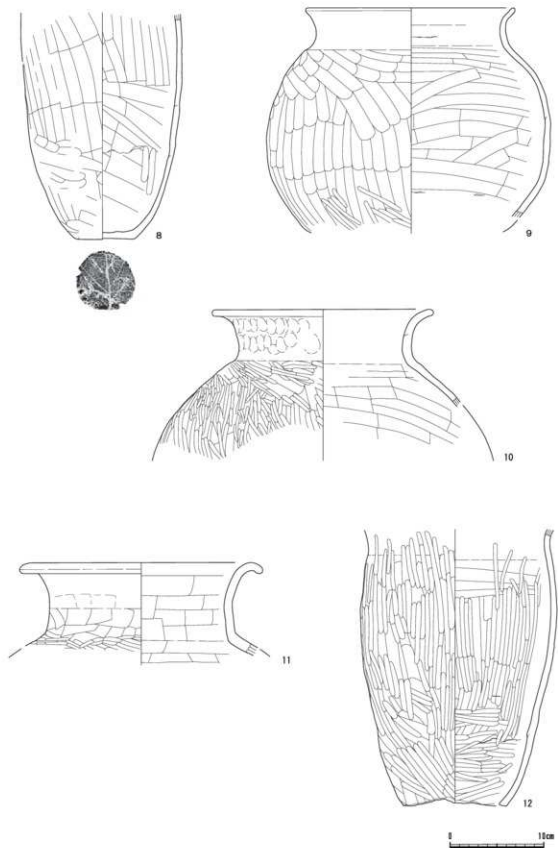
〔住居構造〕 94Hを切り、81Dに切られる。東側は調査区域外である。(平面形) 方形と思われる。(規模) 不明。(壁高) 35～46cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝) 確認できた範囲ではカマドを除き巡らされていた。上幅17～29cm・下幅5～13cm・深さ8～14cmを測る。(カマド) 北西壁に位置し、主軸方位はN-30°-W。長さ100cm・幅110cm・壁への掘り込み25cmを測る。袖部はロームを馬蹄形状に残し、その上に粘土を被覆して天井部と共に構築されていたと思われる。(柱穴) 西コーナーの深さ66cmのものが主柱穴と思われる。(貯蔵穴) 西コーナーに位置し、平面形は隅丸長方形を呈する。規模



第16図 91号住居跡・カマド (1/60・1/30)



第17図 91号住居跡出土遺物1 (1/4)



第18図 91号住居跡出土遺物2 (1/4)

は86×100cm、深さは43cmを測る。東側に高さ6cmの凸堤が確認できた。

[遺物] 土師器環・甑・甕形土器が出土した。

[時期] 古墳時代後期（7世紀中葉）。

遺物 (第17・18図、第10表)

1・2は土師器環形土器、3～11は土師器甕形土器、12は土師器甕形土器である。12の土師器甕形土器は底部が筒抜け式であるが、打ち欠いた状態であるため、焼成後の成形と思われる。

92号住居跡

遺構 (第19図)

[位置] 2区。

[住居構造] 3Yを切り、20Mに切られる。東側は調査区域外である。(平面形) 方形。(規模) 不明。(壁高) 27～33cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝) 確認できた範囲では巡らされていた。北壁は壁際に幅5cmほどの段を持つ。上幅28～35cm・下幅5～13cm・深さ6～17cmを測る。(柱穴) 検出されなかった。(覆土)

[遺物] 須恵器蓋・環形土器、土師器環形土器が出土した。

[時期] 平安時代（9世紀中～後葉）。

遺物 (第20図、第11表)

1は須恵器蓋形土器、2・3は須恵器環形土器である。4は土師器環形土器で、南武蔵型環と考えられる。

93号住居跡

遺構 (第21図)

[位置] 3区。

[住居構造] 94Hを切り、80Dに切られる。東コーナー以外は調査区域外である。(平面形) 方形。(規模) 不明。(壁高) 41～43cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝) 確認できた範囲ではカマドを除き巡らされていた。上幅23～30cm・下幅6～10cm・深さ8～13cmを測る。(カマド) 北東壁に位置するが、一部80Dにより壊されている。主軸方位はN-38°-E、長さ115cm・幅94cm・壁への掘り込み30cmを測る。袖部と天井部は粘土を被覆して構築されていたと思われる。燃焼部は4cm程窪んでおり、南側が焼けて赤化していた。カマド右袖部付近から出土した土器は、袖部の補強材として使われていたと考えられる。(柱穴) 貯蔵穴前の深さ64cmのものが主柱穴と思われる。(貯蔵穴) 東コーナーとカマドのほぼ中間に位置し、平面形は長方形を呈する。規模は48×85cm、深さ91cmを測る。東コーナーの床面上より粘土が検出された。

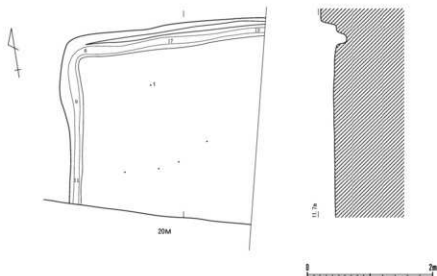
[遺物] 土師器環・甑・甕形土器、須恵器環蓋形土器、石製品、鉄製品が出土した。

[時期] 古墳時代後期（7世紀中葉）。

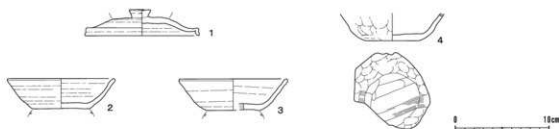
遺物 (第22図、第12表)

1～3は土師器環形土器、4～7は土師器甕形土器、8・9は土師器甕形土器、10は須恵器環蓋形土器である。

11は石製品で、丸玉である。径1.5cm・厚さ1.2cm・穿孔径0.3cm・重さ2.4g。表面はきれいに磨かれ



第19図 92号住居跡 (1/60)



第20図 92号住居跡出土遺物 (1/4)

ており光沢を帯びる。色調は薄緑色を基調とし、石質は滑石か。カマド右横の床面上からの出土である。
12は鉄製品で、釘と思われる。長さ6.7cm・幅0.6cm・重さ3.0g。断面方形を呈する。

94号住居跡

遺構 (第23図)

[位置] 3区。

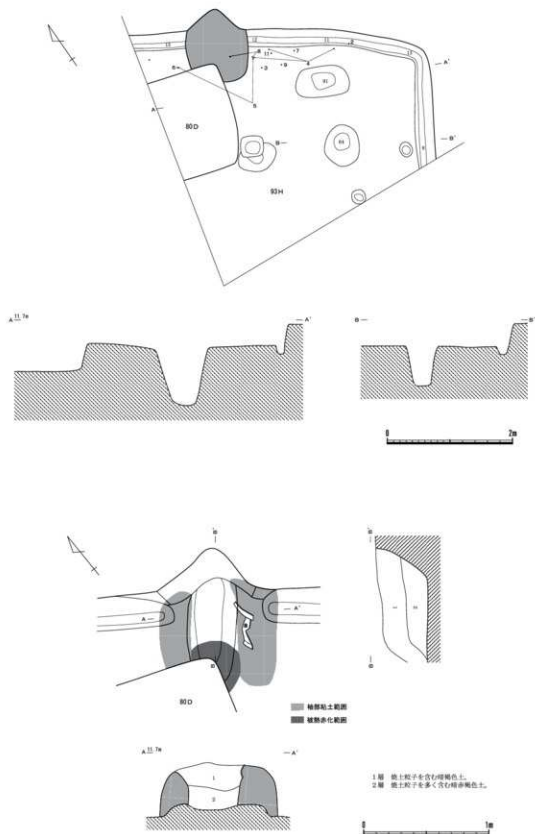
[住居構造] 91・93Hに切られ、さらにほとんどが調査区域外であるために西壁と貯蔵穴しか確認できなかった。(平面形) 方形か。(規模) 不明。(壁高) 45～51cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝) 確認できた範囲では巡らされていた。上幅20～30cm・下幅7～10cm・深さ7～12cmを測る。(貯蔵穴) 西壁の北西コーナーに位置し、平面形は長方形を呈する。規模は55×85cm、深さ64cmを測る。

[遺物] 土師器坏形土器が1点出土した。

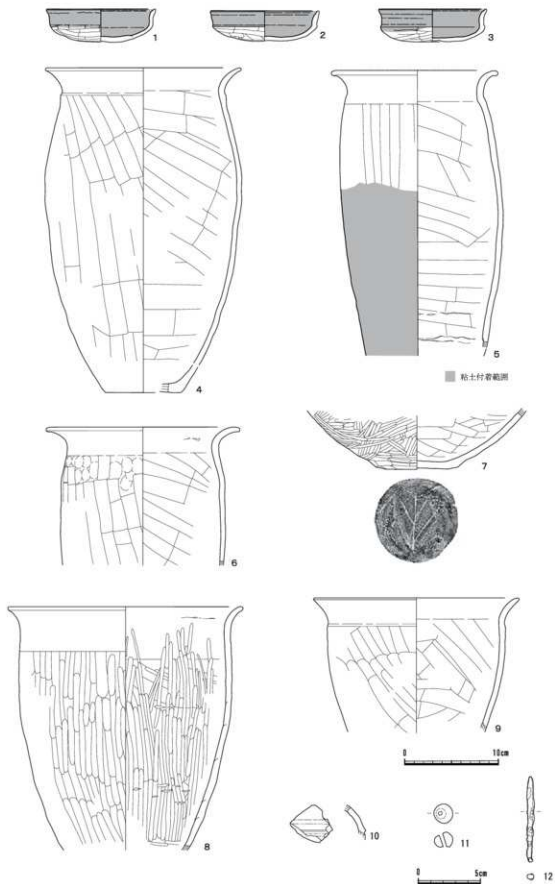
[時期] 古墳時代後期(6世紀中葉)。

遺物 (第23図、第13表)

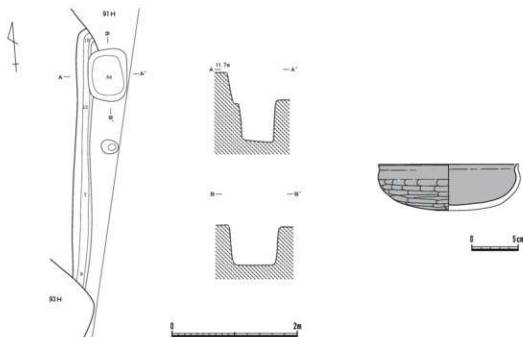
土師器坏形土器である。



第21図 93号住居跡・カマド (1/60・1/30)



第22図 93号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)



第23図 94号住居跡・出土遺物 (1/60・1/4)

95号住居跡

遺構 (第24図)

[位置] 3区。

[住居構造] 21Mに切れ、さらに西側は調査区域外であるため東コーナーから南東壁の一部しか確認できなかった。(平面形) 方形か。(規模) 不明。(壁高) 32~41cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝) 確認できた範囲では巡らされていた。上幅16~22cm・下幅4~8cm・深さ6~11cmを測る。(柱穴) 重複している深さ52・53cmのものが主柱穴の可能性がある。南東壁寄りの深さ17cmのものは入口梯子穴と思われ、その周りには高さ5cm程の凸堤が巡らされていた。

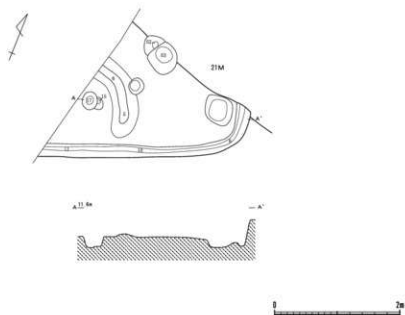
[遺物] 土師器坏・甕形土器、鉄製品が出土した。

[時期] 古墳時代後期 (6世紀前葉)。

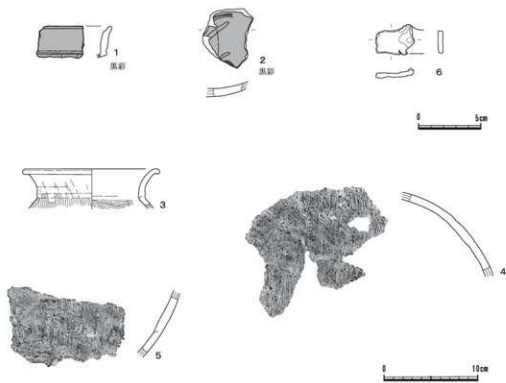
遺物 (第25図、第14表)

1・2は土師器坏形土器、3~5は土師器甕形土器である。

6は鉄製品で、火打金と思われる。長さ3.8cm・幅2.2cm・厚さ0.3cm・重さ5.1g。右側半分は欠損している。覆土中からの出土である。



第24図 95号住居跡 (1/60)



第25図 95号住居跡出土遺物 (1/3・1/4)

拝復番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	()は順存率及び埋定値	
									出土位置	遺存度
第9601	土師器 甕	34.1	17.3	6.7	長胴/口縁部は外反する/口縁部と胴部との境はスムーズ/口唇端部は丸くめくれている/最大径は胴部上半/胴部中心以下での遺存状態が悪いことからカマドに使用された土器と考えられる/在地系土師器	暗黄褐色	砂粒を多く、金雲母・小石を含む	内面:口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面:口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/以下はヘラナデ(スリップ?)	カマド	90%
第9602	土師器 甕	(31.5)	18.2	-	長胴/口縁部は外反する/口縁部と胴部との境はスムーズ/口唇端部は丸くめくれている/最大径は胴部上半/在地系土師器	暗黄褐色	砂粒を多く、金雲母を含む	内面:口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面:口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ(磨きの)	カマド	口縁部~胴部下半70%
第9603	土師器 甕	(14.9)	20.0	-	長胴/口縁部は外反する/口縁部と胴部との境はスムーズ/最大径は口縁部と胴部上半のほぼ同位置/在地系土師器	暗黄褐色	砂粒を多く、金雲母を含む	内面:口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面:口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ(スリップ?)	カマド	口縁部~胴部中心位90%
第9604	土師器 甕	(19.3)	(20.0)	-	長胴/口縁部は外反する/口縁部と胴部との境はやや段差あり/全体に外面は剥落し遺存状態は不良/在地系土師器	明褐色	砂粒を多く、基褐色色粒子・小石を僅かに含む	内面:口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面:口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ(スリップ?)	カマド	口縁部~胴部中心位40%
第9605	土師器 甕	(22.3)	(20.0)	-	長胴/口縁部は外反する/口縁部と胴部との境はスムーズ/口唇端部は丸くめくれている/最大径は口縁部と胴部上半のほぼ同位置/在地系土師器	暗黄褐色	砂粒を多く、基褐色色粒子・金雲母を含む	内面:口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面:口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ(磨きの)	カマド	口縁部~胴部下半40%
第9606	土師器 甕	40.8	19.0	5.6	丸型/中型タイプと思われる/平底/在地系土師器	暗褐色	砂粒を多く、金雲母・小石を含む	内面:ヘラナデ/外面:ヘラナデ後へラナデアラナデ(磨きの)	北東コーナーの柱穴やの南側の床面上	胴部下半~底部60%
第10607	土師器 甕	30.6	(28.5)	(11.4)	底部は踏かけ式/口縁部は外反する/口縁部と胴部との境はスムーズ/最大径は口縁部/在地系土師器	暗黄褐色	砂粒を多く、金雲母・小石を含む	内面:口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ後縦方向に粗いヘラナデ調整/外面:口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ	カマド	35%
第10608	須恵器 甕	(30.0)	(36.0)	-	大甕/口縁部は複合口縁/口唇部はやや平坦面をもつ/複合部下端の縁部部分には幅6mmの太丸線文が施される/胴部の文様は上から「沈線文1本+波状文+沈線文2本+波状文+沈線文3本」の順で、波状文は7本一単位、沈線文は幅4mm/叩き目は木目と溝が直交する/木野梨型の可能性がある	灰褐色~淡茶褐色	白色砂粒をやや多く、片岩(大粒片で5mm)を僅かに含む	内面:口唇部は回転ナデ、胴部は当て道具の背面皮/外面:口唇部は回転ナデ、胴部は平行印き目	覆土中	口縁部~胴部上半30%

第7表 88号住居跡出土遺物一覧

拝復番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第12801	土師器 杯	4.7	14.2	-	口縁部は内湾し、口唇部は短く外反する/口縁部と胴部との境は横ナデ/以下は鋭い段を有する/在地系土師器	暗黄褐色	砂粒を多く、黄褐色色粒子・角閃石・ガラス質粒子を僅かに含む	内面:横ナデ(回転ナデ)/外面:口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ	床面上	70%
第12802	土師器 鉢	7.3	21.5	8.2	浅鉢タイプの注口土器/口縁部は鋭んでいるが、口唇部に注口と考えられる部分がある/底部は平底/在地系土師器	灰褐色~明褐色	砂粒を多く、黄褐色色粒子・茶褐色色粒子を僅かに含む	内面:ヘラナデ/外面:口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ、口縁部直下に指頭押捺による成形痕(指紋)あり/注口と思われる部分は内外面から隔れる、粗い成形	床面上	70%
第12803	土師器 甕	(33.8)	21.4	-	長胴/口縁部は外反する/口縁部と胴部との境は段差あり/最大径は口縁部と胴部上半のほぼ同位置/外面胴部上半以下に粘土が付着している/在地系土師器	暗黄褐色	砂粒を多く、黄褐色色粒子を含む	内面:口縁部は横ナデ、以下ヘラナデ/外面:口縁部は横ナデ、以下ヘラナデ、口縁部直下を中心に若干の指頭押捺による成形痕(指紋)あり	床面上	口縁部~胴部下半90%

第8表 89号住居跡出土遺物一覧

(単位:cm)

標図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第14図1	土師器 環	(6.8)	(16.2)	—	大型分岐環/口縁部は直立/口縁部と底部との境の両方には、縦密には上部の皮目を利用して段状に作出されている/全面黒彩が施され、黒色土器と考えられる	胎土：淡茶褐色	黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒・小石を含む	内面：口縁部は横ナデ、又はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後細いヘラ磨き調整	貯蔵穴	25%
第14図2	土師器 壺	18.1	(9.7)	5.8	小型壺か/口縁部は「コ」の字状/胴部は球状で最大径は中位/底部は帯赤底状にやや窪む/全面赤彩/入間系土師器の可能性あり	暗赤褐色～暗黄褐色	砂粒をやや多く、茶褐色粒子を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はハケ目調整を基本とするがハケ目調整の可能性がある/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り	南西コーナー 柱穴すく西 口縁部の床面上	60%
第14図3	土師器 鉢	24.6	27.2	7.4	大型鉢/口縁部は外反する/最大径は胴部下半/遺存状態が悪いため、キシレン溶液（パラロイドB72）を含液/外面は黒く輝いている	暗黄褐色を基調	砂粒・小石を多く含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り	貯蔵穴	90%
第14図4	土師器 壺	(11.6)	15.5	—	中型壺か/口縁部は外反する/最大径は胴部中位/全面赤彩/入間系土師器の可能性あり	胎土：明褐色を基調	砂粒を多く、茶褐色粒子を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はハケ目調整、口縁部にはハケ目痕が残る	南西コーナー 柱穴周辺の 床面上	口縁部～胴部 下半60%
第14図5	土師器 甕	(18.4)	19.0	—	長甕/口縁部は外反/胴部はやや長胴化の兆し/全体に黒色を呈する	胎土：淡茶褐色	砂粒をやや多く、角閃石・小石を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はハケナデの類か/外面：口縁部は横ナデ、以下はハケ目調整	入口部の左 横の床面上	20%
第14図6	土師器 壺	(19.9)	(15.7)	—	中型壺か/口縁部はやや「コ」の字状/最大径は胴部中位/全面赤彩/入間系土師器の可能性あり	胎土：暗赤褐色を基調	砂粒をやや多く、茶褐色粒子を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデの類か/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後細いヘラ削り（スリッパか）	南西コーナー 柱穴周辺の 床面上	口縁部～胴部 下半60%
第14図7	土師器 壺	(18.4)	(19.3)	—	中型壺か/口縁部はやや「コ」の字状/最大径は胴部中位/全面赤彩/入間系土師器の可能性あり	胎土：淡茶褐色	砂粒・小石を多く、茶褐色粒子を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り	貯蔵穴及び 南西コーナー の床面上	口縁部～胴部 中位35%
第14図8	土師器 壺	(23.3)	(19.2)	—	大型壺/複合口縁/口縁部は「コ」の字状/胴部は球状で最大径は胴部中位/入間系土師器の可能性あり	胎土：暗赤褐色～茶褐色	砂粒をやや多く、黄褐色粒子・小石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り（ハケナデか）	南西コーナー 柱穴周辺の 床面上	口縁部～胴部 中位30%
第15図9	土師器 甕	31.0	23.4	8.9	底部は踏抜き式/複合口縁/口縁部は最大径/全面赤彩/入間系土師器の可能性あり	胎土：暗黄褐色～暗赤褐色	砂粒をやや多く、茶褐色粒子を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ磨き調整/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ磨き調整/外面複合部には指押痕あり	南西コーナー 柱穴周辺の 床面上	70%
第15図10	土師器 甕	28.1	(24.0)	9.5	底部は踏抜き式/複合口縁/口縁部は最大径/やや作り不良/この土器についても部分的に赤彩の付着痕があると思われるため全面赤彩の可能性あり	淡茶褐色	砂粒・小石をやや多く含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はハケナデ後部分的に細いハケ目調整/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後細いハケ目調整/外面複合部には指押痕あり	貯蔵穴及び 南西コーナー の床面上	60%
第15図11	土師器 甕	(11.3)	(21.0)	—	小型壺/複合口縁/最大径は口縁部中/全面赤彩	胎土：淡黄褐色～暗褐色	砂粒を含む	内面：口縁部横ナデ、以下ハケ目調整/外面：口縁部及びその直下は横ナデ、以下ハケ目調整	南西コーナー 柱穴	口縁部～胴部 下半30%

第9表 90号住居跡出土遺物一覧

標図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第17図1	土師器 環	(3.9)	(13.8)	—	いわゆる比企型環/口縁部は短く外反/口唇部は面に沈凹あり/内面及び外面口縁部赤彩/入間系土師器と考えられる	胎土：暗赤褐色	砂粒・小石を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り	貯蔵穴前面の 窪み内	30%
第17図2	土師器 環	(3.5)	—	—	口縁部は直立する/口縁部と底部との境は境を呈する/無彩/在地系土師器と考えられる	淡茶褐色	砂粒を多く、小石を僅かに含む	内面：横ナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り	覆土中	口縁部～体部 小破片

第10表 91号住居跡出土遺物一覧（1）

(単位：cm)

種別番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第17図3	土師器 甕	38.0	(19.9)	7.6	長頸/口縁部は外反する /口縁部と胴部との境は やや段差あり/最大径は 口縁部部/在地系土師器	暗黄褐色 を基調	砂粒を多く、金 雲母を含む	内面:口縁部は横ナデ、 以下はヘラナデ/外面: 口縁部は横ナデ、以下は ヘラ削り後いでないにヘ ラナデ(スリッパか)	貯蔵穴前面 の窪み西側の 床面レベル	80%
第17図4	土師器 甕	37.8	19.6	6.5	長頸/口縁部は外反する /口縁部と胴部との境は スムーズ/最大径は口縁 部と胴部中位のほぼ同位 置/在地系土師器	暗黄褐色 ～暗褐色	砂粒を多く、金 雲母・角閃石を 僅かに含む	内面:口縁部は横ナデ、 以下はヘラナデ/外面: 口縁部は横ナデ、以下は ヘラ削り後いでないにヘ ラナデ(スリッパか)	カマド右横 の床面上	50%
第17図5	土師器 甕	(34.8)	20.1	—	長頸/口縁部は外反する /口縁部と胴部との境は やや段差あり/最大径は 口縁部と胴部中位のほぼ 同位置/在地系土師器	暗黄褐色	砂粒を多く、角 閃石を僅かに含 む	内面:口縁部は横ナデ、 以下はヘラナデ/外面: 口縁部は横ナデ、以下は ヘラ削り後いでないにヘ ラナデ(スリッパか)	貯蔵穴東側 の凸堤北の 床面上	口縁部～胴 部下半60%
第17図6	土師器 甕	(23.0)	(18.4)	—	長頸/口縁部は外反する /口縁部と胴部との境は スムーズ/最大径は口縁 部と胴部中位のほぼ同位 置/全体に黒く焼けてい る/在地系土師器	暗茶褐色 を基調	砂粒を多く、金 雲母を僅かに含 む	内面:口縁部は横ナデ、 以下はヘラナデ/外面: 口縁部は横ナデ、以下は ヘラナデ(スリッパか?)	貯蔵穴東側 の凸堤上	口縁部～胴 部下半60%
第17図7	土師器 甕	(10.3)	(20.0)	—	長頸/口縁部は外反する /口縁部と胴部との境は スムーズ/在地系土師器	暗黄褐色	砂粒を多く、茶 褐色粒子・金雲 母を僅かに含む	内面:口縁部は横ナデ、 以下はヘラナデ/外面: 口縁部は横ナデ、以下は ヘラナデ(スリッパか)	カマド前面 の床面上	口縁部～胴 部中位20%
第18図8	土師器 甕	(24.0)	—	6.2	長頸/底部に木葉痕あり /在地系土師器	暗黄褐色 ～茶褐色	砂粒を多く含む	内面:ヘラナデ/外面: ヘラ削り後いでないにヘ ラナデ(スリッパか)	貯蔵穴東側 の凸堤上と カマド右横 の床面上	胴部中位～ 底部60%
第18図9	土師器 甕	(23.7)	22.2	—	大型丸甕/口縁部はやや 「コ」の字状を呈する/ 最大径は胴部中位	明褐色	砂粒をやや多く、 角閃石を僅かに 含む	内面:口縁部は横ナデ、 口縁部は横ナデ、以下は いでないにヘラナデ(ス リッパか)、その後胴部 下半に粗いヘラ磨き調整	貯蔵穴	口縁部～胴 部下半100 %
第18図10	土師器 甕	(10.8)	25.8	—	超大型丸甕/口縁部は大 きく外反する/在地系土 師器	淡茶褐色 ～黒褐色	砂粒を多く、茶 褐色粒子・金雲 母を含む	内面:口縁部は横ナデ、 以下はヘラナデ/外面: 口縁部は横ナデ、以下は ヘラ削り後粗いヘラ磨き 調整/外面口縁部には指 頭押捺痕あり	北西コーナー の床面上	口縁部～胴 部中位60%
第18図11	土師器 甕	(15.9)	23.4	—	超大型丸甕/口縁部は 「コ」の字状を呈する/ 口縁部は大きく外反する /在地系土師器	内面:黒 色/外面: 淡茶褐色 を基調	砂粒を多く含む	内面:口縁部は横ナデ、 以下ヘラナデ/外面:口 縁部は横ナデ、以下ヘラ ナデ(スリッパか)後粗 いヘラ磨き調整	カマド前面 の床面上	口縁部～胴 部上半90%
第18図12	土師器 甕	(29.3)	—	10.9	底部は筒抜け式/口縁部 と胴部との境はスムーズ /底部部部は打ち欠いた 状況であるため、焼成後 の成形か/在地系土師器	暗黄褐色	砂粒を多く、金 雲母・小石を含 む	内面:ヘラナデ後縦方向 のヘラ磨き調整/外面: ヘラ削り後ヘラナデ(磨 き削)	貯蔵穴	胴部上半～ 底部80%

第10表 91号住居跡出土遺物一覧(2)

種別番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第20図1	須恵器 蓋	2.8	12.2	—	径の約2.2cm・高さ0.9cm /口縁部は前曲し面取り /扁平であるが天井部は 笠形か/埴山製品	暗灰褐色	白色針状物質・ 白色砂粒をやや 多く含む	ロクロ成形/外面天井部 は回転ヘラ削り調整	北西コーナー 近くの床面 上	60%
第20図2	須恵器 環	3.2	(11.4)	6.2	口縁部直下にやや膨らみ あり/東金子製品と思われ る	青灰褐色	白色砂粒を僅か に含む	ロクロ成形/ロクロ回転 は右回転/底部に回転糸 切り痕	覆土中	30%
第20図3	須恵器 環	3.3	(11.5)	(5.7)	口縁部直下にやや膨らみ あり/東金子製品と思われ る	口縁部: 暗灰褐色 /以下: 暗茶褐色	白色砂粒を僅か に含む	ロクロ成形/ロクロ回転 は右回転/底部に回転糸 切り痕	覆土中	40%
第20図4	土師器 環	(2.9)	—	5.2	いわゆる南武製型環/体 部下半にやや影らそもつ	淡黄褐色	砂粒をやや多く、 角閃石を僅かに 含む	ロクロ成形/外面に指頭 押捺痕あり/底部は手持 ちヘラ削りあるいは糸切 りか	覆土中	体部～底部 40%

第11表 92号住居跡出土遺物一覧

(単位:cm)

種別番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第22図1	土師器 環	3.5	11.5	—	いわゆる比企型杯/口縁部は外傾する/口唇部内面に沈線あり/口縁部と底部の境は線を有する/内面及び外面口縁部赤彩/入間系土師器と考えられる	胎土：暗赤褐色	砂粒・小石を多く含む	内面：横ナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り	貯蔵穴内	完形品
第22図2	土師器 環	3.2	11.5	—	いわゆる比企型杯/口縁部は外傾する/口唇部内面に沈線あり/口縁部と底部の境は段を有する/内面及び外面口縁部赤彩/口縁部内面に消耗が著しい/入間系土師器と考えられる	胎土：淡茶褐色	砂粒・小石を多く含む	内面：横ナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り	カマド右横の壁溝内	完形品
第22図3	土師器 環	3.5	(11.4)	—	いわゆる比企型杯/口縁部は外反する/口唇部内面に沈線あり/口縁部と底部の境は線を有する/内面及び外面口縁部赤彩/入間系土師器と考えられる	胎土：暗赤褐色	砂粒を多く、茶褐色粒子・小石を僅かに含む	内面：横ナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り	カマド右横の床面上	40%
第22図4	土師器 甕	(34.4)	(20.6)	—	長胴/口縁部は外反する/口縁部と胴部の境は段差あり/最大径は口縁部と胴部中心とはほぼ同位置/底部には木葉痕か/外面に粘土付着あり/在地系土師器	淡茶褐色	砂粒を多く、金雲母・小石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ヘラナデ	カマド周辺の床面上及び貯蔵穴内	25%
第22図5	土師器 甕	(30.4)	17.5	—	長胴/口縁部は外反する/口唇部は丸くめくれている/口縁部と胴部の境は段差あり/最大径は口縁部と胴部中心とはほぼ同位置/外面胴部中心以下に粘土付着あり/在地系土師器	暗褐色	砂粒を多く、黄褐色粒子・金雲母・角閃石を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り、胴部中心以下は粘土付着により調整が不明	カマドの左右横の床面上	口縁部～胴部下半60%
第22図6	土師器 甕	(14.8)	(20.4)	—	長胴/口縁部は大きく外反する/口縁部と胴部の境はスムーズ/最大径は口縁部/在地系土師器	明褐色	砂粒を多く、金雲母を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り、口縁部直下の胴部上半は未調整で、指頭押捺による成形痕が観察される	カマド左横の床面上	口縁部～胴部中心位30%
第22図7	土師器 甕	(6.5)	—	8.0	大型丸甕/平底/底部に木葉痕あり/在地系土師器	内面：灰褐色/外面：暗褐色	砂粒を多く、茶褐色粒子・金雲母・角閃石を僅かに含む	内面：ヘラナデ/外面：ヘラ削り後ヘラ磨き調整	カマド右横の床面上	胴部下半～底部60%
第22図8	土師器 甕	(25.5)	(25.0)	—	大型タイプ/口縁部は外反する/口縁部と胴部の境はスムーズ/最大径は口縁部/在地系土師器	淡茶褐色	砂粒を多く、黄褐色粒子・金雲母を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ後縦方向に粗いヘラ磨き調整/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ヘラナデ(磨き約)	カマド右袖部を中心に右横の床面上	口縁部～胴部下半20%
第22図9	土師器 甕	(14.2)	(21.3)	—	中型タイプ/口縁部は外反する/口縁部と胴部の境は段差あり/最大径は口縁部/在地系土師器	暗黄褐色	砂粒をやや多く含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り/外面：口縁部は横ナデ、以下は粗いヘラ削り	カマド右横の床面上	口縁部～胴部下半30%
第22図10	須恵器 蓋	—	—	—	天井部と口縁部との境は段を有する/有段直下は中や浅淵状/外面は暗褐色を呈するが赤彩か/生産地不明	内面：暗褐色/外面：灰色	白色砂粒・小石を多く含む	内外面：ロクロ成形/ロクロ回転は左回転か	覆土中	天井部～口縁部小破片

第12表 93号住居跡出土遺物一覧

種別番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第23図	土師器 環	4.9	14.9	—	いわゆる比企型杯/口縁部は短く外反する/最大径は全体部上半/全面赤彩/入間系土師器と考えられる	胎土：暗赤褐色	茶褐色粒子・砂粒を含む	内面：横ナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下ヘラ削り後ていねいにヘラナデ(磨き約)	貯蔵穴	70%

第13表 94号住居跡出土遺物一覧

(単位：cm)

採掘番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第25図1	土師器 環	(2.5)	—	—	黒色有段環/口縁部は外傾する/口唇部内面には幅1mmの太めの沈線がまわる/口縁部と底部との境は段を有する/内外面黒彩/非常に作りの良い精巧品	胎土は暗茶褐色	白色砂粒を僅かに含む程度で精練されている	内面:横ナデ/外面:口縁部は横ナデ、底部は粗いへう削り	覆土中	口縁部小破片
第25図2	土師器 環	(31.5)	(19.4)	—	黒色有段環の底部小破片と思われる/内外面黒彩/内面には放射状の暗文が施文される	胎土は暗灰褐色	白色砂粒を僅かに含む程度で精練されている	内面:へうナデ後放射状の暗文が施文される/外面:へう削り後粗いへう磨き調整	覆土中	底部小破片
第25図3	土師器 甕	(4.3)	(14.6)	—	口頸部はやや「コ」の字状を呈する/口唇部は外側に丸くめくれている	明茶褐色	砂粒を多く、金雲母を僅かに含む	内面:口縁部は横ナデ、以下はハケ目調整/外面:ハケ目調整後、口縁部は横ナデ	覆土中	口縁部~胴部上半25%
第25図4	土師器 甕	(9.2)	—	—	大型品/胴部は球状を呈する	淡茶褐色~暗茶褐色	砂粒をやや多く、茶褐色粒子・橙色粒子を含む	内面:ハケ目調整/外面:ハケ目調整後粗いへう磨き調整	覆土中	胴部上半~中位破片
第25図5	土師器 甕	(7.0)	—	—	胴部は球状を呈する	内面:暗茶褐色/外面:黒色	砂粒・小石を多く、茶褐色粒子を含む	内面:ハケ目調整/外面:ハケ目調整後粗いへう磨き調整	覆土中	胴部中位~下半破片

第14表 95号住居跡出土遺物一覧

(単位: cm)

第5節 中世以降の遺構・遺物

(1) 概要

中世以降の遺構としては、土坑6基(75~78・80・81D)と溝跡6本(16~21M)が検出された。土坑については、出土遺物がなかったため、時期を決定するに至らなかった。

溝跡は「柏の城」関連の堀跡と考えられる遺構である。18~20Mからは出土遺物がなかったが、16・17・21Mからは、陶磁・土器・石製品・瓦・板碑・銅銭などが出土した。

(2) 土坑

75号土坑

遺構 (第26図)

〔位置〕 2区。

〔構造〕 坑底は平坦で東に偏る。壁は西側は緩かに、東側は急斜に立ち上がる。(平面形) ほぼ円形。(規模) 径約1.5m。(深さ) 95cm。

〔遺物〕 出土しなかった。

〔時期〕 中世以降。

76号土坑

遺構 (第26図)

[位置] 2区。

[構造] 坑底は北側が深く南側が浅くなっている。(平面形) 長方形。(規模) 1.75×0.47m。(深さ) 30~22cm。(長軸方位) ほぼN-S。(覆土) 骨粉状物質・炭化物・焼土を含む暗褐色土を基調とする。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 中世以降。

77号土坑

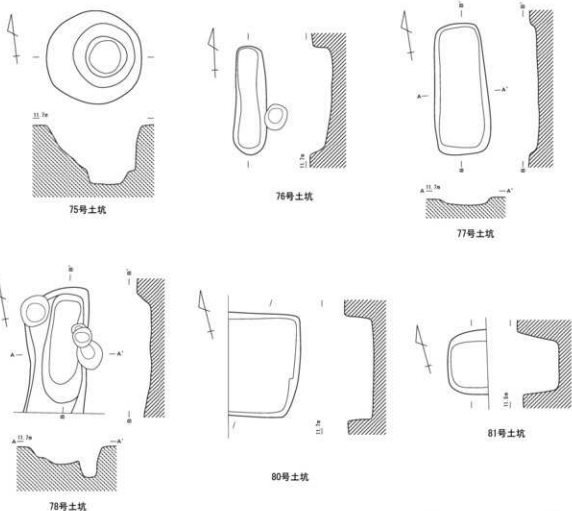
遺構 (第26図)

[位置] 2区。

[構造] 坑底は平坦である。(平面形) 長方形。(規模) 2.20×0.85m。(深さ) 15cm。(長軸方位) N-5°-E。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 中世以降。



第26図 土坑 (1/60)

78号土坑

遺構 (第26図)

[位置] 2区。

[構造] 南側は2区17Mに切られ、さらに後世のピットにも切られている。北側が一段低くなっている。(平面形) 不整な長方形。(規模) 不明×1.00m。(深さ) 10~28cm。(長軸方位) N-10°-E。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 中世以降。

80号土坑

遺構 (第26図)

[位置] 3区。

[構造] 93Hを切る。西側は調査区域外である。(平面形) 長方形か。(規模) 不明×1.66m。(深さ) 確認面からの深さは81cmを測る。(長軸方位) 不明。(覆土) ロームブロックを多量に含む暗褐色土を基調とする。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 中世以降。

81号土坑

遺構 (第26図)

[位置] 3区。

[構造] 91Hを切る。東側は調査区域外である。(平面形) 長方形か。(規模) 不明×1.03m。(深さ) 確認面からの深さは90cmを測る。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 中世以降。

(3) 溝跡

16号溝跡

遺構 (第27図)

[位置] 2区。

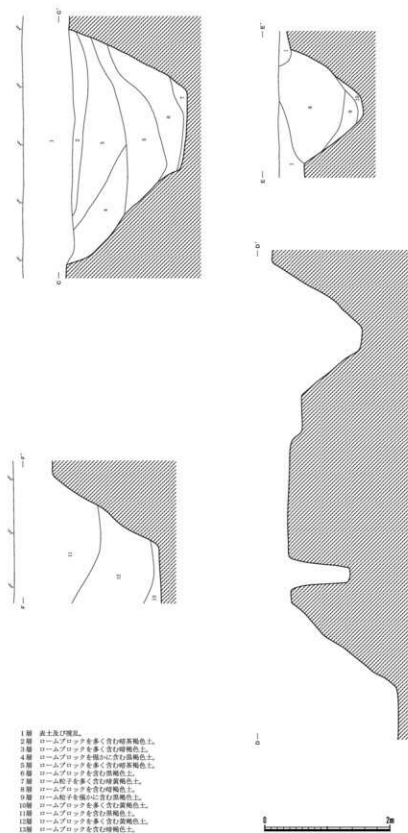
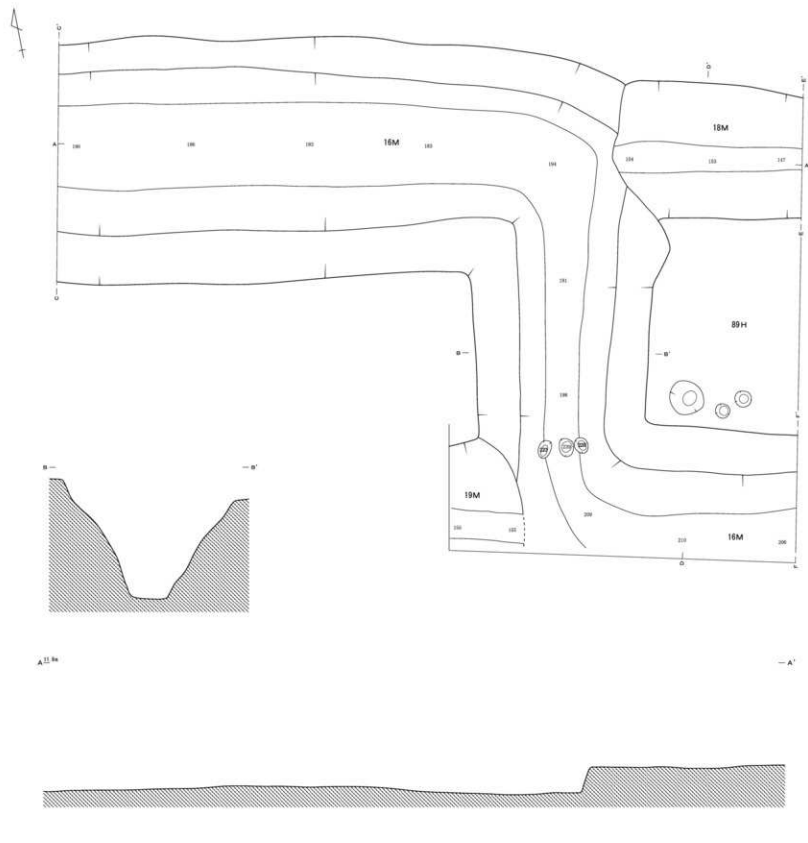
[構造] 北側での走向方位はN-75°-Wで、東側はクランク状に屈曲する。東側で18Mと重複し、89Hを切り、西側で19Mに重複する。断面は箱葉研形を呈し、溝底は平坦である。壁の立ち上がりは、全体的に北側の壁が南側の壁よりも直線的で勾配が急斜面で約62°、南側の壁は約45°とやや緩やかである。上幅3.74m・下幅1.30m・深さ1.83~2.10m、現況GLからの深さは約2.6mを測る。覆土はセクションC-C'で6層に分層される。

[遺物] 陶磁器・土器、石製品、瓦が出土した。

[時期] 中世以降。

遺物 (第28図、図版12、第15・16表)

1~4は磁器で、2は青磁である。5~8は陶器、9~11は土器である。



第27図 16・18・19号溝跡 (1/60)

12は石製品で、砥石である。撥形を呈する。長さ7.0cm・幅3.2cm・厚さ3.1cm・重さ72g。上端面を除きすべての面が使用されている。石質は凝灰岩である。

13～21は瓦である。

17号溝跡

遺構 (第8・29図)

[位置] 1・2区。

[構造] 調査時において、1・2区の両区から検出された溝跡は、方向性が同一ということから、17Mと同一遺構と扱われた遺構である。しかし、両区から検出された溝跡については、北壁で見た場合、1区検出の溝跡には、5m程北側にずれがあるため、本来は別遺構である可能性もある。ここでは、17Mを1・2区に区分し、説明することにする。(1区)88Hを切る。調査区が狭いために完掘することはできなかったため、詳細は不明である。確認できる範囲での長さは7.50mである。(2区)90H・78Dを切る。走向方位はN-75°-Wで、東西方向の角度では、16Mと方向性は同一である。断面は箱葉研形を呈し、溝底は平坦である。壁の立ち上がりは、全体的に南側の壁が北側の壁よりも直線的で勾配は50°、南側の壁はやや急斜で55°である。確認できる範囲での長さは5.60mである。上幅4.28m・下幅1.22m・深さ2.10m前後、現況G Lからの深さは約2.8mを測る。覆土は7層に分層される。

[遺物] 陶器・土器、板碑、銅銭が出土した。

[時期] 中世以降。

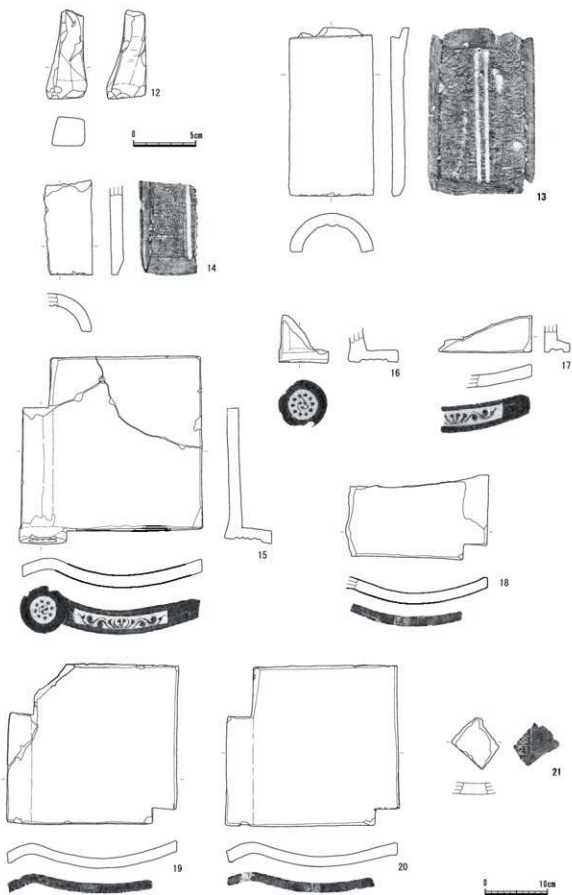
遺物 (第8図、第30図、図版11-1～5、第15・20表)

() は現存長さ/確定長さ

図版番号	遺構名	種別	器種	法 量			製作の特徴等	推定産地	時 期
				器高	口径	底径			
図版12-1	16M	磁器	仏飯具	4.8	(6.4)	3.8	脚台部あり/脚部高:2.5cm/染付/芙蓉手	肥前系	18c前半
図版12-2	16M	青磁	碗	(2.5)	-	-	口縁部小破片	肥前系	18c
図版12-3	16M	磁器	碗	(3.0)	-	-	体部下半破片/高台付	肥前系	18c
図版12-4	16M	磁器	蓋	3.3	(10.0)	-	天井部は筒掛けの器形/受部の上端と下端は無輪/重ね蓋の可能性ある	肥前系	不明
図版12-5	16M	陶器	甕	-	-	-	口縁部破片/内外面鉄輪	常滑	17c前半
図版12-6	16M	陶器	甕	-	-	-	胴部破片/外面鉄輪	常滑	16c～17c
図版12-7	16M	陶器	甕	-	-	-	胴部小破片/外面鉄輪	常滑	16c～17c
図版12-8	16M	陶器	鉢	-	-	-	胴部下半破片/底部を除き内外面鉄輪	瀬戸	16c～17c
図版12-9	16M	土器	かわらけ	(1.6)	-	-	小型品/底部に回転糸切り痕あり	在地系	15c後半 ～16c初
図版12-10	16M	土器	灯明具	(4.2)	-	(6.5)	脚台部破片	在地系	19c
図版12-11	16M	土器	焙烙	-	-	-	底部破片	在地系	不明
図版11-3-1	17M	陶器	皿	(1.0)	-	-	底部破片/削り出し高台/灰輪/内面底部に印刻花文	瀬戸	15c
図版11-3-2	17M	陶器	壺	-	-	-	胴部破片/外面に灰輪/胎土の色調:灰白色/胎土には白色砂粒を含む	瀬戸	15c
図版11-3-3	17M	土器	かわらけ	2.1	7.0	4.1	ロクロ成形/底部に回転糸切り痕あり	在地系	16c
図版11-3-4	17M	土器	かわらけ	2.3	(8.0)	(4.6)	ロクロ成形/底部に回転糸切り痕あり	在地系	16c

第15表 16・17号溝跡出土の陶磁器・土器一覧

(単位: cm)



第28図 16号溝跡出土遺物 (1/3・1/6)

()は現在値

種別番号	種類	全長	全幅	厚さ	尻切込長	重さ	主な特徴	備考
第28図13	丸瓦	26.7	13.2	2.1		1,900	胴部内面成形痕	
		内径	玉縁長	小口長	高さ			
		9.4	1.5	1.8	6.1			
第28図14	丸瓦	(15.0)	(7.5)	2.0		355	胴部内面成形痕	小破片
		高さ						
		(6.0)						
第28図15	小丸軒枝瓦	27.5	28.7	2.0	7.9	2,300	小丸瓦当の文様は三つ巴文左巻き、珠文8/平部瓦当の文様は均整唐草文	尻切込部近くに釘留め穴あり
		椀幅	椀長	瓦当外径	瓦当内径			
		5.0	20.6	7.3	4.5			
		文様区高						
		2.1						
第28図16	小丸軒枝瓦	(7.5)	—	—	—	171	小丸瓦当の文様は三つ巴文左巻き、珠文10	小丸瓦当のみ
		椀幅	椀長	瓦当外径	瓦当内径			
		—	—	7.6	4.8			
		(5.5)	(14.6)	2.0	—			
第28図17	軒枝瓦	文様区高				213	平部瓦当の文様は均整唐草文	小破片
		2.4						
		(13.5)	(22.7)	1.8	—			
第28図18	椀瓦	椀幅	椀長	頭切込幅	頭切込長	722	刷印「平宗」あり	
		—	—	3.8	2.2			
		25.0	25.7	1.7	(2.8)			
第28図19	椀瓦	椀幅	椀長			1,500	刷印「平宗」あり	
		17.3	3.9					
		25.3	27.1	1.6	7.8			
第28図20	椀瓦	椀幅	椀長	頭切込幅	頭切込長	1,700	刷印「平宗」あり	
		4.3	17.1	3.8	2.6			
第28図21	瓦	(8.2)	(7.5)	1.8		82	刷印「〇谷21」あり	小破片

(単位: cm・g)

第16表 16号溝跡出土の瓦一覧

(1区) 板破片が1点出土した(第8図、図版11-3、第20表)。

(2区) 1・2は陶器、3・4は土器である(第30図、図版11-1~5、第15・20表)。

5は銅銭で、皇宋通宝(初铸 北宋1039年)と思われる。推定外径2.4cm・厚さ0.1cm・重さ0.9g。

18号溝跡

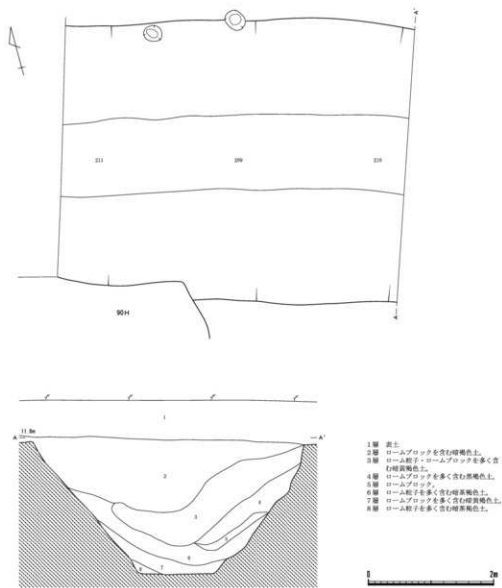
遺構 (第27図)

[位置] 2区。

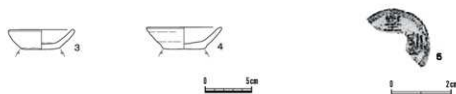
[構造] 西側で16Mに重複する。走向方位はN-75°-Wで、16Mの北側部分と方向性が同一であるため、見かけ上、延長上にある溝跡と言える。16Mに比べ、幅員が狭く、深さも浅い。確認できる範囲での長さは3.0mである。上幅1.80m・下幅0.36m・深さ1.47~1.54mを測る。覆土は3層に分層される。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 中世以降。



第29図 2区17号溝跡 (1/60)



第30図 2区17号溝跡出土遺物 (1/4・4/5)

19号溝跡

遺構 (第27図)

〔位置〕 2区。

〔構造〕 16Mの西側で重複する。部分的な検出のため、詳細は不明である。走向方位は $N-75^{\circ}-W$ で、16Mの南側部分と方向性が同一であるため、見かけ上、延長上にある溝跡と言える。確認できる範囲での長さは1.2mである。下幅0.48m・深さ1.55mを測る。

〔遺物〕 出土しなかった。

〔時期〕 中世以降。

20号溝跡

遺構 (第31図)

〔位置〕 2区。

〔構造〕 $3Y \cdot 92H$ を切る。断面は箱葉研形で、溝底は平坦である。壁の立ち上がりは、途中（溝底から高さ約0.6mの位置まで）は勾配が 70° と急斜であるが、それより上方は 55° とやや緩やかに変化している。走向方位は $N-77^{\circ}-W$ で、直線的である。確認できる範囲での長さは5.60mである。上幅1.74m・下幅0.72m・深さ1.16~1.21mを測る。覆土は6層に分層される。

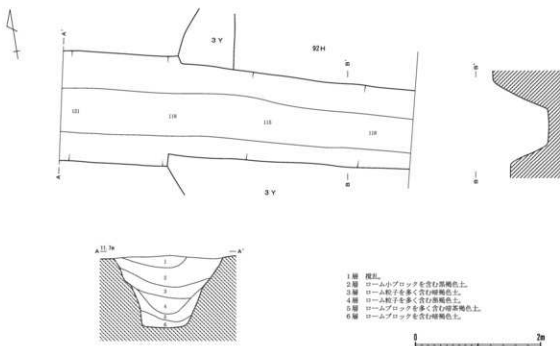
〔遺物〕 出土しなかった。

〔時期〕 中世以降。

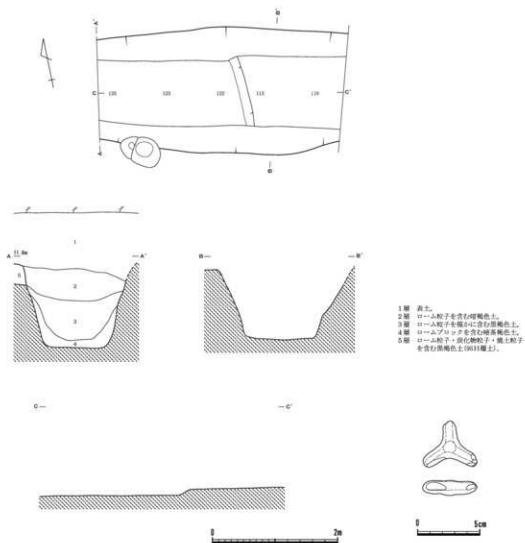
21号溝跡

遺構 (第32図)

〔位置〕 3区。



第31図 20号溝跡 (1/60)



第32図 21号溝跡・出土遺物 (1/60・1/3)

〔構造〕 96Hを切る。断面は箱葉研形で、溝底は平坦であるが、東半部と西半部では西半部で10cm程深くなっている。壁の立ち上がりは、セクションA-A'では勾配が70°と急斜であるが、セクションB-B'では約60°とやや緩やかである。走向方位はN-80°-Wで、直線的である。確認できる範囲での長さは3.90mである。上幅2.1m・下幅1.08m・深さ1.10~1.25mを測る。覆土は3層に分層される。

〔遺物〕 土製品1点が出土した。

〔時期〕 中世以降。

遺物 (第32図)

三叉状土製品で、トチンと思われる。最大幅4.3cm・厚さ1.2cm・重さ7.6g。全面ナデによりていねいに仕上げられている。

第6節 遺構外出土遺物

ここでは、表土や攪乱から出土した遺物、そして遺構内であるが、明らかに他時期の混入品である遺物を前節までの各時代の出土遺物と区別し、遺構外出土遺物として扱うことにする。

今回、遺構外出土遺物としては、旧石器・縄文時代の石器、土器（早・前・中・後・晩期）、弥生時代の土器、古墳時代後期の土器、平安時代の遺物、中世以降の遺物に分類できる。

（1）旧石器・縄文時代の石器（第33図1～8、第17表）

1は楔形石器、2は削器、3はR、F、4は石織未製品、5は剥片、6は磨製石斧、7は石皿、8は磨石である。

（2）縄文時代の土器（第34～36図9～102、第18表）

縄文時代の土器は早期後葉の条痕文系から後期前葉の堀之内式にわたる時期の土器が出土した。その中でも中心となるのは前期後葉の諸磯式である。城山遺跡では他の調査地点でも前期末から中期初頭にかけての土器が多く出土する傾向があるが、本地点では前期前・中葉の羽状縄文系の土器も比較的多く出土した。

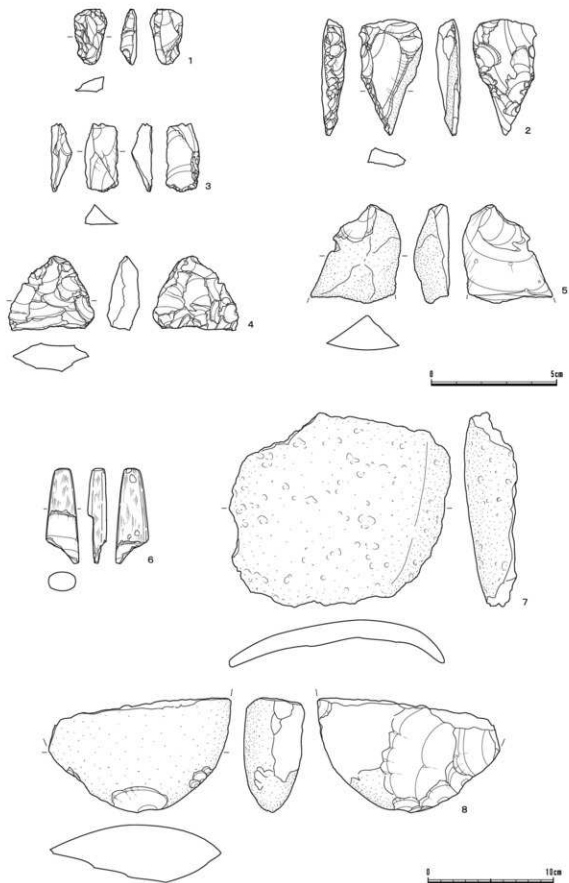
9～16は条痕文系土器の破片である。いずれも文様は貝殻条痕文もしくは無文で、型式の詳細は不明である。9は小突起を持つ口縁部の破片で、口唇部に棒状の工具で斜めに刻み（押捺）が加えられている。本地点で出土した条痕文系土器は繊維の混入が少なく焼成も良好なものが多かった。

17～38は前期前・中葉の羽状縄文系の土器片で、縄文部分のみの胴部片が多い。17は貝殻背圧痕が施文されており、花積下層式と考えられる。18・19ははしご状の刻みと瘤状の貼付文を持つ破片。20は半截竹管で格子状の沈線文が施文される。関山式の文様帯に見られる幾何学模様の一部であろうか。21は小破片で判りにくいが、太いRに細いLを4条、Lに撚り合わせている。22は底部片で地文は縄文LR。上げ底になっており、底部近くまでループ文が施文されている。18～22は関山式。23は2～5mm程度の押しき文が不規則に施文されている。24は沈線みの破片。25は半截竹管で沈線を引いた上に、半月形の刺突文を施文している。地文は無節の羽状縄文であろうか。以上23～25は黒浜式。26～28は無節縄文の破片。29～31はループ文を持つ破片。32～38は単節縄文の胴部片。

39～62は諸磯式土器の破片である。39は半截竹管による肋骨文が施文される土器。40～43は縄文地に沈線と刺突文が施文される土器。44・45は平行沈線と大型の爪形文が施文される土器。46～56は半截竹管による平行沈線が施文される土器。そのうち47・49・50は地文にRLの縄文を持つ。57～60は浮線文の土器。57は口唇部に沈線を巡らせ、口唇部下に3本の浮線文を巡らせ、以下には浮線文による渦巻き文と思われる弧線文が見られる。浮線文は細かい刻みを伴う。59は地文縄文に刻みを伴う浮線文を巡らせている。その下には浮線文による梯子状の文様を巡らせている。61・62は小形の突起状の貼付文を施文する土器。

63は前期後葉の浮島式土器。64は型式不明だが半截竹管による沈線で三角形が描かれており、前期後葉の所産と思われる。

65～75は中期初頭の初産と思われる土器で、主に五領ヶ台式と思われる。65～69は半截竹管によって



第33図 遺構外出土石器 (2/3・1/3)

種別番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	遺存状態	出土位置
第33図1	楔形石器	黒曜石	21.80	13.11	6.42	1.50	完形	91H
第33図2	削器	黒曜石	45.42	24.82	8.95	7.90	完形	18M
第33図3	R、F	チャート	27.04	13.16	8.09	2.10	完形	92H床直
第33図4	石鏝未製品	チャート	29.01	34.20	12.18	11.20	—	19M
第33図5	剥片	黒曜石	39.01	34.58	14.11	14.00	下部欠	16M
第33図6	磨製石斧	粘板岩	76.46	26.52	15.30	34.10	下部欠	21M
第33図7	石皿	安山岩	170.78	159.94	35.55	761.60	欠損	76D
第33図8	磨石	花崗岩	84.82	149.31	46.05	735.60	上部欠	88H

第17表 遺構外出土の石器一覧

(単位: mm・g)

施文される土器。66は口縁部文様帯に半截竹管で杉綾文を施文し、胴部との境に3本の平行沈線を施文している。70は口縁直下に半截竹管で平行沈線を引き、下の線に爪型文を施文している。71・72・74は縄文を地文にもつ土器。73は集合沈線による地文に、平行沈線で浮線状の懸垂文を施文する。この懸垂文には意図したものか不明だが、ごく細い刻み状の細沈線が認められる。75は複合口縁状になっているが、内外面とも口唇部直下が口縁に沿ってへこんでおり、輪積み痕の可能性もある。

76～80は中期中葉の勝坂式土器。

81～88は中期後葉の土器で、連弧文系の88を除き加曽利E式。

89～102は後期前葉の土器である。89・90は沈線文の間に縄文を施文する土器で、称名寺式と思われる。91～93は沈線文が描かれる土器で堀之内式。94～97は後期の土器と思われるが型式が不明なもの、98～102は粗製土器である。

(3) 弥生時代後期末葉から古墳時代前期の土器 (第36・37図103～118)

鉢形土器 (103・104)

103は口縁部から体部上半の小破片である。口縁部は外傾し、内外面は赤彩が施される。胎土の色調は淡黄褐色を呈し、胎土には砂粒を僅かに含む。内外面ハケ目調整後粗いヘラ磨き調整が施される。20Mからの出土である。

104は口縁部小破片である。口縁部にはR縄文が施文される。内外面は赤彩が施される。胎土の色調は暗黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。内外面について粗いヘラ磨き調整が施される。90Hからの出土である。

高坏形土器 (105)

脚台部破片である。外面は赤彩が施され、途中1孔をもつ。胎土の色調は暗黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。内面はヘラナデ後粗いヘラ磨き調整、外面はハケ目調整後ヘラ磨き調整が施される。

壺形土器 (106～112)

106は複合口縁を呈する口縁部破片である。文様としては、内面及び口唇端部に網目状燃糸文が施文され、口唇部外面には刻み目が付されるが、外面の複合部は無文である。内面文様部と外面複合部を除き赤彩が施される。胎土の色調は暗黄褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・砂粒・小石を含む。内外面ヘラ磨き調整が施される。20Mからの出土である。

107は頸部から肩部にかけての破片である。屈曲部には断面三角形の凸帯文がまわる。外面は赤彩が施される。胎土の色調は暗黄褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。内面は頸部がへら磨き調整、肩部はへらナデ、外面はハケ目調整後へら磨き調整が施される。外面16Mからの出土である。

108は頸部から肩部にかけての小破片である。屈曲部には斜方向の刻みをもつ凸帯文がまわる。内外面は赤彩が施される。胎土の色調は暗黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。内外面は横方向のへら磨き調整が施される。88Hからの出土である。

109は頸部から肩部にかけての小破片である。上下2段のLR縄文の間には「S」字状結節文が施文される。さらに直径3mmの円形浮文が縄文上に1個付されている。内面は赤彩が施される。胎土の色調は暗黄褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。内面はへら磨き調整か。90Hからの出土である。

110は頸部から肩部にかけての小破片である。文様は下端に2条の「S」字結節文をもつRL縄文が施文されるが、結節文はへら磨き調整により部分的に消去されている。内面及び外面無文部は赤彩が施される。胎土の色調は暗黄褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。内面はへら磨き調整、外面は無文部はハケ目調整後へら磨き調整が施される。

111は胴部破片である。外面は赤彩が施される。胎土の色調は暗黄褐色を基調とし、胎土には黄褐色粒子をやや多く含む。内面はハケ目調整、外面はハケ目調整後粗いへら磨き調整が施される。20Mからの出土である。

112は胴部下半から底部にかけての破片である。底部には木葉痕が残る。外面は赤彩が施される。胎土の色調は暗黄褐色を基調とし、胎土には黄褐色粒子を多く含む。内面はハケ目調整、外面はハケ目調整後粗いへら磨き調整が施される。20Mからの出土である。

壘形土器 (113～118)

113は口縁部小破片である。口唇部外面には刻み目が付される。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子を多く含む。内外面は横ナデが施されるが、内面にはハケ目痕が残る。20Mからの出土である。

114は口縁部から胴部上半にかけての破片である。「く」の字状口縁で、口唇部には刻みがない。色調は黒褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。内外面はハケ目調整が施されるが、口縁部外面にはその後横ナデが施される。20Mからの出土である。

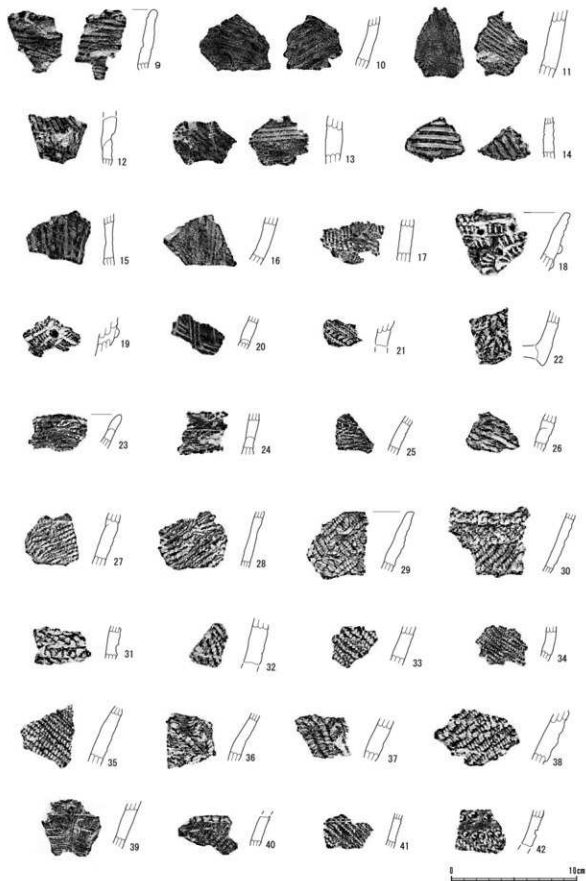
115～117は胴部破片である。115は色調が黒褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・砂粒を僅かに含む。内面はへらナデ、外面はハケ目調整が施される。116は色調が内面は暗黄褐色、外面は黒褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子を多く含む。内面はハケナデ、外面はハケ目調整が施される。117は色調が暗黄褐色を呈し、胎土には砂粒・小石を含む。内外面はハケ目調整が施される。いずれも20Mからの出土である。

118は胴部下半から脚台部にかけての小破片である。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には白色砂粒を含む。内面はへらナデ、外面はハケ目調整が施される。遺構外からの出土である。

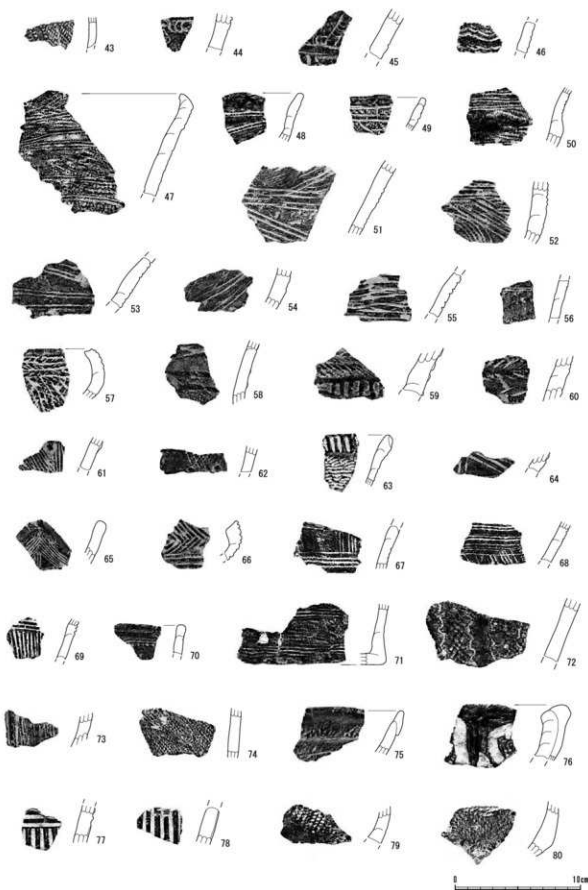
(4) 古墳時代後期の土器 (第37図119～121)

119は須恵器平瓶と思われる。現器高3.8cm。口縁部と天井部との境には沈線が2本まわる。天井部内面には粘土円盤による閉塞痕が観察される。色調は灰白色を呈し、胎土には黒色粒子・白色砂粒を僅かに含む程度で精練されている。

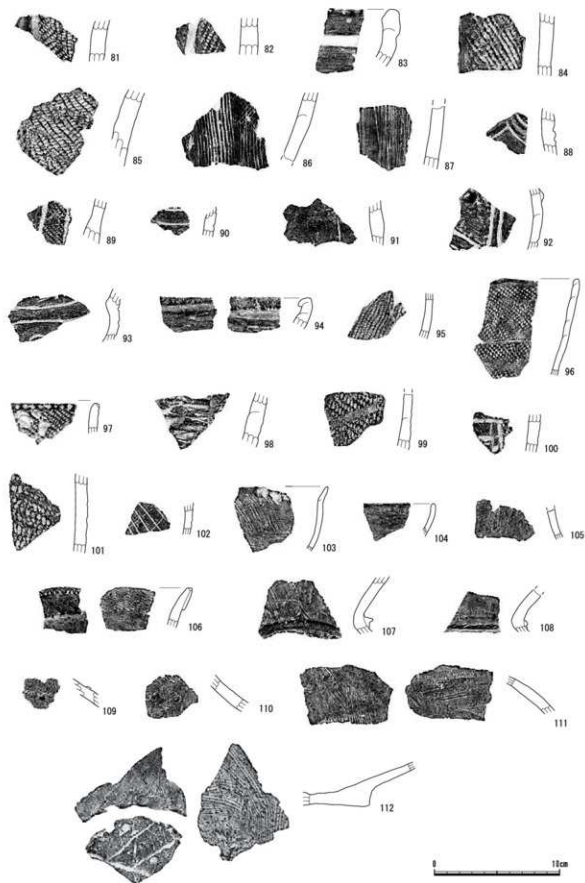
120は須恵器樽形壺の胴部破片であろう。当初は壘形土器の底部下半～底部破片と思っていたが、胴



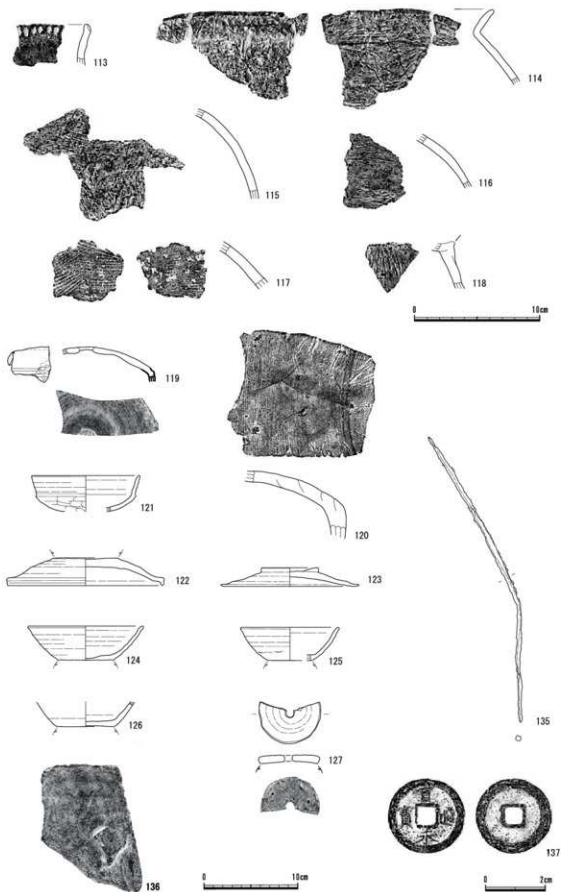
第34図 遺構外出土遺物1 (1/3)



第35図 遺構外出土遺物2 (1/3)



第36図 遺構外出土遺物 3 (1/3)



第37図 遺構外出土遺物4 (1/3・1/4・4/5)

棟号番号	部位	文様・特徴など	色調		時期・型式	胎土混入物					出土位置	備考	
			外面	内面		石	角	礫	砂	他			
第34図9	口縁	口唇部に小突起と刻み/貝殻条痕文	明褐	明褐	条痕文系				○	織	88H		
第34図10	胴	貝殻条痕文	褐	暗灰	条痕文系					織	19M	織物は少量	
第34図11	胴	貝殻条痕文系	褐	暗灰	条痕文系			○		織	16M		
第34図12	胴	貝殻条痕文	明褐	明灰褐	条痕文系				○	織	19M	織物は少量	
第34図13	胴	貝殻条痕文	赤褐	赤褐	条痕文系			○		織	遺構外	織物は少量	
第34図14	胴	貝殻条痕文	暗灰褐	褐	条痕文系				○	織	88H	織物は少量	
第34図15	胴	貝殻条痕文	明褐	灰褐	条痕文系		○		○	織	遺構外	赤褐色粒子を含む/織物は少量	
第34図16	胴	貝殻条痕文	黒褐	黒褐	条痕文系	○	○	○	○	織	21M	織物は少量	
第34図17	胴	貝殻背庄痕文	明赤褐	褐	花櫃下瓣				○	織	30M	白色粒子を含む	
第34図18	口縁	口唇部に小突起/刻みをもつ籤手状文/輪状貼付文	明褐	明褐	関山					織	16M	織物は少量	
第34図19	胴	刻みをもつ山形文/輪状貼付文	明褐	明褐	関山					織	18M		
第34図20	胴	半載竹管による柵子状の沈線文	褐	明褐	関山				○	織	88H	織物は少量	
第34図21	胴	4条の付加条	灰褐	灰褐	関山					織	91H	白色粒子を含む	
第34図22	底	上げ底/縄文LR/ループ文	明褐	明褐	関山					織	90H		
第34図23	口縁	粗い押引文	明褐	明褐	黒浜				○	織	17M		
第34図24	胴	沈線	褐	灰褐	黒浜			○	○	織	3Y		
第34図25	胴	無節羽状縄文?/半載竹管による平行沈線文上に爪形文	明褐	黒	黒浜				○	織	88H		
第34図26	胴	縄文R	褐	黒褐	羽状縄文系				○	織	3Y		
第34図27	胴	縄文L	褐	赤褐	羽状縄文系	○	○	○	○	織	21M	織物は少量	
第34図28	胴	縄文L	褐	明褐	羽状縄文系				○	織	88H		
第34図29	口縁	口唇部上面を面取取り、平滑に調整/ループ文	褐	明褐	羽状縄文系					織	16M		
第34図30	胴	羽状縄文/ループ文	明褐	灰褐	羽状縄文系				○	織	3Y		
第34図31	胴	縄文RL/ループ文	灰褐	明褐	羽状縄文系					織	3Y		
第34図32	胴	縄文RL	明褐	明褐	羽状縄文系				○	織	95H		
第34図33	胴	縄文RL	褐	黒褐	羽状縄文系	○			○	織	遺構外	白色粒子を含む	
第34図34	胴	縄文RL	褐	黒褐	羽状縄文系	○			○	織	91H	白色粒子を含む	
第34図35	胴	縄文RL	褐	黒褐	羽状縄文系	○			○	織	88H		
第34図36	胴	縄文LR	褐	灰褐	羽状縄文系				○	織	3Y		
第34図37	胴	縄文LR	褐	褐	羽状縄文系				○	織	88H		
第34図38	胴	縄文LR	灰褐	明灰褐	羽状縄文系				○	織	88H	白色粒子を含む	
第34図39	胴	半載竹管による筋骨文	褐	褐	諸磯a				○	○	88H		
第34図40	胴	縄文LR/半載竹管による押引文	褐	褐	諸磯a					○	88H		
第34図41	胴	縄文RL/細い平行沈線上に連続した爪形文	暗赤褐	赤褐	諸磯a					○	17M	片岩	
第34図42	胴	縄文RL/半載竹管による刺突文	暗褐	褐	諸磯a				○	○	3Y		
第35図43	胴	縄文RL/爪形文を伴う2本の平行沈線の間を磨消し	褐	褐	諸磯a					○	16M		
第35図44	胴	幅広い爪形文/平行沈線文	褐	灰褐	諸磯b				○	○	88H		
第35図45	胴	幅広い爪形文/平行沈線文	明褐	灰褐	諸磯b				○	○	88H		
第35図46	胴	半載竹管による波状文	暗灰褐	暗灰褐	諸磯a					○	88H		
第35図47	口縁	波状口縁部(?)を内側に屈曲/縄文RL/半載竹管による平行沈線文	暗褐	褐	諸磯b					○	3Y		
第35図48	口縁	波状口縁/半載竹管による平行沈線文	明褐	明褐	諸磯b				○	○	3Y		
第35図49	口縁	縄文RL/半載竹管による平行沈線文	赤褐	赤褐	諸磯b					○	16M	白色粒子を含む	
第35図50	胴	縄文RL/半載竹管による平行沈線文	明褐	灰褐	諸磯b				○	○	88H		
第35図51	胴	半載竹管による平行沈線文・刺突文	暗褐	暗褐	諸磯b	○	○		○	○	89H		
第35図52	胴	半載竹管による平行沈線文	明褐	褐	諸磯b				○	○	雲	21M	
第35図53	胴	半載竹管による平行沈線文	明褐	褐	諸磯b	○	○		○	○	遺構外	装飾	
第35図54	胴	半載竹管による平行沈線文	暗灰褐	褐	諸磯b				○	○	褐	17M	
第35図55	胴	半載竹管による平行沈線文	灰褐	赤褐	諸磯a				○	○	褐	17M	

石：石英 角：角閃石・輝石 礫：細礫 砂：砂粒 織：織物 雲：雲母 褐：褐色粒子

第18表 遺構外出土の縄文土器一覧(1)

第2章 城山遺跡第18地点の調査

棟号番号	部位	文様・特徴など	色調		時期・型式	胎土混入物				出土位置	備考
			外面	内面		石	角	礫	砂		
第35856	胴	半截竹管による平行沈線文	明灰褐	褐	諸磯?			○		遺構外	
第35858	胴	縄文R.L./浮線文	明褐	明褐	諸磯b			○		95H	器面に僅かなターナ状の付着物が見られる
第35859	胴	縄文R.L./斜めをもつ浮線文/浮線文	明褐	明褐	諸磯b			○		18M	
第35860	胴	斜めをもつ浮線文	明褐	灰褐	諸磯b	○		○	○	遺構外	
第35861	胴	縦位羽状の集合沈線/小突起状の貼付文	暗赤褐	暗赤褐	諸磯c			○	○	88H	
第35862	胴	半截竹管による平行沈線文を交差して施す/小突起状の貼付文	褐	暗赤褐	諸磯c			○	○	16M	
第35863	口縁	口唇部肥厚/口唇部外面に斜め/波状貝殻文?	褐	褐	浮島		○	○		90H	
第35864	胴	半截竹管による沈線文	赤褐	明褐	前期末?			○	○	16M	
第35865	口縁	波状口縁/縄文L/口縁部に沿った、半截竹管による平行沈線文	暗赤褐	暗赤褐	五箇ヶ台			○	○	88H	
第35866	口縁	半截竹管による平行沈線文・杉文	暗褐	褐	五箇ヶ台		○		○	88H	
第35867	胴	半截竹管による平行沈線文	褐	褐	五箇ヶ台	○	○		○	16M	68と同一個体
第35868	胴	半截竹管による平行沈線文	明褐	褐	五箇ヶ台	○	○		○	3Y	67と同一個体
第35869	胴	半截竹管による平行沈線文	明褐	灰褐	五箇ヶ台	○	○		○	88H	
第35870	口縁	平行沈線/爪形文	暗赤褐	赤褐	五箇ヶ台			○		17M	
第35871	底	縄文R.L./半截竹管による平行沈線文	褐	黒褐	五箇ヶ台	○	○		○	16M	
第35872	胴	縄文R.L./縦位結節文	褐	褐	五箇ヶ台	○	○	○		3Y	
第35873	胴	条線文/2本の沈線によって作られた細い隆起状の壺垂文	褐	黒	中期初頭?			○		95H	壺垂文に似る?
第35874	胴	縄文R.L.	明褐	灰褐	中期初頭?		○		○	16M	
第35875	口縁	複合口縁/器余文R	灰褐	明褐	中期初頭?	○	○		○	92H	
第35876	口縁	縄文R.L./隆帯/太沈線	褐	褐	静飯			○		遺構外	
第35877	胴	沈線	暗赤褐	暗褐	静飯				○	88H	
第35878	胴	沈線	暗赤褐	褐	静飯				○	88H	
第35879	胴	縄文R.L.	褐	暗褐	静飯				○	90H	白色粒子を含む
第35880	胴	縄文R.L.	赤褐	黒褐	静飯			○		遺構外	遺構外
第35881	胴	縄文R.L./隆帯による壺垂文	褐	暗赤褐	加曾利EⅡ			○	○	3Y	
第35882	胴	縄文R.L./磨消壺垂文	褐	暗赤褐	加曾利EⅢ	○			○	3Y	
第35883	口縁	口縁部直下に太沈線	赤褐	赤褐	加曾利EⅣ				○	90H	
第35884	胴	縄文L	明褐	明褐	加曾利E					16M	
第35885	胴	縄文L R	褐	赤褐	加曾利E				○	16M	
第35886	胴	条線文	暗褐	黒褐	加曾利E			○		90H	
第35887	胴	条線文	黒	暗褐	加曾利E				○	90H	
第35888	胴	沈線による連弧文	明褐	褐	連弧文系				○	88H	
第35889	胴	2本の沈線間に縄文L Rを充填	明褐	褐	称名寺I				○	19M	
第35890	胴	縄文L R/2本の沈線文の間を磨消した曲線文	褐	明褐	称名寺I			○	○	19M	
第35891	胴	沈線文	暗褐	明褐	堀之内		○	○		21M	
第35892	胴	沈線文/小貼付の上に刺突文	暗赤褐	黒褐	堀之内I				○	93H	
第35893	胴	沈線文	黒褐	褐	堀之内I		○		○	88H	
第35894	口縁	無文/口唇部内面に折り返し	黒褐	褐	後期					88H	
第35895	胴	縄文R.L.	暗褐	黒褐	後期			○	○	89H	
第35896	口縁	縄文R.L.	黒褐	暗赤褐	後期			○	○	19M/90H	片岩を含む
第35897	口縁	縄文R.L./口唇部に斜め	褐	暗褐	後期	○	○		○	88H	片岩を含む
第35898	胴	磨痕状の沈線(竹管?)	褐	暗褐	後期粗製					17M	
第35899	胴	縄文R.L./太く浅い沈線	褐	暗灰褐	後期粗製	○		○		88H	
第35900	胴	太く浅い沈線	灰褐	明灰褐	後期粗製	○	○		○	16M	白色粒子を含む
第35901	胴	縄文R.L.	暗褐	褐	後期粗製	○	○		○	17M	
第35902	胴	沈線による格子目状文	褐	褐	後期粗製	○			○	90H	

石：石灰 角：角閃石・輝石 礫：細礫 砂：砂粒 織：織物 雲：雲母 紺：紺色粘土

第18表 遺構外出土の縄文土器一覽(2)

部側面と思われる部分に自然釉が付着する点や全体にカキ目調整が施されている点から、ここでは器種を大型樽形甕として扱うことにした。色調は暗灰色を呈し、胎土には白色砂粒・白色小石を多く含む。

121は土師器環形土器である。現器高3.8cm・推定口径11.4cm。口縁部は外傾し、途中に稜がまわる。色調は淡橙色を呈し、胎土には砂粒を含む。内面及び外面口縁部は横ナデ、外面底部はへら削りが施される。時期は6世紀前葉～中葉に比定できる。

(5) 平安時代の遺物 (第37図122～127)

須恵器蓋形土器2点と須恵器環形土器3点、土製品(転用紡錘車)1点が出土した。122～127はすべて東金子窯跡群の製品で、時期は9世紀後半に比定できる。

須恵器蓋形土器 (122・123)

122は器高3.0cm・推定口径16.6cm・天井部径7.0cm。無紐化した蓋で、口縁部は直角に屈曲する面取りが施される。色調は淡黄褐色を呈し、胎土には白色砂粒を含む。ロクロ成形で回転は右回転である。20Mからの出土で、遺存状態は40%程である。

123は器高2.0cm・推定口径14.6cm・紐径6.0cm。非口縁化した蓋で、口縁部は丸く、口縁部は短く外反する。色調は青灰色を呈し、胎土には白色砂粒・小石を多く含む。ロクロ成形で回転は右回転である。16Mからの出土で、遺存状態は60%程である。

須恵器環形土器 (124～126)

124は器高3.6cm・推定口径12.2cm・底径5.8cm。色調は暗灰褐色し、胎土には白色砂粒をやや多く含む。ロクロ成形で回転は右回転である。底部に回転糸切り痕が残る。20Mからの出土で、遺存状態は70%程である。

125は器高3.5cm・推定口径10.4cm・推定底径5.0cm。色調は暗灰褐色を呈し、胎土には白色砂粒・小石

() は現存数

図版番号	種別	器種	法 量			製作の特徴等	推定産地	出土位置	時 期
			器高	口径	底径				
図版15-128	陶器	小皿	(1.8)	-	-	口縁部小破片/志野釉/胎土の色調は黄白色	瀬戸	93H	17c前半
図版15-129	陶器	小皿	(1.5)	-	-	口縁部小破片/内外面に鉄釉	瀬戸	91H	18c後半
図版15-130	陶器	皿	(1.6)	-	-	体部下半～底部破片/黄瀬戸/見込みに印刷 花文あり/胎土の色調は黄白色	瀬戸	88H	15c
図版15-131	陶器	鉢	-	-	-	口縁部小破片/三島手	唐津	遺構外	17c
図版15-132	陶器	甕	-	-	-	胴部破片/外面鉄釉/外面にヘラナデ	常滑	93H	不明

(単位: cm)

第19表 遺構外出土の陶器一覧

() は現存数

碑図番号	遺構名	長さ	幅	厚さ	重さ	特 徴	備 考
第8図	17M	(41.6)	(24.3)	2.4	4,000	菊は「光明遍照十方世界念仏衆生摂取不捨」/紀年は「元戸二年三月廿日」/元 応二年は1320年	1区出土
第37図136	遺構外	(13.9)	(12.0)	1.8	618	刻識により文字は解説不明	遺構外

(単位: cm・g)

第20表 出土板碑一覧

を含む。ロクロ成形で回転は右回転である。底部に回転糸切り痕が残る。19Mからの出土で、遺存度は15%程である。

126は現器高2.6cm・推定底径6.0cm。色調は淡黄褐色を呈し、胎土には白色砂粒・小石を含む。ロクロ成形で回転は右回転。底部に回転糸切り痕が残る。19Mからの出土で、体部下半～底部にかけて40%程遺存する。

土製品 (127)

須恵器坏形土器の底部を用いた転用紡錘車である。直径6.5cm・厚さ0.8cm・重さ28.4cm。色調は青灰色を呈し、胎土には白色砂粒を含む。側面はていねいに成形されている。遺存度は60%程である。回転糸切り痕あり。

(6) 中世以降の遺物 (第37図135～137、図版15-128～137、第19・20表)

128～132は陶器である。

133・134は土製品で、小型鋳型である。

133は長さ3.9cm・幅2.0cm・高さ0.8cm・重さ5.0g。色調は明橙色を呈し、胎土には砂粒を含む。表面には径0.7cm・高さ0.3cmの小突起が付されている。134は長さ3.4cm・幅1.3cm・高さ1.2cm・5.2g。色調は淡橙色を呈し、胎土には砂粒をやや多く含む。部分的に還元部分があり、灰色を呈する。これらの鋳型は、城山遺跡第35地点の鋳造関連の遺構でも同類のものが出土している(尾形・深井 1999)。最近では、東京都国立市閩鋳物跡遺跡(和田・馬橋・佐々木 2000)から検出例があり、鍋の耳鋳型として報告されている。

135は鉄製品で、不明品である。長さ31.7cm・幅0.5cm・重さ12.6g。断面は方形を基本とし、両先端が細くなっている。形状としては紡錘車であるかもしれない。2区の3Yからの出土である。

136は板碑である。石質は緑色片岩。

137は銅銭で、寛永通宝である。外径2.6cm・厚さ0.1cm・重さ3.0gである。完形品。

[参考文献]

- 尾形明敏・深井恵子 1999『志木市遺跡群9』志木市の文化財第27集 埼玉県志木市教育委員会
和田 哲・馬橋利行・佐々木克典 2000『閩鋳物跡遺跡』国立市文化財調査報告 第43集 国立市教育委員会 国立市遺跡調査会

第3章 城山遺跡第19地点の調査

第1節 調査の経過

(1) 調査に至る経過

平成5年9月、開発主体者から志木市教育委員会（以下、教育委員会）へ開発計画地内における埋蔵文化財の有無及び取り扱いについての照会があった。計画は志木市柏町3丁目2642、2630-4他（面積361.93㎡）内に共同住宅建設を実施するというものである。

これに対し、教育委員会は当該開発予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である城山遺跡（コード11228-003）に該当するため、大旨下記のとおり回答した。

1. 本地点は埋蔵文化財包蔵地に該当し、さらに遺構が密集して分布することが予想される。
2. 埋蔵文化財確認調査を実施して、その結果に基づき、当該開発予定地の埋蔵文化財の有無及び取り扱いについて回答する。
3. 上記2の調査の結果、埋蔵文化財が確認された場合、埋蔵文化財の保存措置を講ずること。また、やむを得ず土地の現状を変更する場合は、記録保存のための発掘調査を実施する必要があること。

平成5年9月21日、教育委員会は、開発者及び土地所有者である（個人）より埋蔵文化財確認調査依頼書・埋蔵文化財発掘届を受理し、10月28日、午前9時30分から確認調査を実施した。

確認調査は、調査区長軸のほぼ南北方向に合わせ、3本のトレンチを設定し、バックホーで表上を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った。その結果、調査区内には古墳時代後期の住居跡を中心に遺構が分布していることが判明した。

教育委員会は、この結果をただちに開発主体者に報告し、埋蔵文化財の保存措置について協議を行った。その結果、記録保存のための発掘調査を実施することに決定した。

その後、教育委員会では、発掘調査にあたる組織として、志木市遺跡調査会（以下、遺跡調査会）を幹旋した。遺跡調査会ではこれを受け、開発主体者と委託契約を締結し、埋蔵文化財発掘調査届を提出する。教育委員会は、届出書をすみやかに埼玉県教育委員会経由で文化庁長官に提出した。

これにより、11月1日から遺跡調査会を主体として発掘調査を実施した。なお、発掘調査通知書番号は教文第5-157号（平成5年12月20日付）である。

(2) 発掘調査の経過

- 11月1日 重機による表土剥ぎ及び遺構確認作業を開始する。
- 2日 重機による表土剥ぎ及び遺構確認作業を終了する。
- 4日 人員導入による発掘調査を開始する。まず調査区の整備と細部の遺構確認作業を行う。その結果、調査区内には、古墳時代後期の住居跡4軒が分布していることが判明した。その後、96・100号住居跡（96・100H）の精査を開始する。
- 5日 97・98号住居跡（97・98H）の精査を開始し、96・100Hの遺物出土状態の写真撮影・平板測量を終了する。

- 8日 97・98Hの精査を行う。96・100Hの遺構写真撮影を行う。
- 9日 97・98Hの精査を行う。96・100Hの全測図を実測する。
- 10日 98Hの精査に併行し、99号住居跡(99H)の精査を開始する。100Hの実測(セクション図)を完了する。
- 11日 97～99Hの写真撮影を行う。
- 12日 97～99Hの実測(エレベーション図)を行う。
- 15日 97～99Hの平板測量を行い、すべての精査を完了する。
- 24日 重機による埋戻し作業を完了する。

第2節 検出された遺構・遺物

(1) 概要

古墳時代後期の住居跡5軒(96～100H)と中世以降の土坑1基(852D)が検出された。

古墳時代後期の96・97Hについては、調査時には別遺構と考えられていたが、1軒の住居跡である可能性がある。また、99Hは住居跡の掘り込みが確認できなかったが、貯蔵穴と柱穴1本がその住居跡に伴うものと考えられる。

(2) 住居跡

96・97号住居跡

遺構 (第39図)

〔住居構造〕82Dに切られ、98Hを切る。南側は調査区域外である。2軒として取り扱ったが、北壁の位置が同じで、主柱穴も配置よく並んでいることから、間仕切り溝あるいは建替えが行われた1軒の住居である可能性がある。(平面形)方形。(規模)不明×7.56m。(壁高)18～24cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝)確認できた範囲では巡らされている。96Hが上幅10～14cm・下幅4～6cm・深さ3～17cm、97Hが上幅18～26cm・下幅6～13cm・深さ7～15cmを測る。(床面)比較的軟弱であったが、貯蔵穴の南側には硬化した面が確認できた。(柱穴)3本検出され、深さは49・70・77cmを測る。主柱穴は6本の可能性がある。(貯蔵穴)西壁の北西コーナー寄りに位置し、平面形は長方形で62×115cm・深さ64cmを測る。東側に高さ2cmの凸堤が確認できた。北壁の貯蔵穴寄りの所から粘土が検出された。(覆土)97H・上層がローム粒子・を僅かに含む黒褐色土、下層がローム粒子を多く含む暗黄褐色土を基調とする。

〔遺物〕土師器杯・高坏・壺・甕・甔形土器、須恵器甕が出土した。

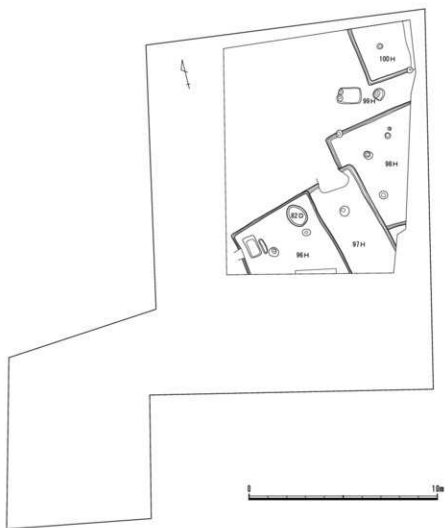
〔時期〕古墳時代後期(6世紀中葉)。

〔所見〕本遺構は、調査の際には2軒の住居跡として扱われたが、主軸方向や主柱穴の配列を見ると、別遺構として考えるには方向性が一致しすぎる。そのため、2軒の住居を区分するかと思われた壁溝は、住居空間を2分するために設けられた間仕切り溝と考えると、同時期1軒の住居である可能性もある。また、建替えによる増築が行われた可能性もあるが、96Hと97H出土の土器を明確に分けることもでき

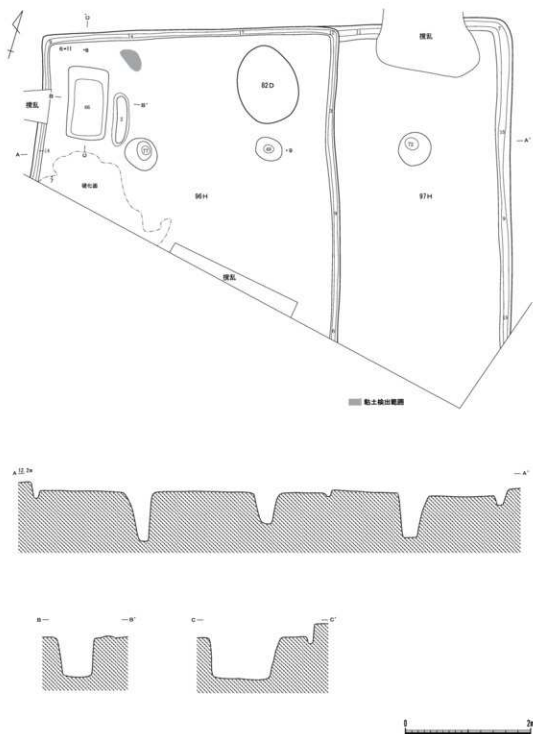
なかった。出土土器の時代観には、おおよそ5世紀後葉・6世紀中葉・7世紀中葉と3時期ほどのばつきが指摘できる。ここでの本住居跡の時期は、2・4・7～12の土器を基本に安定した時期の遺物として捉え、6世紀中葉に比定したが、この時間差については、今後の課題としたい。

遺物 (第40図、第21表)

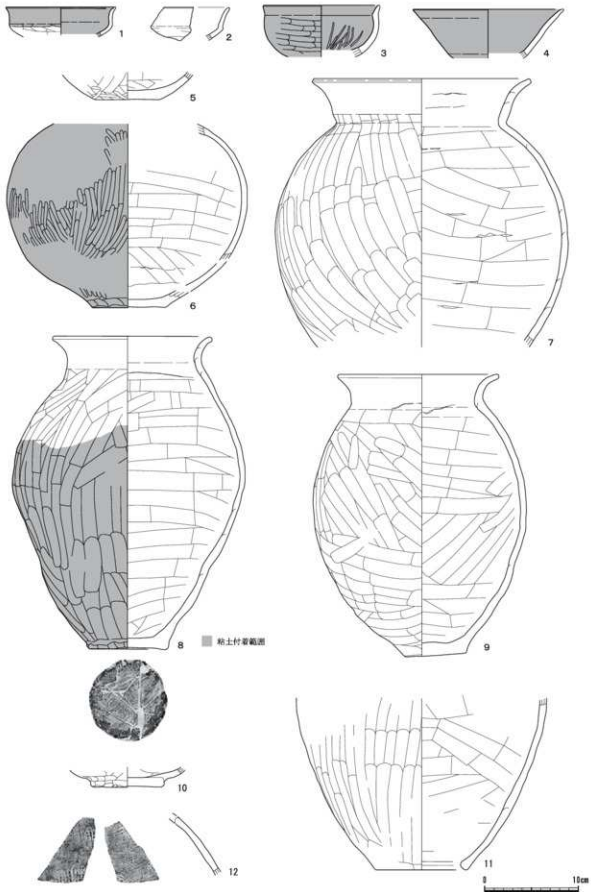
1～11は土師器で、1～3は環形土器、4は高環形土器、5・6は壺形土器、7～10は甕形土器、11は甌形土器である。



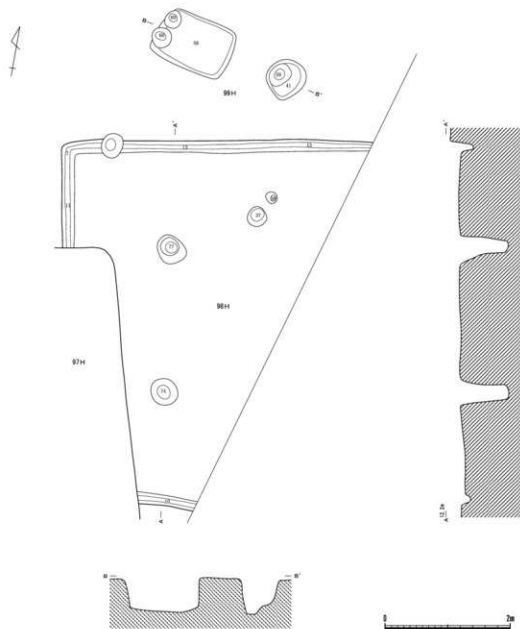
第38図 遺構分布図 (1/200)



第39図 96・97号住居跡 (1/60)



第40図 96・97号住居跡出土遺物 (1/4)



第41図 98・99号住居跡 (1/60)



第42図 98号住居跡出土遺物 (1/4)

12は須恵器で、甕形土器である。

98号住居跡

遺構 (第41図)

[住居構造] 97Hに切れ、99Hを切る。東側は調査区域外である。(平面形) 方形。(規模) 不明×5.86m。(壁高) 残りの良い所で20cm前後を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝) 確認できた範囲では巡らされていた。上幅15～20cm・下幅4～7cm・深さ7～13cmを測る。(床面) 全体的によく硬化していた。(柱穴) 北西・南西コーナーの2本が支柱穴であろう。深さ74cm・77cm。(覆土) ローム粒子を僅かに含む黒褐色土を基調とする。

[遺物] 土師器甕形土器、須恵器甕形土器が出土した。

[時期] 古墳時代後期(6世紀か)。

遺物 (第42図、第22表)

1は土師器甕形土器、2は須恵器甕形土器である。

99号住居跡

遺構 (第41図)

[住居構造] 貯蔵穴と柱穴1本のみを検出のため詳細は不明である。(平面形) 不明。(規模) 不明。(柱穴) 西側が1段下がって58cmと深く、東側は40cmを測る。(貯蔵穴) 平面形は長方形を呈する。規模は86×122cm、深さ54cmを測る。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 古墳時代後期か。

100号住居跡

遺構 (第43図)

[住居構造] 南西コーナー付近以外は調査区域外である。(平面形) 方形。(規模) 不明。(壁高) 30～41cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝) 確認できた範囲では巡らされていた。上幅16～20cm・下幅6～10cm・深さ6～16cmを測る。(床面) 全体的に硬化していた。床面の一部が焼けて赤化していた。貼床が10cm前後の厚さで施されていた。(柱穴) 本住居に伴うものは検出されなかった。(覆土) 5層に分層された。

[遺物] 土師器杯・埴・甕・甕形土器、石製品(砥石)が出土した。

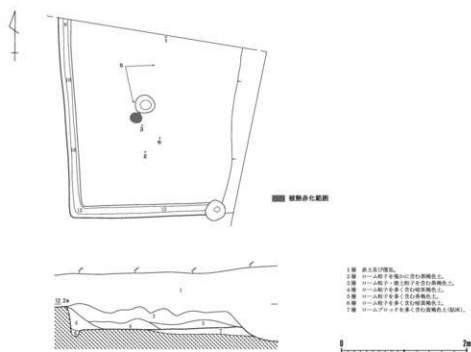
[時期] 古墳時代後期(6世紀中葉)。

[所見] 本住居跡の時期は、2～5の土器を基本に5世紀末葉に比定した。1の土器(7世紀中葉)は混入品の可能性がある。

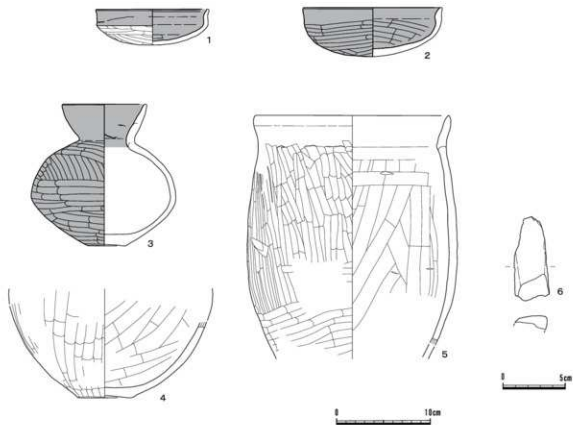
遺物 (第44図、第23表)

1・2は土師器杯形土器、3は土師器埴形土器、4は土師器甕形土器、5は土師器甕形土器である。

6は石製品で砥石である。長さ6.7cm・幅2.7cm・厚さ1.0cm・重さ18.6cm。使用面は上面と側面のみ確認できる。下面は欠損。石質は砂岩である。



第43図 100号住居跡 (1/60)



第44図 100号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)

()は測定値及び測定誤

押出番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第40図1	土師器 環	(3.0)	(11.6)	—	いわゆる比企型環/口径部と底部との境に稜を有する/口径部内面に丸隅がまわる/底部外面をのぞき赤彩	胎土は暗褐色を基調	砂粒・小石を多く含む	内面:横ナデ/外面:底部はへう削り	96H覆土中	10%
第40図2	土師器 環	(3.5)	—	—	いわゆる小針型環と思われる/口径部は外傾する/口径部は沈楕状の底部がまわる/口径部と底部の境に段を有する	淡褐色を基調	砂粒を僅かに含む	内面:横ナデ/外面:口径部は横ナデ、底部は粗いへう削り	96H覆土中	口径部破片
第40図3	土師器 環	(5.5)	(12.4)	—	いわゆる内斜口径環/内外面は赤彩/内面には輪1mmの細い暗文が放射状に施される	胎土は暗赤褐色を基調とするが断面は灰色	砂粒を僅かに含む	内面:ナデ後暗文が施される/外面:粗い磨き調整	97H覆土中	口径部~林部下半20%
第40図4	土師器 高環	(5.2)	(16.0)	—	環部下半にやや稜を有する/環部の器形は全体的に外傾するが、口径部はやや外反する/全面赤彩/入間系土師器	暗赤褐色を基調	砂粒を含む	内外面:仕上げは回転ナデ	97H床直	環部の口径部~底部20%
第40図5	土師器 壺	(3.0)	—	6.8	平底	暗褐色	砂粒・小石を含む	内面:へうナデ/外面:へう削り後粗いへう磨き調整	97H覆土中	胴部下半~底部60%
第40図6	土師器 壺	(19.5)	—	7.8	最大径は胴部中位/平底/外面は赤彩/器面は全体的に磨耗している	胎土は淡黄褐色	砂粒を多く、白色粒子・小石を僅かに含む	内面:へうナデ/外面:へう削り後粗いへう磨き調整	96Hの北西コーナー	胴部上半~底部60%
第40図7	土師器 甕	(28.4)	23.0	—	「く」の字口径/最大径は胴部中位	淡茶褐色を基調	砂粒を多く、茶褐色粒子を僅かに含む	内面:口径部横ナデ、以下へうナデ/外面:口径部横ナデ、胴部上半はへうナデ、胴部中位以下はへう削り	96Hの貯蔵穴南西の西壁近く	口径部~胴部下半50%
第40図8	土師器 甕	33.1	16.8	8.4	口径部は外反する/最大径は胴部中位/胴部中位以下には輪積の痕が顕著に残る/外面には粘土の付着が見られる/平底/底部に木葉痕あり	淡茶褐色	白色粒子・黄褐色粒子・砂粒を多く含む	内面:口径部横ナデ、以下へうナデ/外面:口径部横ナデ、以下へう削り後へうナデ(スリップか?)	96Hの北西コーナー	ほぼ完形品
第40図9	土師器 甕	29.9	17.0	6.5	口径部は外反する/頸部から胴部にかけては屈曲する/最大径は胴部中位/平底	暗黄褐色	砂粒・小石を多く含む	内面:口径部横ナデ、以下へう削り、角閃石を僅かに含む	96Hの東柱穴の東側	ほぼ完形品
第40図10	土師器 甕	(2.2)	—	(7.6)	平底/壺形土器の可能性もあり	暗黄褐色	砂粒をやや多く含む	内外面:へうナデ	96H覆土中	胴部下半~底部50%
第40図11	土師器 甕	(18.2)	—	9.6	大型甕/底部は筒抜け式	淡黄褐色を基調	砂粒を多く、黄褐色粒子・金象母を僅かに含む	内面:へうナデ/外面:へう削り後粗いへうナデ	96Hの北西コーナー	胴部中位~底部40%
第40図12	須恵器 甕	—	—	—	小破片/外面に自然釉	青灰色	白色砂粒・白色小石を含む	内面:当て道具痕(青海波)/外面:平行印き	96H覆土中	胴部小破片

第21表 96・97号住居跡出土遺物一覧

押出番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第42図1	土師器 甕	(2.7)	—	(9.4)	平底/底部に木葉痕あり	暗黄褐色	砂粒をやや多く含む	内面:へうナデ/外面:へう削り	覆土中	胴部下半~底部50%
第42図2	須恵器 甕	—	—	—	破片/外面に自然釉	暗灰色	白色砂粒を含む	内面:当て道具痕(無文)/外面:平行印き	覆土中	胴部破片

第22表 98号住居跡出土遺物一覧

(単位:cm)

押図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第44図1	土師器 環	3.8	(11.8)	—	いわゆる比企型環/口縁部と底部との境は段を有する/底部外面に輪積み痕あり/人間系土師器	胎土は暗赤褐色	茶褐色粒子・砂粒を含む	内面:口縁部横ナデ、以下ヘラナデ/外面:ヘラ削り	住居北端	80%
第44図2	土師器 環	5.3	14.7	—	いわゆる比企型環/口縁部は短く外反する/全面赤彩	胎土は暗褐色を基調	黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を多く含む	内面:口縁部横ナデ、以下ヘラナデ/外面:口縁部横ナデ、以下ヘラ削り後粗いヘラ磨き調整	南西コーナー 柱穴の南側	口縁部を僅かに欠損/90%
第44図3	土師器 甕	15.0	9.0	4.0	口縁部はやや内湾気味に外傾する/最大径は体部中位/体部は算盤玉状を呈する/底部は基筒底状/口縁部内面及び外面は赤彩/人間系土師器	胎土は暗赤褐色	砂粒をやや多く、赤褐色粒子・石英を僅かに含む	内面:口縁部横ナデ、以下不明/外面:口縁部横ナデ、以下ヘラ削り後粗いヘラ磨き調整	南西コーナー 柱穴の南側	口縁部を僅かに欠損/90%
第44図4	土師器 甕	(11.7)	—	6.0	逆の可能性もある/底部はやや基筒底状を呈する/外面は赤彩の可能性あり	暗褐色を基調	砂粒を多く、黄褐色粒子を含む	内面:ヘラナデ/外面:ヘラ削り後ヘラナデ	覆土中	胴部中位～底部60%
第44図5	土師器 甕	(25.8)	25.0	—	大型甕/口縁部は外傾する/最大径は口縁部と胴部中位のほぼ同位置	暗褐色を基調	砂粒・小石を多く含む	内面:口縁部横ナデ、以下ヘラナデ/外面:口縁部横ナデ、以下ヘラ削り後ヘラナデ	南西コーナー 柱穴周辺	口縁部～胴部下半60%

(単位: cm)

第23表 100号住居跡出土遺物一覧

(3) 土坑

82号土坑

遺構 (第45図)

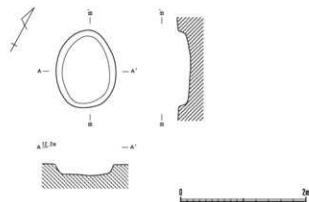
[構造] 96Hを切る。(平面形) 楕円形。(規模)

0.93×1.20m。(深さ) 20cm前後を測る。(長軸

方位) N-28°-W。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 中世以降。

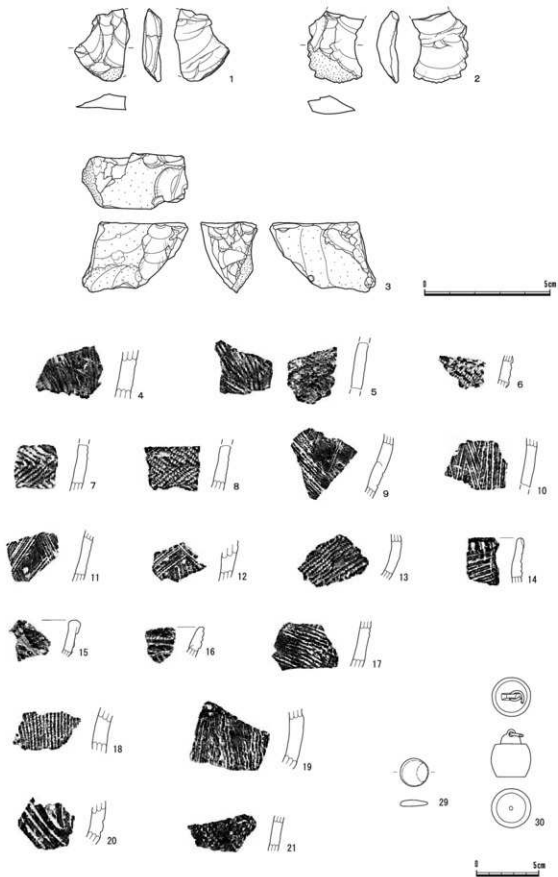


第45図 82号土坑 (1/60)

押図番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	遺存状態	出土位置
第46図1	割片	チャート	28.46	22.05	7.19	3.90	右側縁欠	97H
第46図2	割片	チャート	27.27	24.97	9.10	4.50	上縁欠	96H
第46図3	石核	黒曜石	28.62	39.95	21.96	24.30	—	100H

(単位: mm・g)

第24表 遺構外出土の石器一覧



第46図 遺構外出土遺物 (2/3・1/3)

棟号番号	部位	文様・特徴など	色調		時期・型式	胎土混入物				出土位置	備考	
			外面	内面		石	角	砂	他			
第46図4	胴	貝殻条痕文	褐	褐	条痕文系	○			○	織	91H	
第46図5	胴	貝殻条痕文	赤褐	黒褐	条痕文系		○	○	○	織	96H	
第46図6	胴	縄文R.L(還付木端)	明褐	明灰褐	羽状縄文系					織	97H	
第46図7	胴	羽状縄文(無節)	褐	赤褐	羽状縄文系				○		96H	
第46図8	胴	羽状縄文	明褐	明褐	羽状縄文系	○		○	○	織	96H	
第46図9	胴	半截竹管による平行沈線文	暗赤褐	赤褐	諸磯c				○		96H	
第46図10	胴	半截竹管による平行沈線文	暗褐	褐	諸磯c	○		○	○		97H	
第46図11	胴	半截竹管による平行沈線文	暗褐	暗褐	諸磯c		○		○		96H	
第46図12	胴	半截竹管による平行沈線文	暗褐	褐	諸磯c	○		○	○		96H	
第46図13	胴	縄文L.R	明褐	明褐	諸磯?			○	○		97H	混入砂礫は破砕礫の可能性あり
第46図14	口縁	口唇部外面に斜み/半截竹管による横位平行沈線文/腹位のやや太い沈線に沿った河原痕	明褐	褐	諸磯c?		○		○		97H	
第46図15	口縁	波状の複合口縁/浮線文	赤褐	赤褐	前期末~中期初頭			○	○		97H	
第46図16	口縁	口縁に縹系文Rを沿わせ、その下に斜位の縹系文/輪積み痕(複合口縁?)	灰褐	褐	中期初頭?			○	○		97H	
第46図17	胴	縄文R/結節文?	赤褐	赤褐	中期初頭	○			○		98H	
第46図18	胴	縹系文L	褐	褐	加曾利E		○	○	○		遺構外	遺構外/角閃石・輝石の混入が顕著
第46図19	胴	直線および波状の条線文	灰褐	灰褐	加曾利E				○		98H	
第46図20	胴	沈線による曲線・直線文	暗褐	暗褐	堀之内1?	○			○		96H	
第46図21	胴	縹系文L	灰褐	明褐	後期粗製土器				○		100H	白色の砂粒が目立つ

石：石英 角：角閃石・輝石 礫：細礫 砂：砂粒 織：織成

第25表 遺構外出土の縄文土器一覧

(4) 遺構外出土遺物

ここでは、表土や攪乱から出土した遺物、そして遺構内であるが、明らかに他時代の混入品である遺物を前節までの各時代の出土遺物と区別し、遺構外出土遺物として扱うことにする。

今回、遺構外出土遺物としては、大まかに縄文時代の石器・土器(早・前・中期)、近世以降の遺物(陶磁器・土器、石製品、銅製品)に分類できる。

1. 縄文時代の石器(第46図1~3、第24表)

1・2は剥片、3は石核である。

2. 縄文時代の土器(第46図4~21、第25表)

縄文時代の土器は殆どが調査区南側、古墳時代の住居跡の覆土に混入する形で出土した。

出土量は少なく、小破片で詳細の不明なものが多い。ここでは比較的大きな破片について掲載する。

4・5は早期後葉、条痕文系の土器片で、貝殻条痕文のみの胴部片である。

()は現在所

図版番号	種別	器種	法量			製作の特徴等	推定産地	出土位置	時期
			器高	口径	底径				
図版19-2-22	磁器	筒碗	(5.1)	—	—	口縁部～体部破片／口唇部に鉄軸	不明	97H	近・現代
図版19-2-23	陶器	灯明具	(1.5)	—	—	口縁部小破片／鉄軸	瀬戸	97H	19c
図版19-2-24	陶器	蓋	(2.0)	—	—	口縁部破片／土瓶の蓋か／型作り／指頭による成形痕	不明	96H	近・現代
図版19-2-25	陶器	甕	—	—	—	胴部破片／内外面鉄軸	瀬戸	96H	19c
図版19-2-26	土器	蓋	—	—	—	天井部小破片／火消壺の蓋か／外面に白色土を塗布／胎土の色調は淡橙色	不明	97H	不明
図版19-2-27	土器	焙烙	—	—	—	口縁部小破片／口唇部は平坦に面取り／外面は黒く焼けている	在地系	100H	17c
図版19-2-28	土器	焙烙	—	—	—	底部破片	在地系	100H	不明

(単位: cm)

第26表 遺構外出土の陶磁器・土器一覧

6～8は前期中葉の羽状縄文系の土器片。胴部の地文のみ施文する部分の破片である。

9～14は前期後葉の土器片。9～12は地文に半截竹管で集合沈線、菱形文、鋸歯状文などの地文を施文する土器。諸磯c式。13はLRの縄文のみ施文する破片で、詳細は不明だが、諸磯式であろう。14は口唇部外面に刻みを付け、その下に半截竹管で横位の沈線を多数施文する。破片の右端には縦位の貼付文があったと思われる剥離痕が認められる。諸磯c式か？

15～17は前期末から中期初頭の土器と思われるが、詳細な型式は不明。

18・19は中期後葉の加曾利E式と思われる土器片で、地文はそれぞれ撚糸文と縦位の波状条線文。

20・21は後期前葉の土器と思われる。21の胎土には白色の砂粒が目立つ。

3. 近世以降の遺物 (第46図29・30、図版19-2-22～30、第26表)

22は磁器、23～26は陶器、27・28は土器である。

29は石製品で、碁石である。径2.3cm・厚さ0.5cm・重さ3.5gである。

30は銅製品で、竿秤の錘(分銅)である。高さ3.8cm・径3.2cm・重さ145gである。

第4章 城山遺跡第21地点の調査

第1節 調査の経過

(1) 調査に至る経過

平成6年1月、志木市長細田喜八郎から志木市教育委員会（以下、教育委員会）へ開発計画地内における埋蔵文化財の有無及び取り扱いについての照会があった。計画は志木市柏町3丁目1138-1（面積37.8㎡）内にある桜の土壌改良工事を実施するというものである。

これに対し、教育委員会は当該開発予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である城山遺跡（コード11228-003）に該当するため、大旨下記のとおり回答した。

1. 本地点は埋蔵文化財包蔵地に該当し、さらに遺構が密集して分布することが予想される。
2. 今回は面積も狭小であり、建設工事等の開発に伴うものではないため、根の状態を事前に確認するための掘削を行う際に立会いを行い、その結果に基づき、埋蔵文化財の有無及び取り扱いについての回答する。
3. 上記2の結果、埋蔵文化財が確認された場合、埋蔵文化財の保存措置を講ずること。また、やむを得ず土地の現状を変更する場合は、記録保存のための発掘調査を実施する必要があること。

平成6年2月16日、教育委員会は、開発者である志木市長細田喜八郎より埋蔵文化財発掘の通知・埋蔵文化財確認調査依頼書を受領し、2月17日、午前9時30分から根の状態を事前に確認するための掘削に伴う立会い調査を実施した。その結果、昭和61年に発掘調査を実施した第3地点で検出された古墳時代後期の64号住居跡の南側半分に相当する遺構が検出され、土壌改良工事の内容が埋蔵文化財を破壊する恐れがあることを確認した。

これにより、教育委員会は、発掘の通知及び発掘調査の通知を埼玉県教育委員会経由で文化庁長官に提出し、翌18日からは、教育委員会を主体として発掘調査を実施した。なお、発掘調査通知書番号は教文第3-616号 平成6年3月3日付である。

(2) 発掘調査の経過

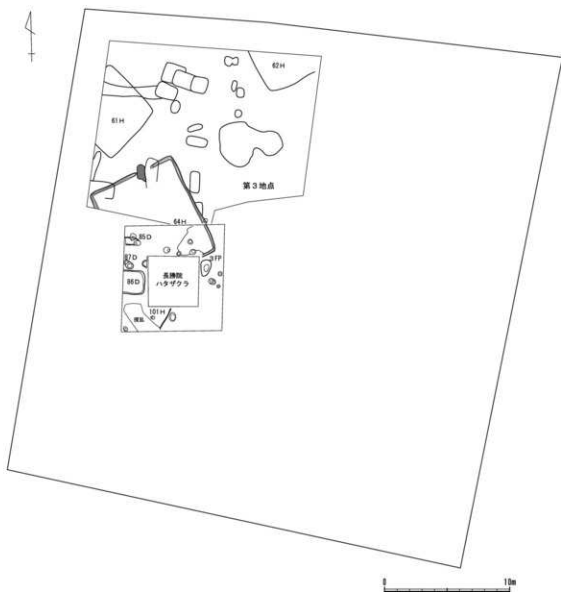
- 7月18日 重機による表土剥ぎ及び遺構確認作業を開始する。同時に人員導入による発掘調査を開始する。重機による表土剥ぎと併行し、調査区の整備と細部の遺構確認作業を行う。本日検出された遺構は、縄文時代の炉穴1基、古墳時代後期の住居跡1軒であった。その後、3号炉穴（3FP）の精査を開始する。
- 21日 雨天のため調査を中止する。
- 22日 第3地点で調査された古墳時代後期の64号住居跡（64H）の南側半分に相当する遺構の精査を開始する。さらに調査区西側には64Hを切る101号住居跡（101H）を検出したため、精査を開始する。101Hは床面上からは陶器編年のTK217型式期の須恵器坏身1点が出土したことから、7世紀後葉の時期に比定される。また、64Hを切る近世の土坑（85D）の精査を開始する。

- 23日 64H・101H・85Dの精査を行う。新たに近世の土坑(86D)の精査を開始する。
- 24日 新たに土坑(87D)の精査を開始する。86Dからは砥石・硯・土製品などの遺物が出たため、遺物出土状態の写真撮影・実測を行う。
- すべての調査を終了し、人力による埋戻し作業を完了する。

第2節 検出された遺構・遺物

(1) 概要

縄文時代の炉穴(3FP)、古墳時代後期の住居跡2軒(64・101H)、近世の土坑3基(85~87D)が検出された。



第47図 遺構分布図(1/300)

古墳時代後期の64Hについては、本地点の北側に隣接する第3地点で検出された住居跡の南半部分に相当する。64Hは7世紀前葉、101Hは7世紀後葉に位置付けられる。

近世の土坑については、3基検出された。そのうち、19世紀前半の86Dからは多くの遺物が出土したが、中でも混入品と思われるが、鐘の札である鉄製品1点と鉄鏝1点が出土し、戦国期の遺物として大変貴重な資料となった。

(2) 炉 穴

3号炉穴

遺 構 (第48図)

〔構造〕(平面形) 不整な楕円形。(規模) 1.32×0.82m。(長軸方位) N-18°-E。(深さ) 28cm。北側の炉床と思われる部分は40×34cm・厚さ6cm程が被熱により赤化していた。(覆土) 3層に分層される。

〔遺物〕 検出されなかった。

〔時期〕 縄文時代早期と思われる。

(3) 住居跡

64号住居跡

遺 構 (第49図)

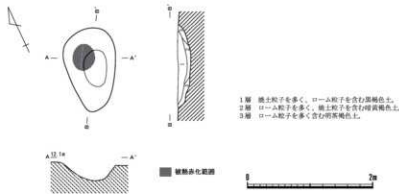
〔住居構造〕 第3地点で検出された64号住居跡の南半部分と思われる。(平面形) 長方形。(規模) 7.3×8.5m。(壁高) 壁付近の上層部は壊されていたため壁面は確認できなかった。(壁溝) 確認できた範囲では、巡らされている。上幅20cm・下幅6~10cm・残りの良い床面からの深さ15~20cmを測る。(床面) 住居西側は軟弱であったが、そのほかは硬化した床面が確認できた。(柱穴) 第3地点の平面図と合わせてみると、コーナーの4本柱に加えて、間に2本ないし4本の柱穴が入る可能性もある。(覆土) ローム粒子・焼土粒子を僅かに含む黒褐色土を基調とする。

〔遺物〕 須恵器坏蓋・坏身形土器、土師器坏形土器が出土した。

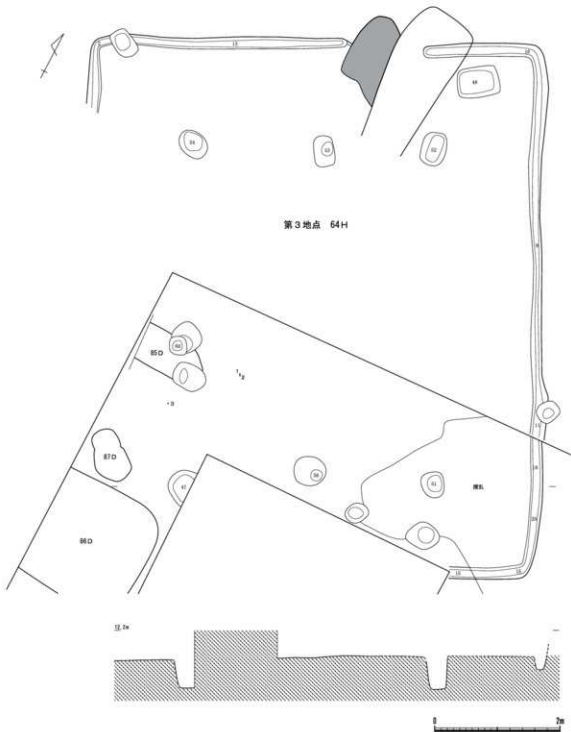
〔時期〕 古墳時代後期(7世紀前葉)。

遺 物 (第50図、第27表)

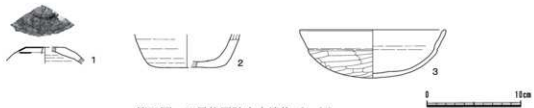
1は須恵器坏蓋形土器、2は須恵器坏身形土器、3は土師器坏形土器である。



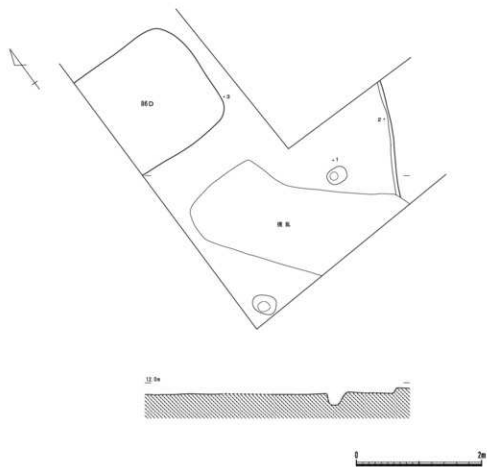
第48図 3号炉穴 (1/60)



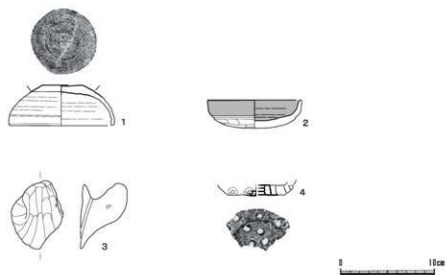
第49図 64号住居跡 (1/60)



第50図 64号住居跡出土遺物 (1/4)



第51図 101号住居跡 (1/60)



第52図 101号住居跡出土遺物 (1/4)

棟号番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第50図1	須恵器 环蓋	(1.7)	—	—	推定天井部径4.2cm/天井部は平皿/湖西製品	暗灰色	砂粒を僅かに含む	ロクロ成形/ロクロ回転は右回転/天井部に回転へう割り	住居中央より南西の覆土中(床土7cm)/調査区北西端	天井部小破片
第50図2	須恵器 环身?	(3.6)	—	(6.9)	筒形を呈する無台环身か/平底	暗灰色を基調(断面セピア色)	黒色粒子・白色砂粒を含む	ロクロ成形/ロクロ回転は右回転か	住居中央より南西の覆土中(床土7cm)/調査区北西端	床部下半へ底部破片
第50図3	土師器 环	(14.5)	(18.6)	—	有段环/口縁部と底部との境に段を有する/口縁部は外傾し大きく開く/在地系土師器	暗黄褐色	砂粒を多く、茶褐色粒子・金雲母を含む	内面:口縁部横ナデ/外面:口縁部横ナデ、以下粗いへう割り	住居中央より南西の覆土中(床土10cm)/調査区北西端	50%

第27表 64号住居跡出土遺物一覧

棟号番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第52図1	須恵器 环蓋	4.3	11.0	—	天井径4.2cm/天井部は平皿/口縁部直上に鋭い突起がまわまる	暗灰色	黒色粒子・白色砂粒を含む	ロクロ成形/ロクロ回転は回転/天井部は回転へう割り	東壁寄りの床面上	完形品
第52図2	土師器 环	3.6	(9.8)	—	小型有段环/口縁部と底部との境に突起がまわまる/口縁部は直立気味にやや外反する/口縁部外面及び内面は赤彩/在地系土師器	暗黄褐色を基調	砂粒を多く、茶褐色粒子・金雲母を含む	内面:口縁部横ナデ、底部へう割り	東壁寄りの床面上	50%
第52図3	土師器 甌	—	—	—	把手/親指大で上向き/小孔が斜行・水平方向(2箇所)に貫通する/基部は剝離/在地系土師器	灰褐色	砂粒を多く含む	成形痕のナデ/内面の剝離面からは指紋が観察される	86D寄りの床面上	把手のみの破片
第52図4	土師器 甌	(1.1)	—	(5.9)	多孔式/平底/穿孔は内側から穿たれる	暗褐色	砂粒を多く、金雲母を含む	内面:へう割り/外面:へう割り	覆土中	底部のみ30%

第28表 101号住居跡出土遺物一覧

(単位: cm)

101号住居跡

遺構 (第51図)

[住居構造] 東壁の一部とその付近の床面しか確認できなかったため、詳細は不明である。(平面形)不明。(規模)不明。(壁高)残りの良いところで17cmを測る。(壁溝)確認できなかった。(床面)よく硬化した床面が確認された。(柱穴)確認できなかった。(覆土)ローム粒子・焼土粒子を僅かに含む黒褐色土を基調とする。

[遺物] 須恵器环蓋形土器、土師器甌形土器が出土した。

[時期] 古墳時代後期(7世紀後葉)。

遺物 (第52図、第28表)

1は須恵器环蓋形土器、2は土師器环形土器、3・4は土師器甌形土器である。

(4) 土坑

85号土坑

遺構 (第53図)

[構造] 西側は調査区域外である。64Hを切る。坑底は平坦で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。(規模)不明×60cm。(深さ)52cm。(長軸方位)N-86°-W。(覆土)3層に分層される。

[遺物] 陶器・土器、石製品が出土した。

[時期] 近世（17世紀前半か）。

遺物（図版22-3、第29表）

1は陶器、2は土器である。

3は石製品で、硯あるいは砥石の小破片であろう。長さ3.8cm・幅1.6cm・厚さ0.5cm・重さ3.5g。遺存状態は悪く、小破片である。色調は明赤茶色で側面には成形痕の細かい条線が残る。

86号土坑

遺構（第53図）

[構造] 西側は調査区域外である。64H・101Hを切る。坑底は平坦で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。多数の遺物の他、20個程の礫が出土している。（規模）不明×1.90m。（深さ）60cm前後を測る。（長軸方位）ほぼE-W。（覆土）6層に分層される。

[遺物] 陶器・土器、石製品（砥石）、鉄製品、板碑など多数出土した。

[時期] 近世（19世紀前半）。

遺物（第54図、図版22-4・図版23-1、第29表）

1・2は磁器、3～9は陶器、10～15は土器である。

16～18は石製品である。

16は転用品であろう。焙烙と思われる底部の側面に平坦面があることから、砥石として使用された可能性がある。長さ3.4cm・幅2.8cm・厚さ0.8cm・重さ6.8g。色調は淡橙色を呈する。

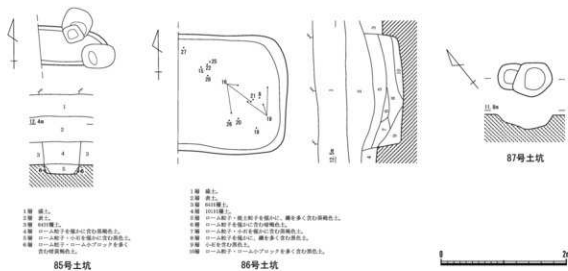
17は硯である。長さ3.8cm・幅4.2cm・高さ1.6cm・27g。陸側は欠損している。

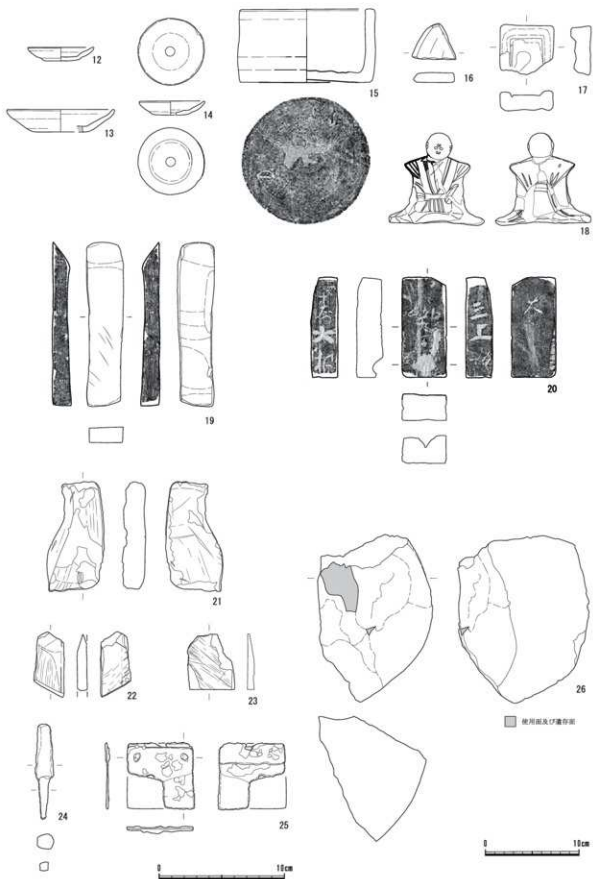
18は素焼の埴人形である。高さ7.2cm・最大幅7.5cm・最大厚4.4cm・46.6g。

19～23・26は石製品である。

19は長さ13.0cm・幅2.9cm・厚さ1.4cm・重さ89g。使用面は全面である。両側面も使用され、成形痕の条線が若干消されている。石質は凝灰岩。

20は長さ7.9cm・幅3.5cm・厚さ2.0cm・重さ113g。上面の上端に窪み上面・両側面には刻印あり。





第54図 86号土坑出土遺物(1/3・1/4)

図版番号	遺構名	種別	器種	法 量			製作の特徴等	推定生産	時 期
				器高	口径	底径			
図版22-3-1	85D	陶器	皿	—	—	—	口縁部小破片/志野釉	瀬戸	17c前半
図版22-3-2	85D	土器	焙烙	—	—	—	底部小破片	在地系	不明
図版22-4-1	86D	磁器	青磁瓶	—	—	—	口縁部小破片/長頸瓶か	肥前系	不明
図版22-4-2	86D	磁器	碗	(3.0)	—	—	口縁部～体部小破片/染付/外面：草花文	肥前系	18c中
図版22-4-3	86D	陶器	皿	(1.3)	—	—	底部小破片/志野釉/胎土目痕あり	瀬戸	17c中
図版22-4-4	86D	陶器	皿	(1.5)	—	(6.4)	底部小破片/高台付/内面灰釉/胎土の色調は灰褐色	瀬戸	17c中
図版22-4-5	86D	陶器	丸罎	(1.0)	—	3.4	底部小破片/高台付/胎土の色調は黄褐色/京焼風	瀬戸	18c中
図版22-4-6	86D	陶器	甕	—	—	—	胴部破片/外面に鉄輪/外面に叩き目痕	不明	19c
図版22-4-7	86D	陶器	甕	—	—	—	肩部破片/外面に鉄輪/8と同一個体の可能性あり	常滑	15c
図版22-4-8	86D	陶器	甕	—	—	—	胴部破片/外面に鉄輪/7と同一個体の可能性あり	常滑	15c
図版22-4-9	86D	陶器	罐鉢	—	—	—	胴部小破片/色調は明茶褐色/磨目の間隔は0.5cm	備前	18c～19c
図版22-4-10	86D	土器	焙烙	5.0	—	—	口唇部は平皿/色調は内外面黒褐色/11と同一個体の可能性あり	在地系	17c前半
図版22-4-11	86D	土器	焙烙	—	—	—	底部破片/色調は内外面黒褐色/底部内面にへつナデ/10と同一個体の可能性あり	在地系	17c前半
図版22-4-12	86D	土器	かわらけ	1.1	5.3	2.7	底部はやや丸底気味で段を有する/色調は暗褐色/ロクロ成形	在地系	19c前半
図版22-4-13	86D	土器	かわらけ	1.8	(8.6)	(4.6)	底部は平底/色調は暗褐色/ロクロ成形	在地系	不明
図版22-4-14	86D	土器	かわらけ	1.0	5.3	3.1	底部に段を有する/底部に穿孔あり/穿孔径：0.8cm/ロクロ成形/灯明貝であろう	在地系	19c前半
図版22-4-15	86D	土器	鉢	5.8	10.8	10.3	用途不明/底部に刻印あり/外面：手によるナデであろうか	不明	不明

第29表 85・86号土坑出土の陶磁器・土器一覧

(単位：cm)

21は長さ8.7cm・幅4.5cm・厚さ1.8cm・重さ96g。石質は凝灰岩。

22は長さ4.6cm・幅2.4cm・厚さ0.9cm・重さ15g。硯の転用品と思われる。硯の縁・海・波・陸部分の痕跡が残る。石質は粘板岩であろう。

23は硯の小破片と思われる。長さ4.3cm・幅3.7cm・厚さ0.8cm・重さ14g。石質は粘板岩と思われる。

26は石皿であろうか。長さ17.7cm・幅11.3cm・高さ13.8cm・重さ2.7kg。上面には凹面をもつ使用面が僅かに残ることから石皿と取り扱った。混入品の可能性もある。

24・25は戦国期の鉄製品で、注目に値する。

24は鉄鏝である。長さ7.6cm・最大幅1.4cm・重さ37.2g。鏝身部と茎部の先端は欠損している。表面には鍛造による叩き目痕が残る。古代の鉄鏝に比べ、重量感を特徴とする。

25は鍔の札(さね)である。長さ5.3・幅5.3cm・厚さ0.6cm・重さ16.6g。四角い鉄板を上下で留める銅鉸が残る。当市での甲冑資料は初めての検出例である。

27・28は板碑の小破片である。いずれも石質は緑色片岩である。

27は長さ11.0cm・幅6.3cm・厚さ1.3cm・重さ104g。表面には二条線が残る。

28は長さ12.5cm・幅7.4cm・厚さ2.5cm・重さ273g。

87号土坑

遺 構 (第53図)

[構造] 2基の重複形態を示す。(規模) 86×53cm。(深さ) 64H床面から21~25cm。(長軸方位) N-45°-W。(覆土) ローム粒子を含む黒褐色土を基調とする。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 近世以降か。

(5) 遺構外出土遺物

ここでは、表土や攪乱から出土した遺物、そして遺構内であるが、明らかに他時期の混入品である遺物を前節までの各時代の出土遺物と区別し、遺構外出土遺物として扱うことにする。

今回、遺構外出土遺物としては、縄文時代の石器、土器(草創・早・前・中・後期)、弥生時代後期末葉から古墳時代前期の土器、古墳時代後期の土器、近世以降の陶磁器・土器に分類できる。

1. 旧石器・縄文時代の石器 (第55図1~3、第30表)

1は石鏃、2はR、F、3は剥片である。

2. 縄文時代の土器 (第55図4~26、第31表)

縄文時代の土器は草創期から後期にかけて広範にわたる時期の破片が出土している。

4~6は草創期多縄文系の土器と思われる土器群である。

4は器厚5mmと薄手の土器である。小突起を持つ波状口縁部片で、細い筒状工具による刺突文を施文している。刺突文は口唇に沿って、口唇部上面に一列、内外面には2列施文され、外面の刺突は斜めに施文される。また、小突起には同じ工具の側面で刻み状の押捺がされる。5は篋状工具で刺突・押捺施文される土器片である。刺突は浅く、細かく連続して施文される。押捺は○形。6は横位の押圧縄文を施文する土器片。

7・8は早期後葉の下吉井式土器で、7は幅の広い平行沈線、8は内面に平行沈線をごく浅く施文している。両者とも胎土に白色針状物質を顕著に含む。

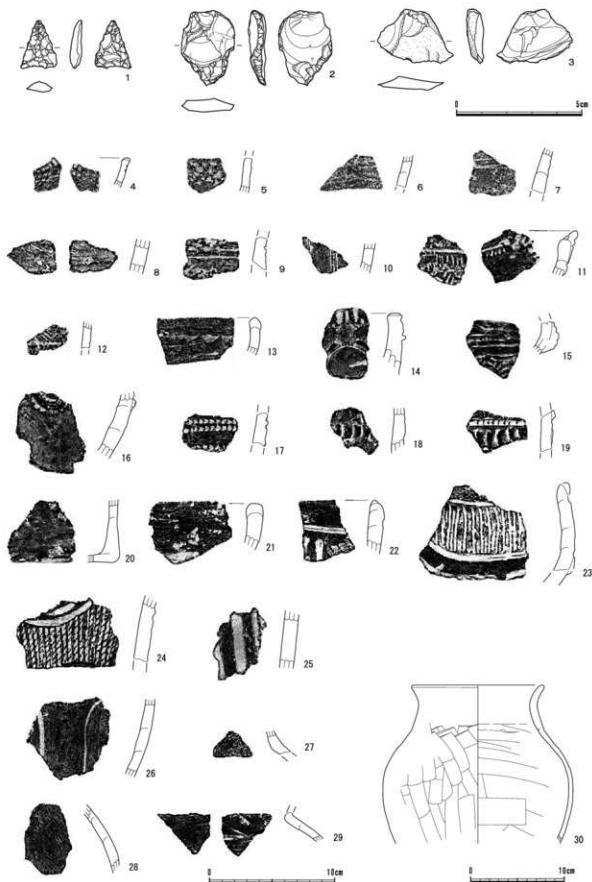
9は前期中葉の黒浜式、10は前期後葉の諸磯式土器である。

11~25は中期の土器群で、11・12は初頭の五領ヶ台式、13~17は前半の所産と思われるが型式不明の土器片。13は口唇部を複合口縁状に輪積み痕を残し、器面の外周を削っている。その下には部分的に指頭圧痕が見られる。18~20は前・中葉の阿玉台式の土器片で、いずれも金雲母と細礫の混入が顕著である。細礫は円磨度が低く、金雲母を含んでいた母岩の破片か、あるいは金雲母を破砕した際の石器の破片であろうか? 21~25は後葉の加曽利E式土器である。

26は後期前葉の土器で、堀之内1式の破片である。

3. 弥生時代後期末葉から古墳時代前期の土器 (第55図27~29)

27・28は壺形土器である。27は肩部小破片で、2条の自縄結節文とLR単節斜縄文が施文される。色調は淡黄褐色を呈し、胎土には橙色粒子・砂粒を含む。内面はハケ目調整が施される。64Hからの出土である。28は胴部小破片で、外面は赤彩される。胎土の色調は淡黄褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・



第55図 遺構外出土遺物 (2/3・1/3・1/4)

神図番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	遺存状態	出土位置
第55図1	石鏡	チャート	19.12	14.12	4.91	1.00	完形	86D
第55図2	R、F	黒曜石	29.57	21.84	6.82	3.80	完形	86D
第55図3	割片	チャート	20.75	30.26	6.95	3.10	完形	86D

(単位: mm・g)

第30表 遺構外出土の石器一覧

神図番号	部位	文様・特徴など	色調	時期・型式	胎土混入物				出土位置	備考	
					石	角	礫	砂			他
第55図4	口縁	波状口縁/波頂部に刻み/口唇部及び内外面に円形の刻文列	赤褐	多縄文系				○		86D	
第55図5	胴	筒状工具の先端による浅い連続刻文、及び押捺文	黒褐色	多縄文系				○	白	64H	白色粒子の混入が顕著
第55図6	胴	横位の縄文L圧痕	赤褐	多縄文系				○		64H	
第55図7	胴	幅広の平行沈線文	褐	下吉井			○	○	織・針	101H	
第55図8	胴	無文/内面に浅い平行沈線文	暗赤褐	下吉井			○	○	織・針	64H	
第55図9	胴	半載竹管による平行沈線文	赤褐	黒浜		○			織・片	64H	
第55図10	胴	半載竹管による条線文	褐	諸磯c			○	○		64H	
第55図11	口縁	小突起/口唇部に沈線と内面に刻み/集合沈線/三角捺刻文	褐	五領ヶ台				○		101H	
第55図12	胴	半載竹管による平行沈線文/斜位の集合沈線文	暗赤褐	五領ヶ台			○	○		85D	
第55図13	口縁	複合口縁状の輪積み痕/指頭圧痕	黒褐色	中期前半	○	○		○	白	64H	
第55図14	口縁	口唇部に刻み/細い隆線の両脇に結節沈線文	暗赤褐	中期前半				○	○	101H	
第55図15	口縁	半載竹管による平行沈線文	赤褐	中期前半				○	金	64H	口唇部欠
第55図16	胴	曲線的な隆線の両脇に結節沈線文	赤褐	中期前半				○		64H	
第55図17	胴	結節沈線文	黒褐色	中期前半				○		86D	
第55図18	胴	鬚状指頭圧痕文	赤褐	阿玉台	○	○	○	○	金	64H	細線の混入が顕著
第55図19	胴	鬚状指頭圧痕文/結節沈線文	暗褐	阿玉台	○	○	○	○	金	64H	細線・金雲母の混入が顕著
第55図20	底	無文	暗褐	阿玉台	○	○	○	○	金	64H	細線・金雲母の混入が顕著
第55図21	口縁	口唇部無文帯/太沈線文	黒褐色	加曾利EⅢ~Ⅳ				○		64H	砂粒は白色の砂粒が顕著
第55図22	口縁	口唇部無文帯/縄文L/2本の沈線による懸垂文	褐	加曾利EⅢ~Ⅳ				○		遺構外	
第55図23	口縁	隆帯・沈線による区画内に沈線文を充填	暗褐/内面黒褐色	加曾利EⅡ				○		85D	口唇部欠
第55図24	胴	懸垂文L/2本の沈線による弧線文	明褐	加曾利EⅠ~Ⅱ				○	褐	遺構外	
第55図25	胴	太沈線による懸垂文	褐	加曾利EⅢ				○	明	64H	
第55図26	胴	沈線による懸垂文	褐	堀之内Ⅰ				○	明	64H	

☆:石 石丸 角:角閃石・輝石 礫:細礫 砂:砂粒 白:白色粒子 織:織物 針:白色針状物 片:片岩 金:金雲母 褐:褐色粒子 明:明褐色粒子

第31表 遺構外出土の縄文土器一覧

図版番号	種別	器種	法量		製作の特徴等	推定産地	出土位置	時期	
			器高	口径					底径
図版23-2-31	磁器	碗	(3.5)	-	-	口縁部~体部破片/染付/外面:松葉文か	瀬戸	101H	近代
図版23-2-32	陶器	皿	-	-	-	口縁部小破片/焼熱により遺存状態が悪い/灰釉/	不明	遺構外	不明
図版23-2-33	土器	手埴り	(4.5)	-	-	口縁部~胴部破片/口縁部は内相/口縁部直下に太沈線がまわる/内外面黒褐色	在地系	遺構外	不明

()は現存量

(単位: cm)

第32表 遺構外出土の陶磁器・土器一覧

砂粒を含む。内面はヘラナデ、外面はハケ目調整後に粗いヘラ磨き調整が施される。64Hからの出土である。

29は甕形土器である。胴部上半の小破片で、色調は暗橙色を呈し、胎土には砂粒を含む。内外面にハケ目調整が施される。64Hからの出土である。

4. 古墳時代後期の土器 (第55図30)

土師器で小型丸甕である。現器高16.8cm・推定口径14.4cm。胴部上半に最大径をもち、口縁部はやや「コ」字状を呈している。色調は淡黄褐色を呈し、胎土には茶褐色粒子・金雲母・砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削りが施される。口縁部から胴部下半にかけて20%程で、86Dからの出土である。

5. 近世以降の陶磁器・土器 (図版23-2-31~33、第32表)

31は磁器、32は陶器、33は土器である。

第5章 城山遺跡第22地点の調査

第1節 調査の経過

(1) 調査に至る経過

平成6年1月、開発主体者から志木市教育委員会（以下、教育委員会）へ開発計画地内における埋蔵文化財の有無及び取り扱いについての照会があった。計画は志木市柏町3丁目2602-1の一部（面積498.13㎡）内に共同住宅建設を実施するというものである。

これに対し、教育委員会は当該開発予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である城山遺跡（コード11228-003）に該当するため、大旨下記のとおり回答した。

1. 本地点は埋蔵文化財包蔵地に該当し、さらに遺構が密集して分布することが予想される。
2. 埋蔵文化財確認調査を実施して、その結果に基づき、当該開発予定地の埋蔵文化財の有無及び取り扱いについて回答する。
3. 上記2の調査の結果、埋蔵文化財が確認された場合、埋蔵文化財の保存措置を講ずること。また、やむを得ず土地の現状を変更する場合は、記録保存のための発掘調査を実施する必要があること。

平成6年2月23日、教育委員会は、開発者及び土地所有者である（個人）より埋蔵文化財発掘届・埋蔵文化財確認調査依頼書を受領し、3月2日、午前9時30分から確認調査を実施した。

確認調査は、調査区のはほぼ南北方向（山-谷直行）に合わせ、2本のトレンチを設定し、バックホーで表土を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った。その結果、調査区南西端から古墳時代後期の住居跡1軒を検出した。確認調査は3日午前中で終了した。

教育委員会は、この結果をただちに事業者に報告し、埋蔵文化財の保存措置について協議を行った。

その結果、記録保存のための発掘調査については、遺構が検出された部分を対象面積（60.00㎡）とし、発掘調査を実施することに決定した。

その後、教育委員会では、発掘調査にあたる組織として、志木市遺跡調査会（以下、遺跡調査会）を幹旋した。遺跡調査会ではこれを受け、開発主体者と委託契約を締結し、埋蔵文化財発掘調査届を教育委員会に提出する。教育委員会は、届出書をすみやかに埼玉県教育委員会経由で文化庁長官に提出した。

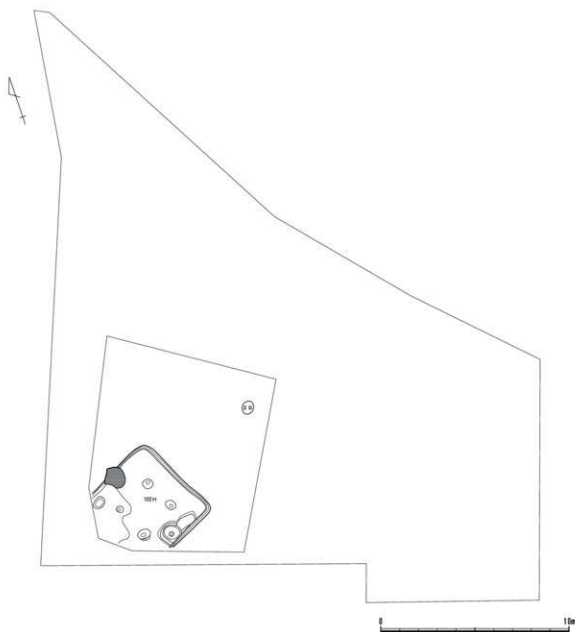
これにより、3月9日から遺跡調査会を主体として発掘調査を実施した。なお、発掘調査通知書番号は教文第2-209号 平成6年3月15日付である。

(2) 発掘調査の経過

発掘調査及び各遺構の主な経過は、以下とおりである。

- 3月9日 人員導入による発掘調査を開始する。器材搬入後、調査区域の整備と細部の遺構確認作業を実施する。午後からは古墳時代後期の住居跡（102H）の精査を開始する。
- 10日 雨天により調査中止。
- 11日 遺構確認面はローム上層で縄文時代の遺物包含層として捉えられるため、102Hのプランが分かりづらい。住居北半部からは床硬化面を確認した。

- 14日 102Hのプランはまだ未確認。住居南側からも床硬化面を確認した。床面上からは土器がまとまって出土している。
- 15日 102Hの南東コーナー付近の壁の立ち上がりを確認する。
- 16日 102Hのカマド左から貯蔵穴と柱穴を確認する。セクションA-A'の実測を終了後ベルトはずし。
- 17日 102Hの貯蔵穴・柱穴・壁溝掘り。その後、遺構出土状態の写真撮影を行う。
- 18日 102Hの遺物出土状態の平板測量を開始する。
- 22日 102Hの遺物出土状態の平板測量を終了し、遺物を取り上げる。
- 23日 雨天により調査中止。
- 24日 102Hの遺構の平板測量を開始し、終了する。また、本地点は表土下に縄文時代の遺物



第56図 遺構分布図 (1/200)

包含層が堆積しているため、サブトレンチを設定し、確認作業を開始する。

- 25日 102HのエレベーションB～Fの実測を行う。また、カマドの精査を開始し、同日には終了する。
- 28日 2号集石（2S）を確認したため、精査を開始する。
- 29日 2Sの写真撮影後、実測を開始する。
- 30日 2Sの精査を終了し、すべての調査を完了する。
- 31日 午前中、重機による埋戻し作業を完了する。

第2節 検出された遺構・遺物

（1）概要

本地点からは、縄文時代の集石1基（2S）と古墳時代後期の住居跡1軒（102H）が検出された。

また、本地点は台地斜面地に位置することから、縄文時代を主体とする遺物包含層が発達しており、縄文土器が多く出土した。特に注目できる資料として、草創期の爪形文系土器（第65図7）の小破片1点が出土し、本市では2例目の発見となった。

（2）集石

2号集石

遺構（第57図）

〔構造〕斜面部から検出された。礫は概ね直径70cmほどの範囲から出土している。深さは確認面から約35cm。礫は140個程出土した。

〔遺物〕石器は礫器1点、土器は浅鉢・深鉢の破片4点が出土した。

〔時期〕縄文時代前期後葉。

遺物（第58図）

1は石器で礫器である。長さ64.38mm・幅67.26mm・厚さ22.40mm・重さ100.50gで、石質はホルンフェルスである。

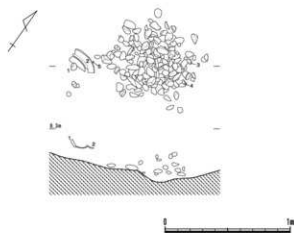
2～5は土器である。2は浅鉢の胴部～底部の破片。無文で色調は外面が褐色～黒褐色。内面暗褐色。器面は全面が横に磨き調整されている。胎土には砂粒、輝石もしくは角閃石、褐色粒子を含む。

3は横位に粘土紐を貼付し、その上からRL縄文を施文している。地文はRL縄文。色調は外面暗赤褐色、内面褐色。胎土には砂粒、細礫、輝石・角閃石を含む。

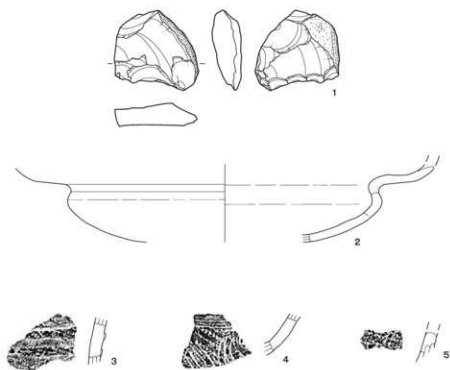
4はRL縄文地に半截竹管による渦巻文・弧線文が描かれている。内外面ともに暗赤褐色を呈し、胎土にはチャートの細礫が目立つ。

5はL撚糸文を地文とする小破片。外面赤褐色、内面暗褐色を呈する。胎土には砂粒を多く含む脆い。

いずれの土器片も諸磯式と思われるが、2・5の詳細な時期は不明。3・4は諸磯b式。



第57図 2号集石 (1/30)



第58図 2号集石出土遺物 (1/3)

(3) 住居跡

102号住居跡

遺 構 (第59～61図)

〔住居構造〕住居の南西側は調査区域外であり、北コーナー付近の上層は攪乱により削られている。(平面形) 方形。(規模) 不明×5.18m。(壁高) 残りの良いところで30cm前後を測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝) 確認できた範囲では、カマドを除いて巡らされている。上幅12～22cm・下幅6～12cm・深さ5～15cmを測る。(床面) 全体に硬化した床面が確認された。貼床は2～10cmの厚さで施されていた。(カマド) 北西壁に位置する。主軸方位はN-30°-W。長さ112cm・幅110cm・壁への掘り込み32cmを測る。袖部はロームを馬蹄形に残し、その上に粘土を被覆して天井部と共に構築されていたと思われる。燃焼部は焼けて赤化していた。(柱穴) 主柱穴は4本で深さ49～73cmを測る。南側の柱穴は重複している。南東壁近くの深さ20cmのものは、入口梯子穴と思われる。この柱穴の周りには高さ3cmほどの凸堤が巡らされている。(貯蔵穴) カマド左側の西コーナー寄りに位置するが、上層は攪乱により削られている。平面形は隅丸長方形を呈する。規模は50×66cm・深さ48cmを測る。

(覆土) 上層は焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む黒色土、下層はローム粒子をやや多く含む黄褐色土を基調とする。

〔遺物〕土師器杯・鉢・甕・甕形土器、ミニチュア土器、土製品、鉄製品、炭化種子11点(モモ)などが出土した。

〔時期〕古墳時代後期(7世紀中葉)。

遺 物 (第62～64図、第33表)

1～6は土師器杯形土器、7は土師器鉢形土器、8～20は土師器甕形土器、21・22は土師器甕形土器、24はミニチュア土器である。

23は土製品で支脚である。高さ14.9cm・最大幅9.8cm・重さ908g。被熱により遺存状態は悪く、表面全体は剥落している。胎土には砂粒が少ないが、金雲母・小石(大粒1cmほど)・繊維を含む。覆土中からの出土である。

25・26は鉄製品である。

25は鉄鏝で、長さ8.7cm・鏝身長4.9・頸部長3.8cm・鏝身幅1.2cm・鏝身厚さ0.3cm・頸部幅0.6cm・頸部厚さ0.4cm・重さ7.2g。鏝身部は片丸造りで茎部は欠損していると思われる。

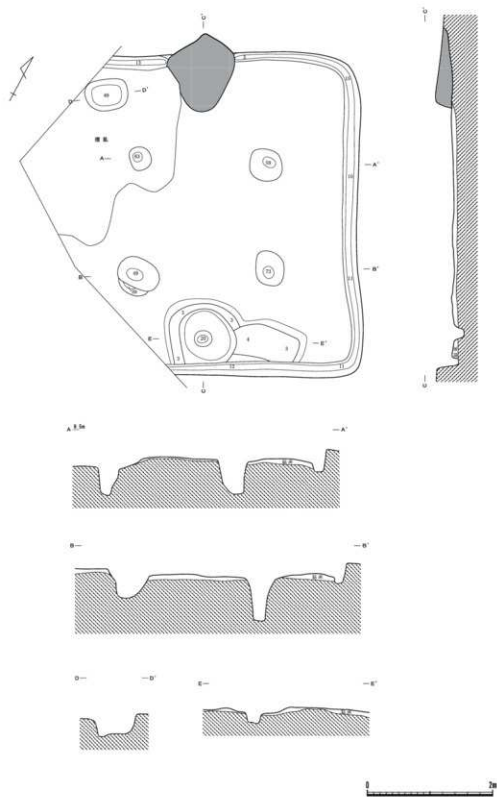
住居中央の覆土中(床上22cm)からの出土である。

26は鏝(のみ)と思われる。長さ4.6cm・幅1.6cm・厚さ0.5cm・重さ12.6g。平面形は長方形を呈するが、先端はやや丸身を有する。片丸造りで、下端は欠損している。

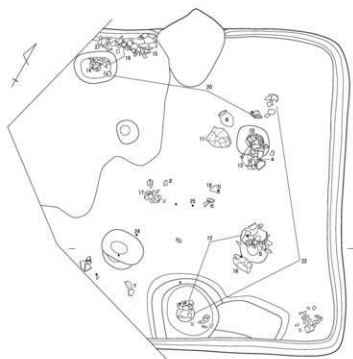
(4) 遺構外出土遺物

ここでは、表土や攪乱から出土した遺物、そして遺構内であるが、明らかに他時代の混入品である遺物を前項までの各時代の出土遺物と区別し、遺構外出土遺物として扱うことにする。また、今回は、台地斜面地という立地から、縄文時代を主体とするやや発達した遺物包含層も検出され、その包含層中からも土器が比較的多く出土したが、これらの遺物もすべて遺構外出土として扱った。

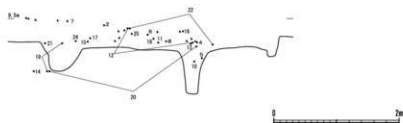
今回、遺構外出土遺物としては、旧石器・縄文時代の石器、縄文時代の土器、弥生時代後期から古墳時代前期の土器、近世の遺物(寛永通宝)に分類できる。



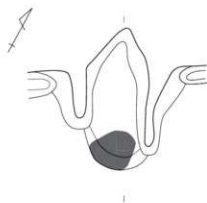
第59図 102号住居跡 (1/60)



・炭化種子（毛毛）



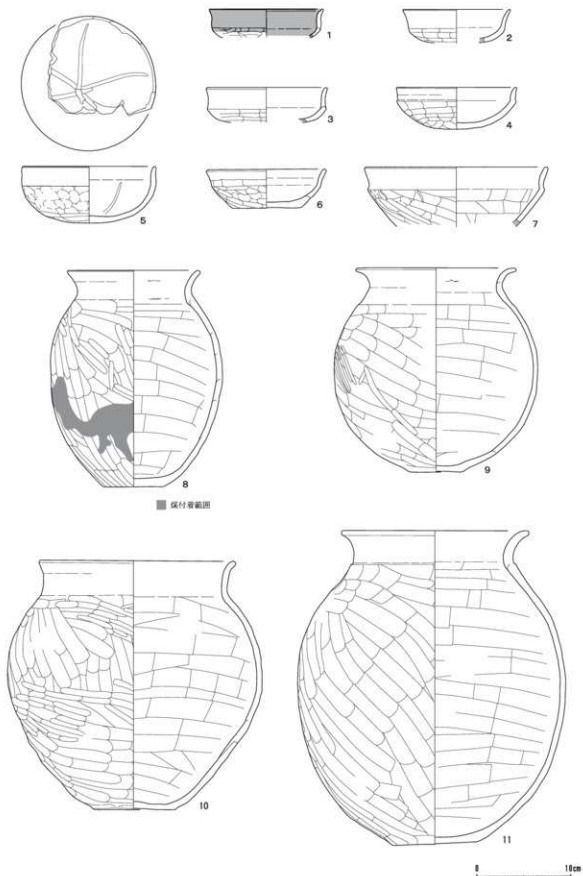
第60図 102号住居跡遺物出土状態（1/60）



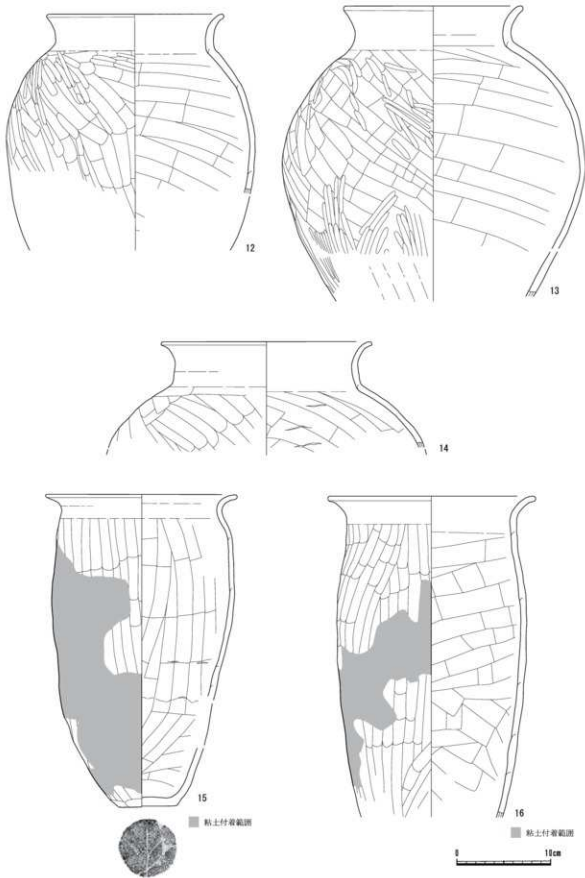
- 1層 ローム粒子・微土粒子を含む暗褐色土。
- 2層 暗灰褐色粘土ブロック。
- 3層 微土粒子・微土小ブロックを含む暗褐色土。
- 4層 微土粒子・微土小ブロックを多く、炭化植物を含む暗赤褐色土。
- 5層 黄褐色ロームブロック。
- 6層 ローム粒子を多く、微土粒子層が含む暗赤褐色土。
- 7層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗赤褐色土。
- 8層 粘土。

■ 竈跡所在位置

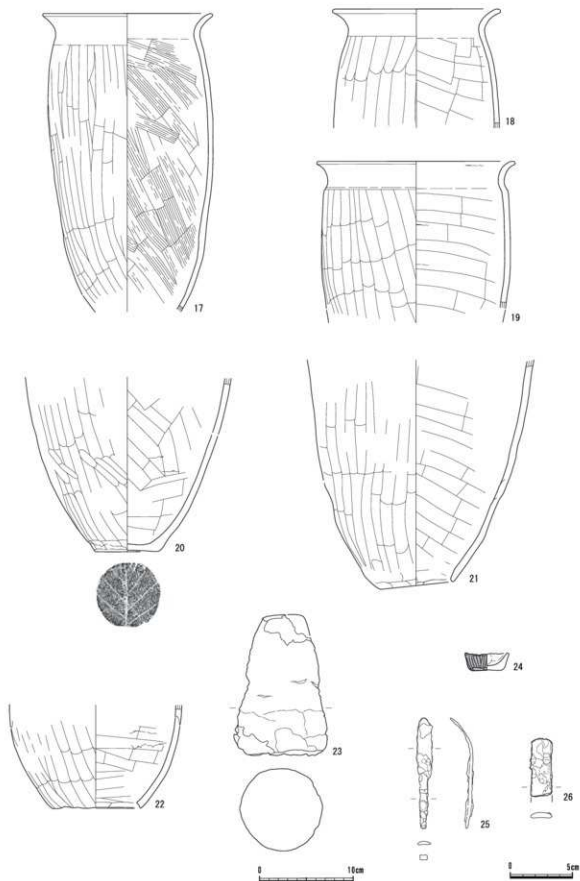
第61図 102号住居跡カマド（1/30）



第62図 102号住居跡出土遺物1 (1/4)



第63図 102号住居跡出土遺物 2 (1/4)



第64図 102号住居跡出土遺物3 (1/4・1/3)

() は埋存確及び埋定率

拝見番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	埋存率
第62図1	土師器 環	0.0	(12.0)	-	いわゆる比企型环/口縁部内面には幅3cmの沈積がまわると/外面に黒炭灰/口縁部外面及び内面は赤彩/人間系土師器	胎土は暗赤褐色を基調	砂粒・小石を含む	内面:横ナデ/外面:口縁部は横ナデ、底部はへう削り	覆土中	口縁部~体部下半の破片
第62図2	土師器 環	0.5	(11.4)	-	口縁部は外反する/口縁部と胴部との境は稜を有する/在地系土師器	淡黄褐色	砂粒をやや多く含む	内面:横ナデ/外面:口縁部は横ナデ、以下へう削り	住居中央の覆土中(床上28cm)	口縁部~体部下半の10%
第62図3	土師器 環	0.7	(12.6)	-	口縁部は外反する/口縁部と胴部との境は稜を有する/在地系土師器	淡黄褐色	砂粒をやや多く、茶褐色粒子を僅かに含む	内面:横ナデ/外面:口縁部は横ナデ、以下へう削り	覆土中	口縁部~体部下半の10%
第62図4	土師器 環	4.4	12.7	-	口縁部は直立する/口縁部と胴部との境は段を有する/在地系土師器	淡黄褐色	砂粒を多く、白色粒子・茶褐色粒子を含む	内面:横ナデ(回転ナデ)/口縁部は横ナデ、以下はへう削り	北東コーナー柱穴すく南側の覆土内(床上13cm)	60%
第62図5	土師器 環	6.0	(14.2)	-	深身の塊タイプ/口縁部は直立気味に僅かに外反する/内面に暗文あり/底部はやや平底風/在地系土師器	暗黄褐色	砂粒を多く、褐色粒子を含む	内面:口縁部は横ナデ、以下はへう削り後放射状の暗文が施文される/口縁部は横ナデ、底部はへう削り、口縁部直下には指頭押捺による成形痕あり	南東コーナー柱穴内	50%
第62図6	土師器 環	4.1	(12.7)	7.0	広葉/口縁部は外傾するが、途中へう削りにより始まる/口縁部と胴部との境は稜を有する/やや大きめの平底	暗黄褐色	砂粒を多く、茶褐色粒子を僅かに含む	内面:口縁部は横ナデ、以下はへう削り/外面:口縁部は横ナデ、以下はへう削り後へうナデ(スリップか?)、その後粗いへう磨き調整	住居中央の覆土中(床上21cm)	70%
第62図7	土師器 鉢	6.2	(19.4)	-	口縁部は外反する/口縁部と胴部との境は段を有する	淡黄褐色~暗褐色	砂粒を多く、茶褐色粒子・小石を含む	内面:口縁部は横ナデ、以下はへう削り/外面:口縁部は横ナデ、以下はへう削り	入口施設西側の覆土中(床上33cm)	口縁部~体部下半20%
第62図8	土師器 甕	22.9	14.0	6.4	中型品/口縁部は外反する/口縁部と胴部との境は段を有する/最大径は胴部中位/全体に保たれているが、特に胴部中位は善しい/平底	暗茶褐色	砂粒をやや多く含む	内面:口縁部は横ナデ、以下はへう削り/外面:口縁部は横ナデ、以下はへう削り後へうナデ(スリップか?)、その後粗いへう磨き調整	カマド前面の覆土中(床上12cm)	完形品
第62図9	土師器 甕	21.7	(17.0)	5.8	丸甕/中型品/口縁部は大きく外反する/最大径は胴部中位/平底	暗黄褐色を基調	砂粒を多く、黄褐色粒子を僅かに含む	内面:口縁部は横ナデ、以下はへう削り/外面:口縁部は横ナデ、以下はへう削り後へうナデ(スリップか?)	覆土中	40%
第62図10	土師器 甕	26.4	20.7	8.6	丸甕/中型品/口縁部は歪んでいて、やや「コ」の字状を呈する/最大径は胴部中位/胴部下半は輪痕みによる段差が顕著/平底	暗黄褐色	砂粒を多く、金雲母・角閃石を僅かに含む	内面:口縁部は横ナデ、以下はへう削り/外面:口縁部は横ナデ、以下はへう削り後へうナデ(スリップか?)	北東コーナー柱穴内	ほぼ完形品
第62図11	土師器 甕	33.2	19.9	8.8	丸甕/大型品/口縁部は外反する/口縁部と胴部との境は段差をもつ/最大径は胴部中位/平底	暗褐色	砂粒を多く、茶褐色粒子・砂粒を僅かに含む	内面:口縁部は横ナデ、以下はへう削り/外面:口縁部は横ナデ、以下はへう削り後へうナデであるが、胴部上半~中位はでないにへうナデ(スリップ?)	北東コーナー柱穴西側の覆土中(床上10cm)	ほぼ完形品
第63図12	土師器 甕	21.9	18.7	-	丸甕/中型品/口縁部はやや「コ」の字状を呈する/最大径は胴部上半	淡黄褐色	砂粒を多く、黄褐色粒子を僅かに含む	内面:口縁部は横ナデ、以下はへう削り/外面:口縁部は横ナデ、以下はへう削り後でないにへうナデ(スリップか?)	南東コーナー柱穴位置の覆土中(床上9cm)を中心に入口部の覆土中(床上28cm)	口縁部~胴部下半70%
第63図13	土師器 甕	31.2	19.0	-	丸甕/大型品/口縁部は「コ」の字状を呈する/最大径は胴部中位	淡黄褐色	砂粒を多く、黄褐色粒子・茶褐色粒子・金雲母を含む	内面:口縁部は横ナデ、以下はへう削り/外面:口縁部は横ナデ、以下はへう削り後でないにへうナデ(スリップか?)	南東コーナー柱穴位置の覆土中(床上7cm)	口縁部~胴部下半80%
第63図14	土師器 甕	(12.0)	(22.4)	-	丸甕/大型品/口縁部は「コ」の字状を呈する	淡黄褐色	砂粒を多く、黄褐色粒子(大きなもので0mm)・茶褐色粒子を含む	内面:口縁部は横ナデ、以下はへう削り/外面:口縁部は横ナデ、以下はへう削り後でないにへうナデ(スリップか?)	貯蔵穴内	口縁部~胴部上半30%

第33表 102号住居跡出土遺物一覧(1)

(単位:cm)

標図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第63図15	土師器 甕	33.0	20.2	6.2	長甕/口縁部は大きく外反する/口縁部と胴部との境はスムーズ/最大径は口縁部と胴部上半のほぼ同位置/胴部中位以下に粘土附着あり/底部に木炭痕あり	暗褐色	茶褐色粒子・砂粒を多く含む	内面:口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面:口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後胴部上半へ中位はていどいかにヘラナデ(スリップか?)	カマド左横のほぼ床直	80%
第63図16	土師器 甕	(34.0)	(22.0)	-	長甕/口縁部は外反する/口縁部と胴部との境はスムーズ/最大径は口縁部と胴部重なりはほぼ同位置/胴部中位以下に粘土附着あり	暗褐色を基調	砂粒をやや多く含む	内面:口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面:口縁部は横ナデ、以下ヘラ削り後にていどいかにヘラナデ(スリップか?)	北東コーナー柱穴のすぐ北側の覆土中(床土26cm)	口縁部へ胴部下半40%
第64図17	土師器 甕	(31.5)	(18.0)	-	長甕/口縁部は外反する/口縁部と胴部との境はやや段を有する/最大径は口縁部と胴部中位のほぼ同位置	明褐色を基調	砂粒を多く、小石を散らかに含む	内面:口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面:口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後にヘラナデ/ヘラナデは工具の先端がささくれ状をなし、ハケナデであろう	住居中央の覆土中(床土15cm)	70%
第64図18	土師器 甕	(12.6)	(17.8)	-	長甕/口縁部は外反する/口縁部と胴部との境はスムーズ	暗黄褐色を基調	砂粒を多く、黄褐色粒子を含む	内面:口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面:口縁部は横ナデ、以下ヘラ削り後ヘラ削り後にていどいかにヘラナデ(スリップか?)	住居中央の覆土中(床土14cm)	口縁部へ胴部中位20%
第64図19	土師器 甕	(17.0)	(21.0)	-	長甕/口縁部は外反する/口縁部と胴部との境は段を有する/最大径は口縁部と胴部上位のほぼ同位置	淡黄褐色	砂粒をやや多く、茶褐色粒子を含む	内面:口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面:口縁部は横ナデ、以下ヘラ削り後ヘラ削り後にていどいかにヘラナデ(スリップか?)	カマド左横の床直	口縁部へ胴部中位30%
第64図20	土師器 甕	(18.4)	-	6.8	長甕/底部に木炭痕あり	暗褐色	砂粒を多く含む	内面:ヘラナデ/外面:ヘラ削り後にていどいかにヘラナデ(スリップか?)	北東コーナー柱穴の北側の覆土中と野蔵穴内	胴部中位へ底部70%
第64図21	土師器 甕	(24.3)	-	8.0	大型甕/底部は筒抜け式	暗黄褐色	砂粒・小石を多く含む	内面:ヘラナデ/外面:ヘラ削り後ヘラナデ	カマド左横の床直	胴部中位へ底部30%
第64図22	土師器 甕	(11.0)	-	9.3	大型甕/底部は筒抜け式	暗茶褐色	砂粒を多く含む	内面:ヘラナデ/外面:ヘラ削り後ヘラナデ	北東コーナーの覆土中(床土5cm)と入土部の覆土中(床土30cm)	胴部下半へ北側の覆土中(床土30cm)
第64図24	ミニチュア土器	1.4	(3.6)	2.4	環形/器形は箱形/口縁部は短く外傾する/平底/外面赤彩	黄白色	砂粒をほとんど含まない	内面:ヘラナデ/外面:縦方向に粗いヘラ磨き調整	南西コーナー柱穴のすぐ北側の覆土中(床土7cm)	50%

(単位: cm)

第33表 102号住居跡出土遺物一覧(2)

標図番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	遺存状態	出土位置
第65図1	石造脚部	黒曜石	9.34	6.88	2.70	0.20	欠損	
第65図2	石錐	チャート	31.97	18.09	10.44	3.20	完形	トレンチ3層
第65図3	楔形石器	チャート	30.93	24.65	10.44	7.60	完形	102H
第65図4	打製石斧	凝灰岩	98.86	47.29	19.13	117.70	完形	102H
第65図5	磨石	閃緑岩	94.40	97.70	29.92	346.20	欠損	102H-ベルト
第65図6	石皿	安山岩	102.18	67.48	48.44	409.70	欠損	

(単位: mm・g)

第34表 遺構外出土の石器一覧

1. 旧石器・縄文時代の石器 (第65図1～6、第34表)

1は石鏃、2は石錐、3は楔形石器、4は打製石斧、5は磨石、6は石皿である。

2. 縄文時代の土器 (第65・66図7～113、第35表)

縄文時代の土器は前期を中心に、草創期から後期にわたる幅広い時期の土器が出土している。

7は器厚5mmと薄手で、最大長3cmほどの小破片。3つの爪形文を確認出来る、草創期の爪形文土器の破片である。

8～10は早期前半の撚糸文系の土器片である。8の撚糸は1mm程と非常に細い。9の撚糸原体は2～3mm程と太い。10の原体は繊維の方向は明瞭だが、節は不明瞭である。

11～15は早期後半の条痕文系土器の破片である。11は繊維の混入が顕著だが、その他は繊維が少なく緻密である。14・15の条痕の肋は細い。

16～28は前期前半の羽状縄文系土器の破片である。16は半裁竹管による平行沈線文を施文する。黒浜式。27はループ文、28は組紐文を施文する。27のループ文は口唇部にも施文される。その他は縄文部分のみの破片である。

29～78は前期後半の諸磯式土器の破片である。29～31は櫛状工具による直線および波状の条線文を持つ破片。

32～48は半裁竹管による沈線文・条線文を地文とする破片。38・39は貼付文を持つ。

49～56は半裁竹管による爪形文・連続爪形文をもつ破片である。49～52は53～56に比べ細い竹管を使用している。

57～64は縄文と沈線文の組み合わせをもつ土器片。62に縄文は無いが61と同一個体と思われる。

65～68は縄文の土器片。69は撚糸文の土器。70～77は浮線文の土器片。78は無文の浅鉢。

79～87は前期後半の浮島式土器片である。いずれも貝殻の側縁を器面にあて、接した端部を支点に短い弧を描くように回転させたに似た形の文様を連続させるか、回転の支点を上下交互に入れ替え、波状の文様を描くかのどちらかの貝殻文を持つ。また、口唇部外面には棒状工具で刻みが施される。87は角棒状の工具で押し引き、連続した三角文を施文した後、表面を削り取って器面を平滑にしている。

88～91は中期前半の土器片。92～99は中期後半の土器片。99の列点は中心に爪跡の様な筋が見られ、指先によるものの可能性がある。

100～105は後期の粗製土器の破片である。

106～113には時期不明の土器片を一括した。

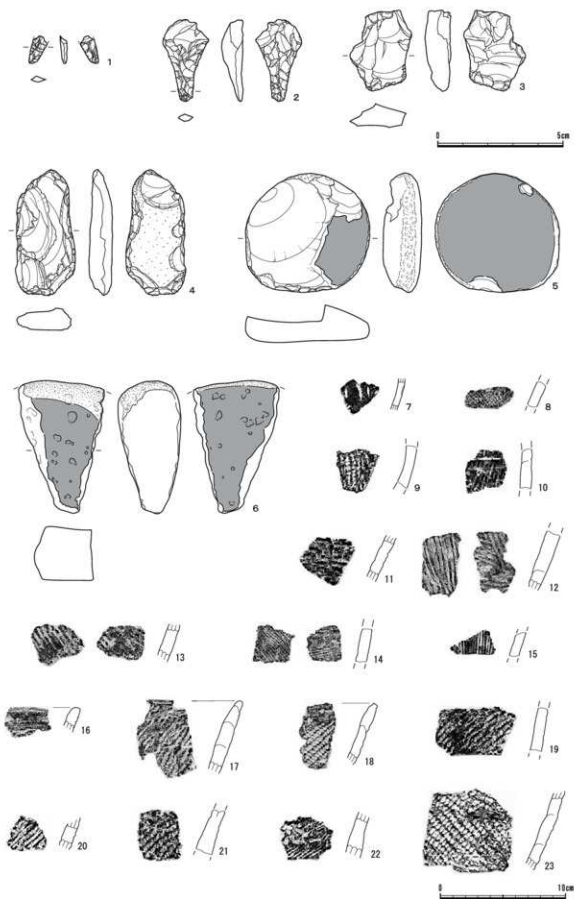
3. 弥生時代後期末葉から古墳時代前期の土器 (第69図114～123)

114～123は土器である。116は遺構外であるが、その他は102Hからの出土である。

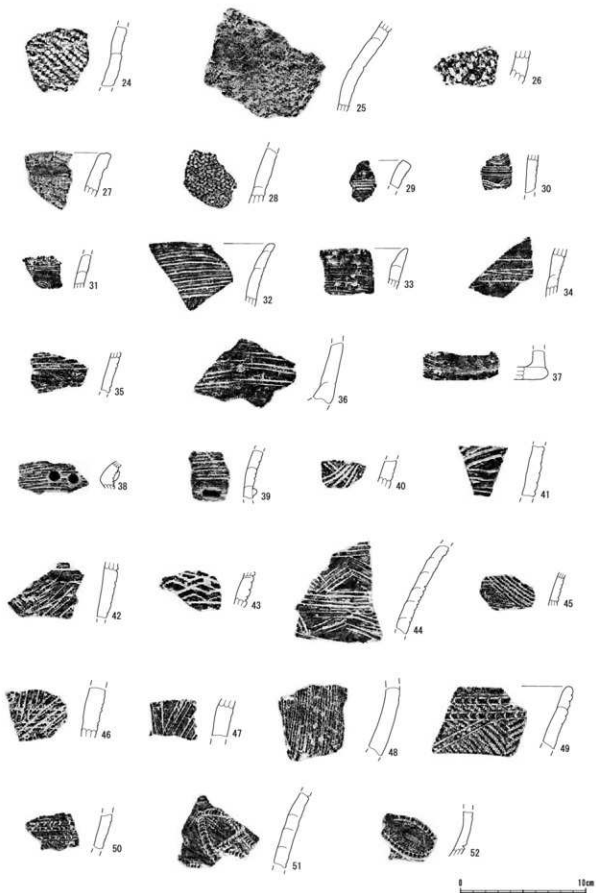
高坏形土器 (114～117)

114は現器高6.9cm。脚台部は脚柱部が短く、裾部は僅かに屈曲する。坏部内外面と脚台部外面は赤彩される。胎土の色調は淡黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。坏部内面と脚台部外面はヘラ磨き調整、脚台部内面は脚柱部がヘラナデ、裾部がハケ目調整が施される。坏部下半から脚台部の裾部にかけて40%を遺存する。

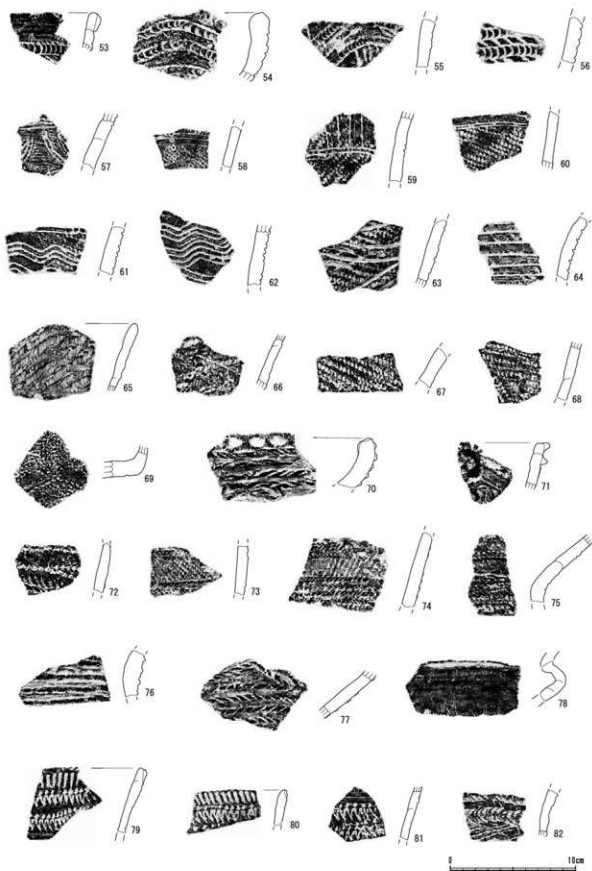
115は現器高4.8cm。脚台部の中央に径0.8cmの孔が穿孔する特異な器形である。坏部内外面と脚台部



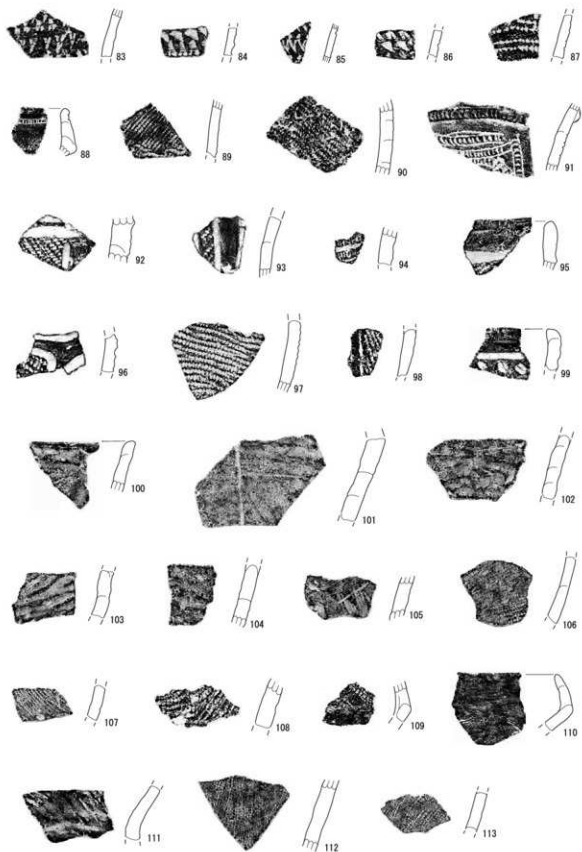
第65図 遺構外出土遺物1 (2/3・1/3)



第66図 遺構外出土遺物 2 (1/3)



第67図 遺構外出土遺物3 (1/3)



第68図 遺構外出土遺物4 (1/3)

外面は赤彩される。胎土の色調は暗橙色を呈し、胎土には茶褐色粒子・砂粒を含む。坏部内面と脚台部外面はヘラ磨き調整、脚台部内面はヘラナデが施される。脚台部の裾部を欠損する。

116・117は脚台部小破片である。116は色調が淡黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。内面はハケ目調整、外面はハケ目調整後ヘラ磨き調整が施される。117の外面は赤彩される。胎土の色調は暗橙色を呈し、胎土には砂粒を含む。内外面にヘラ磨き調整が施される。

壺形土器 (118~119)

118・119は二重口縁壺である。口縁部から肩部にかけての小破片で、同一個体と思われる。色調は淡黄褐色を呈し、胎土には砂粒・小石を多く含む。内外面に横方向の櫛歯状工具による調整が施される。

120は胴部小破片で、外面は赤彩される。胎土の色調は暗茶褐色を呈し、胎土には白色粒子・橙色粒子・砂粒を含む。内面はヘラナデ、外面はハケ目調整後ヘラ磨き調整が施される。

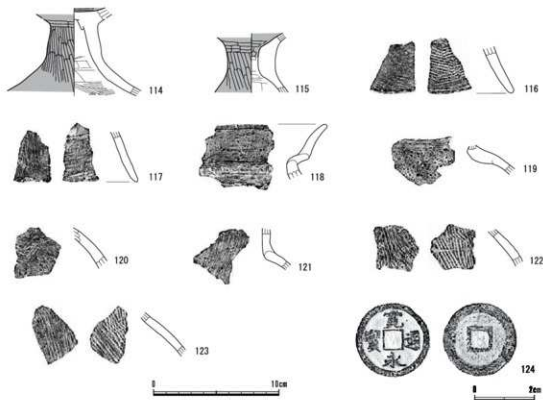
121は頸部から胴部上半にかけての小破片である。色調は淡黄褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む。内外面は粗いヘラ磨き調整が施される。

甕形土器 (122・123)

胴部小破片で、同一個体と思われる。色調は淡黄褐色を呈し、胎土には角閃石・砂粒を含む。内外面にハケ目調整が施される。

4. 近世の遺物 (第69図124)

寛永通宝である。外径2.5cm・方孔一辺0.5cm・重さ2.8g。完形品である。



第69図 遺構外出土遺物5 (1/3・4/5)

棟号番号	部位	文様・特徴など	色調	時期・型式	胎土混入物				出土位置	備考
					石	角	礫	砂		
第65図7	胴	爪形文	明褐	爪型文系	○		○		102H	城山遺跡第16地点で出土例1点あり
第65図8	胴	熊糸文L、原体は細い	褐	熊糸文系			○		遺構外	砂粒の混入が顕著
第65図9	胴	熊糸文L、原体は太い	明赤褐	熊糸文系			○	○	102H	細礫の混入が顕著
第65図10	胴	熊糸文R、筋は不明瞭	赤褐	熊糸文系	○	○	○		遺構外	
第65図11	胴	貝殻条痕文	暗褐	条痕文系			○	織・白	遺構外	
第65図12	胴	貝殻条痕文	明褐	条痕文系			○	織	遺構外	
第65図13	胴	貝殻条痕文	明褐	条痕文系			○	織	102H	砂粒の混入が顕著
第65図14	胴	貝殻条痕文	暗赤褐	条痕文系			○	織	102H	
第65図15	胴	貝殻条痕文	褐～黒褐	条痕文系?	○	○	○	織・褐	102H	
第65図16	口縁	半截竹管による平行沈線文	明褐	黒系			○	○	織	遺構外
第65図17	口縁	縄文L	褐	羽状縄文系					織	102H
第65図18	口縁	縄文L R	灰褐	羽状縄文系				織・白	102H	
第65図19	口縁	縄文L	赤褐	羽状縄文系		○	○	織・白	遺構外	
第65図20	胴	縄文L	暗褐	羽状縄文系				織	遺構外	
第65図21	胴	縄文L	暗褐～黒褐	羽状縄文系				織	遺構外	
第65図22	胴	縄文L	明褐	羽状縄文系				織	102H	
第65図23	胴	縄文R L	褐～黒褐	羽状縄文系			○	織・白	102H	
第66図24	胴	縄文R L	灰褐	羽状縄文系			○	織	遺構外	
第66図25	胴	縄文L R	褐～黒褐	羽状縄文系		○	○	織	遺構外	
第66図26	胴	縄文L R	灰褐	羽状縄文系		○	○	織	102H	
第66図27	口縁	口唇部と口縁部直下にルーブ文	褐	関山				織	遺構外	
第66図28	胴	組紐文	赤褐	関山				織	102H	
第66図29	口縁	櫛状工具による条線文	褐	諸磯a			○		遺構外	
第66図30	胴	櫛状工具による直線・波状の条線文	赤褐	諸磯a			○		遺構外	
第66図31	胴	櫛状工具による直線・波状の条線文	赤褐	諸磯a			○		102H	
第66図32	口縁	半截竹管による平行沈線文	褐	諸磯a	○	○	○		遺構外	
第66図33	口縁	半截竹管による平行沈線文	明褐	諸磯a			○	○	遺構外	
第66図34	胴	沈線文	褐	黒系	○	○	○		102H	
第66図35	胴	半截竹管による平行沈線文	赤褐	諸磯a～b			○		102H	
第66図36	胴	半截竹管による平行沈線文	赤褐	諸磯b		○	○		遺構外	
第66図37	底	半截竹管による平行沈線文	褐	諸磯b		○	○	○	102H	
第66図38	胴	半截竹管による条線文／ボタン状貼付文	褐	諸磯c			○		遺構外	
第66図39	胴	半截竹管による平行沈線文／棒状貼付文	暗褐	諸磯c	○		○	○	102H	内面赤彩か?
第66図40	胴	半截竹管による平行沈線を用いた曲線縄文	褐	諸磯a～b		○	○		102H	
第66図41	胴	半截竹管による平行沈線を用いた曲線縄文	褐	諸磯a～b		○	○		遺構外	
第66図42	胴	半截竹管による平行沈線文	褐	諸磯b		○	○		遺構外	
第66図43	胴	半截竹管による直線状あるいは連続した菱形文	褐	諸磯b			○	○	102H	
第66図44	胴	半截竹管による直線文と扇状文	黒褐色	諸磯b		○	○	○	102H	直線文と扇状文は上下交互／細礫の混入が顕著
第66図45	胴	半截竹管による沈線文	暗赤褐	諸磯b～c			○	○	102H	
第66図46	胴	半截竹管による沈線文	褐	諸磯b～c		○	○	○	遺構外	
第66図47	胴	半截竹管による矢羽状の沈線文	暗褐	諸磯c			○	○	102H	
第66図48	胴	半截竹管による条線文	赤褐	諸磯c		○	○		遺構外	
第66図49	口縁	縄文R L(単位羽状)／平行沈線／平行沈線間に半截竹管で刺突文を充填	褐	諸磯a				○	102H	
第66図50	胴	熊糸文L／平行沈線の間に爪形文を充填	赤褐	諸磯a			○	○	遺構外	

○石：石 角：角閃石・輝石 礫：粗礫 砂：砂粒 織：織物 白：白色粒子 褐：褐色粒子 片：片岩 金：金雲母 雲：雲母

第35表 遺構外出土の縄文土器一覧(1)

棟号番号	部位	文様・特徴など	色調	時期・型式	胎土混入物				出土位置	備考	
					石	角	砂	他			
第68図90	胴	縄文R L	赤褐	阿玉台	○	○	○	○	金	102H	
第68図91	胴	平行沈線間に連続爪形文を充填/隆帯上に連続爪形文	暗褐	勝坂				○			遺構外
第68図92	胴	縄文L R / 磨消懸垂文 / 太沈線	明褐	加曾利E II		○	○	○			102H
第68図93	胴	縄文L R / 磨消懸垂文 / 太沈線	褐	加曾利E II			○	○		雲	102H
第68図94	胴	条線文 / 沈線による連弧文	褐	連弧文系			○	○			102H
第68図95	口縁	口縁部無文帯 / 縄文L R / 微隆起線文	褐	加曾利E III ~ IV			○	○			102H
第68図96	胴	縄文R L / 太沈線	褐	加曾利E III ~ IV				○			102H
第68図97	胴	縄文L R	灰褐	加曾利E				○			102H
第68図98	胴	縄文L R / 沈線による懸垂文	明褐	加曾利E				○		褐	102H
第68図99	口縁	沈線で区画された口縁部無文帯の下に列点文	褐	加曾利E IV		○	○	○			遺構外
第68図100	口縁	口唇部外面に指頭圧痕文	灰褐	後期粗製土器				○		白	102H
第68図101	胴	工具による粗い削り痕	暗褐	後期粗製土器				○		白	遺構外 砂粒の混入が顕著
第68図102	胴	工具による粗い削り痕	暗褐	後期粗製土器				○		白	102H 砂粒の混入が顕著
第68図103	胴	工具による削り痕の上から、指頭による粗いナデ	褐	後期粗製土器				○			102H 砂粒の混入が顕著
第68図104	胴	工具による削り痕	灰褐	後期粗製土器				○			102H 砂粒の混入が顕著
第68図105	胴	工具による粗い削り痕	褐	後期粗製土器				○			遺構外 砂粒の混入が顕著 内面に炭化物付着
第68図106	胴	縄文L R	褐	中期前?	○	○	○				遺構外 砂粒の混入が顕著
第68図107	胴	縄文R L	褐	中期前?				○			遺構外 砂粒の混入が顕著
第68図108	胴	縄文R L	灰褐	後期?				○		白	102H
第68図109	胴	縄文R L	暗褐色	中期?				○			102H 浅鉢
第68図110	口縁	口縁部は内側に屈曲する / 無文	褐	前期?				○			遺構外 浅鉢?
第68図111	胴	縄文R R / 指頭押捺痕	褐	前期?	○	○	○				遺構外 砂粒の混入が顕著
第68図112	胴	縄文L R に R の附加条	赤褐~黒褐	前期?				○		白	102H 砂粒の混入が顕著
第68図113	胴	縄文L R に R の附加条	赤褐	前期?				○		白	102H 砂粒の混入が顕著

○石：石英 角：角閃石・輝石 障：磁障 砂：砂粒 織：織物 白：白色粒子 褐：褐色粒子 針：白色針状物 片：片岩 金：金雲母 雲：雲母

第35表 遺構外出土の縄文土器一覧(3)

第6章 調査のまとめ

本書は、城山遺跡第18・19・21・22地点の4地点分の発掘調査成果を収録したものである。ここでは今回検出された遺構・遺物について、時代毎に調査所見をまとめることにする。

第1節 縄文時代

(1) 縄文時代の遺構と遺物について

第18地点で検出された縄文時代の遺構は79号土坑1基のみで、覆土の観察から縄文時代と判断したが、さらに詳細な時期を判断する手がかりとなる遺物は出土しなかった。遺構外では前期を中心に早期後葉から後期前葉にわたる時期の土器が出土した。

第19地点では縄文時代の遺構は検出されなかった。遺物は後世の遺構覆土に混入するかたちで石器や土器片が少量出土した。

第21地点から検出された遺構は3号炉穴のみで、遺構に伴う遺物は出土していない。しかし、遺構外や後世の遺構覆土からは少量ながら草創期から後期にかけての土器片が出土しており、特に草創期の多縄文系の土器片は貴重な資料である。

第22地点では検出された遺構は諸磯期の集石1基だが、遺構外出土遺物は比較的多く出土しており、中には、市内2例目となる草創期の爪型文系土器片や、市内では出土例の少ない、前期末の浮島式、興津式などの土器片が出土した。

このように本報告書で扱った調査地点では遺構検出数は少なかったものの、遺物は稀少なものや、やや大型の土器片が出土し、良好な資料を得ることが出来た。

(2) 城山遺跡の縄文時代について

城山遺跡では昭和49年にA地点の発掘調査が行われて以来、学術調査3地点、開発による確認調査および発掘調査が61地点行われた。そのうち、現在までに縄文時代の遺構・遺物が報告されている調査地点は、本報告の4地点を含め21地点となった。遺跡全体からすれば、まだ未調査部分が多く、全容の解明には至らないが、調査地点は遺跡の広範に分布してきた。そこで、当遺跡の縄文時代について、遺構の検出状況と土器の出土傾向を簡単に記す(第36表)。

当遺跡は台地の北端部に位置し、南～南東部を除き低地、もしくは谷に面している。遺跡の標高はおおむね約12mだが、遺跡範囲南部では約13mとやや高く、北東端では傾斜地となっており7m近くまで下る。それに伴い遺構の確認面も第13・34地点で約12.5m～12.6m、第16・22地点では8～10m程となっている。

遺構は土坑が中心で36基が検出され報告されている。その他の遺構の検出数は少なく、住居跡が3軒、炉穴が4基、集石が2基、埋壺が1基報告されるにとどまる。

土坑については遺構に伴う遺物が出土せず、詳細な時期は不明なものが多い。分布は遺跡の西半にや

や多い傾向にあり、特に第42地点では調査面積が大きいこともあり21基とまとまった数が検出された。また、本稿執筆段階では未報告だが、民間の調査会社による委託調査が行われた第58地点で3基、第60地点で1基検出されている。

住居跡はA地点と第46地点で検出された2軒が前期末諸磯式期のもので、この時期の住居跡は、今のところ志木市内では城山遺跡でしか確認されていない。もう1軒は第11地点で検出された中期後葉のもので、住居内埋土として連弧文系の深鉢が出土している。

炉穴は多くが遺物を伴わないが、第42地点の4号炉穴では早期条痕文系の土器片がまとめて出土しており、遺物を伴う数少ない例である。また、第58地点で1基、第60地点では3基が検出されている。

集石は本報告の第22地点の2号集石では諸磯式土器の破片を伴い、前期末葉の時期と判断されている。また、第60地点でも3基検出されている。

埋土は住居に伴わないものは第4地点の1基のみ検出されている。この埋土は加曾利Eの磨消縄文をもつ深鉢の胴下半部を用いている。

このような遺構検出状況の中、遺物は破片ではあるものの草創期から晩期にかけて多岐にわたる時期・型式の土器が出土しているため、ここで時期を追ってみる。

草創期の土器は一般に出土量が少なく貴重な資料となる。城山遺跡においては、破片ではあるが、第16地点と本報告第22地点で爪型文系土器がそれぞれ1点、本報告の第21地点では多縄文系と思われる土器が3点出土している。16地点と22地点は調査地点も近く、今後、この周辺の調査で爪型文系土器が出土する可能性もある。

早期では、撚糸文系土器は第16・22・34・49・55地点で破片が僅かに出土している程度である。市内では田子山遺跡にやや多く出土する傾向にある。条痕文系の土器は多くの地点で出土し、出土量も比較的多いがいずれも破片で型式の判別できるものは少ない。その中で第3地点出土の下吉井式土器は比較的大型の破片で、良好な資料である。

前期の土器は遺跡全体に分布・出土している。羽状縄文系は関山式、黒浜式が主で花積下層式が僅かに出土する。目立つのは諸磯式・浮島式・興津式・十三菩提式の前期末の土器群で、これに加えて中期初頭五領ヶ台式期までの土器の出土量が多いことがこの遺跡の特徴になっている。とりわけ諸磯式の出土比率が高く、重量比で18地点では31%、22地点43%、42地点35%となっており、他で計量していない地点でも30%を超えると思われる比率で出土している。

志木市内でのこの時期の遺物は城山遺跡を中心に新邸遺跡、中野遺跡、中道遺跡に分布しており、他遺跡では少ないことから縄文前期末の生活中心が城山遺跡周辺にあったことが伺われる。

反面、一般に出土量の多い中期中葉から後葉の阿玉台式・勝坂式・加曾利E式などの遺物は多くない。この時期については西原大塚遺跡で集落跡が検出されており、当時の生活中心が西原大塚遺跡周辺にあったと考えられている。

後期の土器はあまり多くはないが、遺跡北半での出土がやや多い傾向にあり、称名寺式・堀之内式・加曾利B式・曾谷式・安行I式などが出土している。この北半への偏りは、遺物包含層の残りが良いことが原因の一つと考えられる。この中で、加曾利B式は遺跡北東部の第12・16地点でのみ出土している。ここでは包含層以外に表土中や中近世の遺構からも出土しているにもかかわらず、他の調査地点では同様の出土も無いことから、元々第12・16地点周辺に限られて分布している可能性がある。加曾利B式は、市内他遺跡でも今のところ西原大塚遺跡第65地点で土器片が数点報告されている程度で、城山遺跡近隣

調査地点	遺構	時期	出土土器型式など	備考	記載報告書	
A地点	第1号住居跡	前期後葉	諸磯a	住居の2/3は調査範囲外	志木市史「原始・古代編」	
	遺構外	前期 加曾利E B	関山/黒浜/諸磯/浮島	第2号住居跡(弥生)覆土、トレンチからの出土。		
第3地点	包含層	早期	野島/鶴が島台/茅山上層/下吉井	埋藏遺物は条痕文系が多い。特に下吉井式は良好な破片資料。次いで中期前半・前期後葉。	志木市の文化財第11集	
		前期	関山/諸磯b			
		中期 後期	五領ヶ台/勝坂/阿玉台/加曾利E 安行I			
第4地点	1号埋蔵	中期後葉	加曾利E B～III	埋蔵は深鉢の胴下半部。磨り消し懸文。単筋斜縄文。	志木市の文化財第13集	
	1 F P	詳細不明	遺物無し			
	2 F P	詳細不明	遺物無し			
第11地点	1 J	中期後葉	連弧文系	遺構の半分は調査区外。連弧文系の埋蔵が出土。埋蔵は深鉢上半部。五領ヶ台・阿玉台・磨り消しの無い加曾利Eの土器片も出土。	志木市の文化財第17集	
		67D	中期	遺物は中期の土器。		小片だったため図示なし。
		69D	中期後半	条痕文系・竹管文系・中期後半の土器。		小片だったため図示なし。
		71D	前期後半	条痕文系・竹管文系土器。		小片だったため図示なし。
第12地点	包含層	早期	下吉井	埋藏遺物は加曾利Bが多い。次いで前期後半。	志木市の文化財第24集	
		前期	黒浜/諸磯/十三菩提			
		中期	五領ヶ台/新道/加曾利E			
		後期	堀之内/加曾利B/安行I			
		晩期	安行I			
第15地点	遺構外	早期	条痕文系	遺物は少なく、小破片。	志木市の文化財第34集	
		前期	花種下層/黒浜/関山/諸磯/浮島・興津			
		中期	五領ヶ台/加曾利E			
第16地点	包含層	1 S	詳細不明	包含層出土とされるが中近世の溝跡からの出土が多い。 諸磯式を中心に前期の遺物が多いが、堀之内式土器の比較的大型の破片14点出土器片5点。馬高、曾利、加曾利E、加曾利Bなどバラエティに富む。草創期爪型文土器は市内初出。	志木市の文化財第34集	
		草創期	爪形文系			
		早期	黒浜文系/条痕文系/鶴が島台			
		前期	花種下層/関山/黒浜/諸磯/十三菩提			
		中期	五領ヶ台/阿玉台・脇沢/勝坂/馬高/曾利/加曾利E/連弧文系			
第18地点	遺構外	後期	称名寺/堀之内/加曾利B/曾谷	諸磯・浮島を中心(31%)に羽状縄文系(23%)も割合が高い。後期のものは比較的大きな破片だったため、掲載の割合が高い。多くが後世の遺構への混入品。	本報告 志木市の文化財第40集	
		79D	詳細不明			遺物無し
		早期	条痕文系			
		前期	花種下層/黒浜/関山/諸磯/浮島			
		中期	五領ヶ台/勝坂/加曾利E			
第19地点	遺構外	後期	称名寺/堀之内/後期粗製	殆どが古墳時代の住居跡の覆土に混入する形で出土した。 出土量は少なく、小破片で詳細の不明なものが多いが、中心となるのは諸磯。	本報告 志木市の文化財第40集	
		早期	条痕文			
		前期	羽状縄文系/諸磯			
		中期	中期粗道/加曾利E			
第21地点	遺構外	3 F P	詳細不明	遺物は少ないが草創期の多磯文系土器片が出土。	本報告 志木市の文化財第40集	
		草創期	多磯文系			
		早期	下吉井			
		前期	黒浜/諸磯			
		中期	五領ヶ台/阿玉台/加曾利E			
第22地点	遺構外	後期	堀之内	浅鉢	本報告 志木市の文化財第40集	
		前期後葉	諸磯?			
		草創期	爪型文系			
		早期	黒浜文系/条痕文系			
		前期	黒浜/関山/諸磯/浮島/興津			
第29地点	遺構外	中期	五領ヶ台/阿玉台/勝坂/加曾利E	遺物は少量、小破片。	志木市の文化財第25集	
		後期	称名寺/後期粗製			
		早期	条痕文系			
		前期	黒浜/諸磯			
第32地点	遺構外	中期	加曾利E	遺物は少量、小破片。	志木市の文化財第25集	
		後期	称名寺/堀之内			
		早期	条痕文			
		前期	諸磯			
		中期	加曾利E	遺物は少量、小破片。	志木市の文化財第25集	
		後期	縄文後期			

第36表 城山遺跡の縄文遺構・土器検出地点一覧(1)

調査地点	遺構	時期	出土土器型式など	備考	記載報告書	
第34地点	遺構外	早期	稲荷台/条痕文系			
		前期	黒山/諸磯	諸磯式を中心に出土しているが、遺物は少量、小破片。	志木市の文化財第27集	
		中期	加曾利E			
第35地点	遺構外	早期	条痕文系			
		前期	黒山/諸磯	諸磯・加曾利E・称名寺が多い。破片は加曾利Eが大きい。	志木市の文化財第27集	
		中期	五領ヶ台~阿玉台/加曾利E	多くが後世の遺構への流れ込み。		
第42地点		162 D	詳細不明	遺物無し		
		195 D	詳細不明	遺物無し		
		199 D	詳細不明	遺物無し		
		251 D	前期末	諸磯c	条痕文系の土器片も混入	
		252 D	詳細不明	遺物無し		
		266 D	詳細不明	遺物無し		
		267 D	詳細不明	遺物無し		
		284 D	詳細不明	遺物無し		
		286 D	前期末	諸磯c		
		287 D	早期後葉	条痕文系		
		290 D	詳細不明	遺物無し		
		291 D	前期?	縄文前期?		
		314 D	前期末	諸磯c		
		315 D	詳細不明		砂岩の雑器が出土	志木市遺跡調査会調査報告第10集
		317 D	詳細不明	遺物無し		
		320 D	詳細不明	遺物無し		
		321 D	詳細不明	遺物無し		
		326 D	詳細不明	遺物無し		
		327 D	詳細不明	遺物無し	2 基重複	
		328 D	詳細不明	遺物無し	2 基重複	
		329 D	詳細不明	遺物無し		
4 F P	早期後半	条痕文系	燃焼部2箇所土器片はやや大型			
第46地点	遺構外	早期	条痕文系			
		前期	関山/諸磯/十三菩提	諸磯を中心(35.1%)に出土。大型の破片は無い。	志木市の文化財第38集	
		前期末~中期初	不明	三角縁刻文の土器も数点出土。		
		中期	五領ヶ台/阿玉台/勝坂?/加曾利E	次いで前期末~中期中(24.4%)		
		後期	称名寺/堀之内/粗製土器			
		2 J	前期末	条痕文系/諸磯/十三菩提/前期末~中期初頭/阿玉台	諸磯c?の土版一点出土。	
第48地点	遺構外	355 D	詳細不明	遺物無し		
		早期	条痕文系			
		前期	諸磯b/十三菩提?			
		中期	五領ヶ台/阿玉台/加曾利E/型式不明土器	諸磯(b・c)式、五領ヶ台式が中心。		
		後期	堀之内?			
第49地点	遺構外	366 D	詳細不明	遺物無し		
		早期	黒山文系/条痕文系		志木市の文化財第39集	
		前期	羽伏縄文系/関山/諸磯/浮島	前期の土器を中心に出土。		
第55地点	遺構外	357 D	詳細不明	遺物無し		
		359 D	早期後葉	条痕文系	土坑は台形断面。	
		早期	稲荷台?/条痕文系		志木市の文化財第38集	
第57地点	遺構外	前期	羽伏縄文系/黒山/諸磯	諸磯b・cが中心。包含層は無く、後世の遺構への流れ込み遺物が殆ど。		
		中期	阿玉台式?/加曾利E/型式不明土器			
		後期	粗製土器			
第61地点	遺構外	375 D	前中期?	前期後葉か?		
		376 D	早期後葉	条痕文系		
		377 D	早期後葉	条痕文系		
第61地点	遺構外	早期	条痕文系		志木市の文化財第39集	
		前期	羽伏縄文系/諸磯	時期は広範だが、前期の遺物中心に出土。		
		中期	五領ヶ台/阿玉台/加曾利E			
		後期	粗製土器/型式不明土器			
		600 D	詳細不明	遺物無し		
第61地点	遺構外	620 D	中期前半か?	金雲母を含む土器小破片。	小片だったため図示なし。	
		621 D	中期か?	無文の土器小破片。	小片だったため図示なし。	
		622 D	詳細不明	遺物無し		志木市遺跡調査会調査報告第16集
		早期	条痕文系			
第61地点	遺構外	前期	羽伏縄文系/花積下層?/諸磯			
		中期	五領ヶ台/阿玉台/型式不明	五領ヶ台・阿玉台が多め。		
		中期後~後期初	加曾利E~後期初頭			

第36表 城山遺跡の縄文遺構・土器検出地点一覧(2)

では見られないが、今後調査が進められるにつれて出土例が増加すると思われる。

晩期の土器は安行3 a 式の破片が第12地点で報告されているのみである。

このように多くの時期にわたる遺物が出土する城山遺跡は、市内の縄文時代それぞれの時期と遺跡の関係を考える上で重要な位置を占める遺跡と言える。

第2節 弥生時代後期

(1) 弥生時代後期の遺構と遺物について

今回の報告では、第18地点から3号住居跡(3 Y)が1軒検出されている。

3 Yは東側が調査区域外であり、さらに古墳時代後期の92Hと中世以降の18M・20Mに切られており、遺存状態は決して良好とは言えない。平面形は隅丸方形を呈するものと思われる。規模は5.70×不明で、深さは残りの良い箇所で43cmを測る。炬は住居中央に粘土板炬が採用され、粘土の厚さは1.5cmで、下端は被熱により赤化している。

出土遺物は、すべて土器で、壺・高坏・甕形土器(以下「形土器」は省略)に分類される(第7図)。

ここでは、特に壺で文様をもつ2・9・10と11・12を見てみることにする。2はやや細頸タイプであり、文様は胴部上半に施文される。下半は不明であるが、2条の自縄結節文とLR縄文が施文されている。9も2段の羽状縄文を上下3条の自縄結節文で区画する文様である。10は従来で言う「久々原式」の特徴であり、縄文を山形沈線文で区画する文様をもつ。以上のように2・9・10の土器は、千葉県小浜遺跡群(小沢他 1989)・下向山遺跡(黒沢 1994)・請西遺跡郡(岡野 1994)などの君津都市を中心に出土する土器に類似することから、大まかに東京湾沿岸部の特徴をもつ土器と考えられる。

また、11・12は胴部上半に櫛描文が施文される土器で、11は11本一単位による櫛描波状文、12は簾状文が施文されている。これらは、櫛描文が採用されることから、尾張・三河地域の特徴を備えていると思われる。

なお、口縁形態がわかる5・6は、いずれも幅狭の複合口縁を呈し、赤彩が施されることから、前述した自縄結節文が施文される土器と同じように東京湾沿岸部の特徴をもつ土器と言える。

以上、3 Y出土土器の時期は、市内では西原大塚遺跡第37地点169 Y(尾形・深井 2000)、田子山遺跡第31地点21 Y(尾形 1997・1998)とはほぼ同時期の後期中葉に比定される。

第3節 古墳時代後期

(1) 古墳時代後期の遺構と遺物について

古墳時代後期の遺構としては、住居跡が検出されている。これを各地点毎に見ると、第18地点で7軒(88~91・93~95 H)、第19地点で5軒(96~100 H)、第21地点で2軒(64・100 H)、第22地点で1軒(102 H)が検出され、総数では15軒である。

ここでは、各地点毎に住居跡出土の土器について簡単に触れることにしたい。

1. 第18地点

88号住居跡

土師器甕・甗、須恵器大甕が出土している（第9・10図）。土師器甕は1～5が長甕で、6が丸甕である。特に、長甕は①最大径が胴部上半に最大径をもつタイプ（1・2）と②口縁部と胴部中位のほぼ同じ位置に最大径をもつタイプ（3・4）、③口縁部と胴部上半のほぼ同じ位置に最大径を測るタイプ（5）に分類することができる。時間軸上では、基本的には②→①・③へと変化する傾向があると思われる。時期は口縁部に最大径をもつタイプが共伴していないことから、大まかに7世紀中葉の様相であろう。また、須恵器大甕（8）は、後述するが、末野製品の可能性が高く注目される。

89号住居跡

土師器環・鉢・甕が1点ずつ出土している（第12図）。土師器環（1）は口縁部と底部との境に段を有するタイプであるが、6世紀代から継続する広域流通品ではない。土師器鉢（2）は注口と思われる箇所が見られることから、注口土器の可能性はある。土師器甕（3）は口縁部と胴部上半のほぼ同じ位置に最大径をもつタイプである。これらの土器は当市では、7世紀以降に一般的に出土する無彩系の在地系土師器と考えられる（尾形 2001・2005・2006）。時期は7世紀中葉であろう。

90号住居跡

土師器環・鉢・壺・甕・甗が出土している（第14・15図）。この中で、土師器環以外で赤色系土器の壺（2・4・6～7）と甗（9・10）が目につくが、実際は赤色塗装の痕跡が判別しづらいため、可能性があるということに留めてもらいたい。これらの土器は、内面にも赤色塗装される可能性があると思われる。土師器環は口径17.3cmの黒色系の大型有段環である。土師器甕は「く」の字口縁がやや間延びし、やや長胴化の兆しがあるもので、内外面にはハケ目調整が施されている。土師器甗は3点すべて（9～11）が有段口縁を呈するタイプである。

以上、90H出土土器は、大まかに6世紀前葉と思われる。

91号住居跡

土師器環・甕・甗が出土している（第17・18図）。

土師器環の1は推定口径13.8cmのいわゆる比企型環と呼ばれるもので、内面口唇部に沈線がまわることから、定型化タイプである（尾形 1999・2000a）。さらに胎土が暗赤褐色を呈することから、入間系土師器と考えられる（尾形 2008）。2は無彩系の有段環の小破片で、在地系土師器と考えられる。

土師器甕は3～8が長甕で、9～11は丸甕である。長甕は胴部上半が張るタイプではなく、口縁部と胴部中位に最大径をもつタイプである。

土師器甗は底部端部を打ち欠いた状況であるため、焼成後の成形と思われる。

以上、91H出土土器は1を除き在地系土師器である様相の中で、長甕の口縁部と胴部中位に最大径をもつ特徴から、大まかに7世紀中葉と考えられ、やや88・89Hより古い様相であろう。

93号住居跡

土師器環・甕・甗が出土している（第22図）。

土師器環の1～3は口径11.5cmのいわゆる比企型環と呼ばれるもので、いずれも内面口唇部に沈線がまわり、口縁部と底部に弱い段をもつことから、水口由紀子氏の「B系列」（水口 1989）、富田和夫氏

の「純比企型横做环」(富田 2007)に相当する。これらは胎土が暗赤褐色を基調とすることから、入間系土師器と考えられる。

土師器甕は4~6が長甕で、7・8は丸甕である。長甕は6が直線的で胴部に張りがないタイプであるが、4・5は口縁部と胴部中位~上半に最大径をもつタイプである。

以上、93H出土土器は特に1~3のいわゆる比企型環が口径11.5cmと小型傾向であることと長甕の口縁部と胴部中位~上半に最大径をもつ特徴から、おおまかに7世紀中葉と考えられる。

94号住居跡

土師器環が1点出土している(第23図)。この環はいわゆる比企型環で、口径14.9cmを測る大型タイプである。胎土が暗赤褐色を呈することから、入間系土師器と考えられる。時期は6世紀中葉である。

95号住居跡

土師器環・甕が出土している(第25図)。

土師器環は1・2ともに内外面黒色処理が施される有段環である。1の内面口唇部には1本の沈線がまわり、有段はしっかり作られている。2の内面には放射状の暗文が施文される。

土師器甕は3がやや「コ」の字口縁を呈し、内外面にハケ目調整が施される。4・5から胴部が球銅状であることがわかる。

以上、95H出土土器は、黒色有段環の有段が崩れていない点やハケ目調整を残し、「コ」の字口縁を呈し、胴部が長胴傾向ではない土師器甕の特徴などから、おおまかに6世紀前葉と考えられる(尾形 2000b・2001)。

2. 第19地点

96・97号住居跡

土師器環・高環・壺・甕・甗が出土している(第40図)。本遺構は、所見でも触れたが、調査の際に2軒の住居跡として扱われたが、主軸方向や主柱穴の配列を見ると、同時期1軒の住居である可能性がある。出土土器の時代観には、おおそ5世紀後葉・6世紀中葉・7世紀中葉と3時期ほどのばらつきが指摘できる。ここでは、2・4・7~12の土器を基本に安定した時期の遺物として捉え、6世紀中葉に比定した。2はいわゆる小針型環である。7~9の土師器甕は8・9がやや長胴化の傾向を示すが、「く」の口縁を基本としていることから、6世紀中葉の特徴であろう。

100号住居跡

土師器環・埴・甕・甗が出土している(第44図)。本遺構の時期は、所見でも触れたが、基本的に5世紀後葉・6世紀中葉・7世紀中葉と96・97Hと同じように3時期ほどのばらつきが指摘できる。

土師器環の1・2はいわゆる比企型環で、1は口縁部と底部に弱い段をもつ有段タイプであり、口径11.8cmを測り、やや小型化傾向にあることから、7世紀中葉に比定できる。2は口径14.7cmを測る大型タイプであることから、6世紀中葉に比定できる。

土師器埴は算盤玉状の体部をもち、口頸部は逆「ハ」の字状に開くタイプである。5世紀後葉の特徴であろう。

土師器甕は胴部中位に最大径をもつ器厚が分厚い土器で、口縁部はやや複合口縁の名残があり、ややくびれている。6世紀中葉に比定できる。

以上、100H出土土器は、時期にややばらつきがあるが、住居の時期としては、2・4・5を基本に

6世紀中葉とした。

3. 第21地点

64号住居跡

須恵器蓋・環、土師器環が出土している（第50図）。この住居跡は第47図でもわかるように北側の第3地点において検出された64Hと同一住居跡である（佐々木 1987）。

今回出土した土器については、1は湖西製品と考えられる。2は平底の箱形を呈する無台坏身の可能性がある。3の土師器環は推定口径18.6cmを測り、口縁部と底部の境には段を有する大型有段坏である。

以上、64H出土土器は、1・2から時期を設定するのは難しいが、3の口径がまだ小型化傾向にないことから、7世紀前葉に比定される。

101号住居跡

須恵器環蓋、土師器環・甕が出土している（第52図）。

須恵器環蓋は、完形品で湖西製品と考えられる。口径11.0cmを測ることから、湖西編年の第Ⅲ期第1～2小期の合子状蓋环法量表の範囲に含まれるであろう（後藤 1989）。

土師器環の2は推定口径9.8cmの最小化を遂げた赤色有段坏である。

以上、101H出土土器は、1・2の小型品である特徴から、7世紀後葉に比定される。

4. 第22地点

102号住居跡

1軒から多くの土器が出土している。器種は土師器環・鉢・甕・甗である（第62～64図）。

土師器環は1がいわゆる比企型環で、口径は推定口径12.0cmとやや小型傾向にある。胎土が暗赤褐色を呈することから、入間系土師器と考えられる。時期は7世紀中葉であろう。2～6は無彩系の在地系土師器で、器種のバラエティーが多いと言える。

土師器甕は、8～14が丸甕、15～20が長甕である。特に、長甕の特徴として、明確に最大径を口縁部にもつタイプが見られないことから、7世紀中葉に比定される。

以上、102H出土土器は、7世紀中葉に比定される。

（2）88H出土の須恵器甕について

今回、88号住居跡（88H）から出土した須恵器大甕（第10図8）については、胎土中に僅かであるが片岩を含むことから、埼玉県寄居町の末野製品と考えられる。

これまで、志木市における古墳時代における須恵器の認識として、5・6世紀代は陶器製品が単発的に小破片で出土し、7世紀に入り、湖製品が主体を成す傾向にあった。つまり、志木市での末野製品は奈良・平安時代を通して出土例がなかったと言える。

末野窯跡群では、平成5年度に埼玉県埋蔵文化財事業団により発掘調査が実施されたF区から、古墳時代後期の窯跡が3基（第1～3号窯跡）検出された。特に、第3号窯跡では、埼玉古墳群の中の山古墳の埴輪を生産していたことが明らかになり、古墳築造の被葬者と埴輪生産の関連を解明するに重要な発見につながった。

『末野遺跡I』では、福田 聖氏が、古墳時代の須恵器の様相についてまとめている（福田 1998）

が、この中で、頸部に波状文をもつものが、量的には最も普遍的に見られるものとしている。頸部の文様構成については、口縁部が長いタイプは、「3区画2段」が多いとしており、その場合、原則として最下段には文様が施文されないとしている。これを参考にすると、今回の88H出土の須恵器大甕は、口縁部が長いタイプであり、頸部には波状文が施文される。そして、文様構成は、「3区画2段」で、最下段には文様が施文されていないことから、末野製品の特徴に符号するものと考えられる。

以上、これまで志木市では末野製品が出土しなかったことを考えると、今回の須恵器大甕は、当時の歴史背景を通じて、古墳時代の土器という単なる製品の流通問題ではなく、社会的背景における首長層という上位階層の問題に発展する可能性があり、貴重な発見につながったものと言えるであろう。

第4節 平安時代

(1) 平安時代の遺構と遺物について

平安時代の遺構は、城山遺跡第18地点で住居跡1軒(92H)が検出されている。本住居跡は、南側を20Mで切れ、東側が調査区外であるため、住居構造の詳細を知ることができなかった。

出土遺物(第20図)は、すべて土器で、須恵器蓋・坏、土師器坏に分類できる。

須恵器蓋の1は器高2.8cm・口径12.2cmを測る。この土器は胎土に白色針状物質を含むことから、鳩山製品と考えられる。鳩山町広町B窯跡出土の須恵器編年(渡辺 1990)を参考にすると、端部が水平化する弓張形で、特に天井頂部に回転ヘラ削り再調整が施される特徴から、おおよそ広町BⅦ期(9世紀後葉)に比定できるであろう。

須恵器坏は2が推定口径11.4cm・底径6.2cm、3が推定口径11.5cm・推定底径5.7cmを測り、それぞれ底部は未調整で回転糸切り痕が残る。これらは、胎土に白色砂粒(長石類)を含むことから、東金子窯製品と考えられる。口径・底径比では、2の底径は口径の1/2を上回り、3の底径はほぼ1/2である。器形的には浅身タイプで、口縁部がやや外反する兆しがあることから、鳩山町広町B窯跡出土の須恵器編年を参考にすると、広町BⅦ期(9世紀中葉～後葉)に比定できる。

土師器坏の4は南武蔵型坏と思われる。志木市では初めての出土で、その特徴はロクロ成形と外面に指頭押捺痕をもち、底部は手持ちヘラ削りあるいは糸切りが施される。

以上、本住居跡出土土器は、特に須恵器蓋・坏から、おおよそ9世紀中葉～後葉に比定できる。

第5節 中世以降

(1) 中世以降の遺構について

今回の第18地点の調査では、中・近世の溝跡6本(16～21M)、土坑6基(75～78・80・81D)が検出された。特に、溝跡については、『館村旧記』にある「柏之城落城後の屋敷割の図」に示された堀跡に相当する可能性があり、貴重な発見につながったと言えよう。

ここでは、現在までに確認された柏の城関連と思われる遺構をまとめることにする。

①三の丸大堀跡

昭和55（1980）年の市史編さん室による調査、昭和60（1985）年の志木市遺跡調査会による第1地点、平成13（2001）年の志木市遺跡調査会による第42地点から確認されている規模は、市史編さん室の調査から、上幅は推定で12.2m、下幅は1.6m、深さは地表から4.7mである。

②本丸大堀

平成4年（1992）年の志木市遺跡調査会による第15地点の12号溝跡が相当する。規模は、上幅約9m、下幅約1m、深さは地表から3.7m前後である。

③二の丸大堀

本報告の第18地点の検出された溝跡のうち17Mは二の丸関連の大堀の可能性がある。また、16・18・19Mは屈曲部をもつことから、二の丸入口に関連するものと思われる。17Mの規模は、上幅4.28m・下幅1.22m・深さ2.10m前後、地表からの深さは約2.8mを測る。

④その他

『館村旧記』の「柏之城落城後の屋敷割の図」に示されていないが、以下の遺構についても柏の城関連のものと考えられる。

昭和49（1974）年の市史編さん室によるA地点の調査により、本丸跡内を南北に走向する深さ1.1m（確認面から）・上幅1.8m・下幅0.9mの溝跡1本が検出されている。

昭和57（1982）年の市史編さん室によるB地点の調査でも、本丸跡内を南北に走向すると思われる溝状遺構が検出されているが、詳細不明である。

平成2（1990）年の第11地点で、中・近世の所産と思われる溝跡4本・井戸跡1基・地下式坑2基が検出されている。

平成4（1992）年の第16地点でも14・15Mの2本の溝跡が検出された。第16地点は、『館村旧記』の「柏之城落城後の屋敷割の図」で二の丸大堀の東側の「清左衛門躰、伊藤縫之助、忠右衛門倅、由左衛門倅、宇左衛門倅…」と書かれた屋敷部分に相当する。

本報告の第18地点の調査で検出された溝跡のうち20・21Mがある。

平成6（1994）年、志木市遺跡調査会で実施された第26地点でも二の丸跡内から東西方向に走向する中規模の溝跡1本が検出されている。

[引用・参考文献]

- 赤熊浩一 1999『未野遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第207集 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
 安藤広道・坂本 彰他 1996『縄文時代草創期 資料集』横浜市歴史博物館 (財)横浜市ふるさと歴史財団
 尾形則敏・深井恵子 2000『志木市遺跡群10』志木市の文化財第28集 埼玉県志木市教育委員会
 尾形則敏 1997『志木市の弥生時代』第一回 企画展 あさかの弥生文化—鉄斧とその時代— 朝霞市博物館
 1998『あらかわ』創刊号 あらかわ考古談話会
 1999「いわゆる「比企型環」の編年基準の要点—小地域を対象とした編年の確立に向けて—」『あらかわ』第2号 あらかわ考古談話会
 2000a「土師器の地域性と比企型環の特徴—埼玉県における比企型環を中心として—」『第6回 企画展 川と人々のくらし』朝霞市博物館
 2000b「志木市における古墳時代の土師器の編年（1）—5世紀から7世紀の埴形土器の変遷—」『あらかわ』第3号

第6章 調査のまとめ

あらかわ考古談話会

- 2001「志木市における古墳時代の土師器の編年(2) - 5世紀から7世紀の甗・甗形土器の変遷 -」『あらかわ』第4号 あらかわ考古談話会
- 2005「第4章 調査のまとめ 第2節 148号住居跡出土の土師器の胎土分析及考古学的な検証」『城山遺跡第42地点』志木市遺跡調査会調査報告第10集 埼玉県志木市遺跡調査会
- 2006「7世紀における「在地系土師器」の出現と歴史的意義 - 武蔵野台地北西部の無彩系・黒色系土師器の一事例 -」『埼玉の考古学Ⅱ』埼玉考古学会設立50周年記念論文集
- 2008「古墳時代後期の土師器研究の再認識 - (仮称)「人間系土師器」の実態と生産地推定を例として -」『埼玉考古』第43号 埼玉考古学会
- 岡野祐二 1994『諸西遺跡群Ⅲ 鹿島塚A遺跡』財団法人 君津都市文化財センター発掘調査報告書第84集
- 小沢 洋他 1989『小浜遺跡群V マミヤク遺跡』財団法人 君津都市文化財センター発掘調査報告書第44集
- 金子直行・宮井英一他 1986『埼玉考古 - 埼玉考古学会30周年記念 - シンポジウム資料』埼玉考古学会
- 黒沢 聡 1994『下向山遺跡』財団法人 君津都市文化財センター発掘調査報告書第94集
- 後藤健一 1989「湖西古宮群の須恵器と窯構造」『静岡県史の富業遺跡』静岡県教育委員会
- 佐々木保俊 1987『城山遺跡長勝院地点 発掘調査報告書』埼玉県志木市教育委員会 志木市遺跡調査会 志木ロータリークラブ
- 高崎直成 2007「埼玉県内における近世以降の地下室について」『あらかわ』第10号 あらかわ考古談話会
- 早坂寛人 2004『水子貝塚資料館 平成15年企画展 みずほの台地の弥生のくらし - 武蔵野台地北部の弥生文化 -』
- 福田 聖 1998『未野遺跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第196集 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 宮井英一・木戸春夫 1985『大林Ⅰ・Ⅱ 宮林 下南原』埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第50集 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 水口由紀子 1989「いわゆる“比企型甗”の再検討」『東京考古』第7号
- 渡辺 一他 1990『鳩山窯跡群Ⅱ』鳩山窯跡群発掘調査報告書第2冊 鳩山窯跡群遺跡調査会 鳩山町教育委員会

第7章 城山遺跡出土の板碑紹介（補遺）

ここに紹介する資料は、平成2（1990）年に柏町3丁目の（個人）から市に寄贈を受けた板碑2点である。資料は、所有者により保管されていたもので、詳細な経緯については、当時の記録が残されていないため不明である。

資料1（第70図）

残存高45.5cm・幅23.3cm・厚さ2.8cm・重さ5.5gである。頭部の一部と胴部下半は欠損する。頭部には二条線が刻まれ、主尊種子は蓮座に座す阿彌陀如来像（正体キリク）で、碑面全体に磨耗が認められる。種子の形状から南北朝期の所産であろう。銘文は「广」と思われる文字の一部が確認されるが詳細は不明である。

資料2（第70図）

残存高23.8cm・幅12.7cm・厚さ3.0cm・重さ1.6gである。頭部の一部が残る。二条線の上部に刺付線が、下方に枠線が残る。枠線内に天蓋の一部が刻まれている。天蓋の形状から南北朝期の所産であろう。



資料1



資料2



第70図 城山遺跡出土の板碑（1/6）

報告書抄録

ふりがな	まいごうぶんかざいちょうさほうこくしょ 4							
書名	埋蔵文化財調査報告書 4							
副書名								
シリーズ名	志木市の文化財	巻次	第40集					
編著者	尾形則敏 深井恵子 青木 修							
編集機関	埼玉県志木市教育委員会							
所在地	〒353-0002 埼玉県志木市中宗園1丁目1番1号 TEL 048 (473) 1111							
発行年月日	平成21 (2009) 年 3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 (°'")	東経 (°'")	調査期間	調査面積(㎡) ()発掘調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
城山遺跡 (第18地点)	志木市柏町3丁目 2608-1、2609他	11228	003	35° 49' 57"	139° 34' 10"	19930603 ～ 19930829	115.45	雨水流出 抑制工事
城山遺跡 (第19地点)	志木市柏町3丁目 2630-4 他	11228	003	35° 49' 58"	139° 34' 7"	19931101 ～ 19931116	361.93	共同住宅建設
城山遺跡 (第21地点)	志木市柏町3丁目 1138-1	11228	003	35° 49' 53"	139° 34' 7"	19940218 ～ 19940217	48.00	桜の土壌改良
城山遺跡 (第22地点)	志木市柏町3丁目 2602-1の一部	11228	003	35° 50' 00"	139° 34' 14"	19940309 ～ 19940331	498.13 (60.00)	共同住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
城山遺跡 (第18地点)	集落	縄文時代 弥生時代後期末葉 ～古墳時代初期 古墳時代後期 平安時代 中世以降	土坑 住居跡	1基 1軒	土器 土器			古墳時代後期の88Hから 出土した須恵器大甕は未 野製品と考えられ、志木 市では、奈良・平安時代 を通して初の出土となる。 中・近世の溝跡について は、柏の城関連遺構と考 えられる。
城山遺跡 (第19地点)	集落	古墳時代後期 中世以降	住居跡 土坑	5軒 1基	土師器 なし			
城山遺跡 (第21地点)	集落	縄文時代 古墳時代後期 近世以降	炉穴 住居跡 土坑	1基 2軒 3基	土師器・須恵器 陶磁器・土器・石製品 鉄製品・板碑			遺構外出土遺物には草創 期の多縄文系土器の小破 片3点が出土した。市内 では初めての出土である。
城山遺跡 (第22地点)	集落	縄文時代前期 縄文時代 古墳時代後期	集石 遺物包含層 住居跡	1基 1軒	土器 土器 土師器			遺物包含層から草創期の 爪形文系土器の小破片1 点が出土した。市内では 2例目となる。

版 图



1. 確認調査風景



2. 79号土坑



3. 3号住居跡・20号溝跡



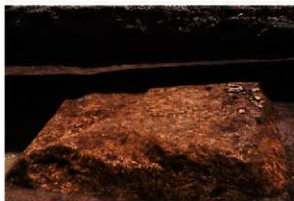
4. 88号住居跡



5. 88号住居跡遺物出土状態



6. 発掘風景



7. 89号住居跡



8. 89号住居跡遺物出土状態



1. 90号住居跡



2. 90号住居跡遺物出土状態



3. 90号住居跡貯蔵穴遺物出土状態



4. 91号住居跡



5. 91号住居跡遺物出土状態



6. 91号住居跡遺物出土状態



7. 91号住居跡カマド



1. 92号住居跡



2. 93号住居跡



3. 93号住居跡遺物出土状態



4. 93号住居跡遺物出土状態



5. 93号住居跡貯蔵穴遺物出土状態



6. 93号住居跡カマド



7. 94号住居跡



8. 95号住居跡



1. 2区土坑群



2. 75号土坑



3. 76号土坑



4. 77号土坑



5. 78号土坑



6. 80号土坑



7. 81号土坑



8. 発掘風景



1. 1区17号溝跡



2. 2区17号溝跡 (西から)



3. 2区17号溝跡 (南から)



4. 16・18号溝跡 (西から)



5. 18・16号溝跡 (東から)



6. 16号溝跡 (南から)



7. 21号溝跡 (西から)



1. 3号住居跡出土遺物



2. 89号住居跡出土遺物



88号住居跡出土遺物



90号住居跡出土遺物



91号住居跡出土遺物



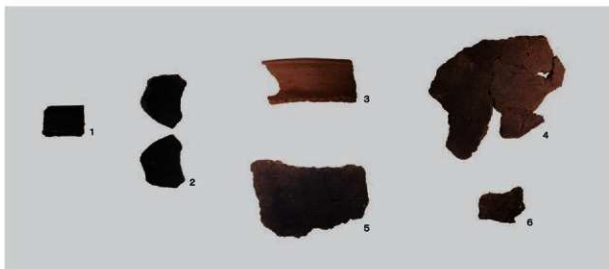
1. 92号住居跡出土遺物



2. 93号住居跡出土遺物



1. 94号住居跡出土遺物



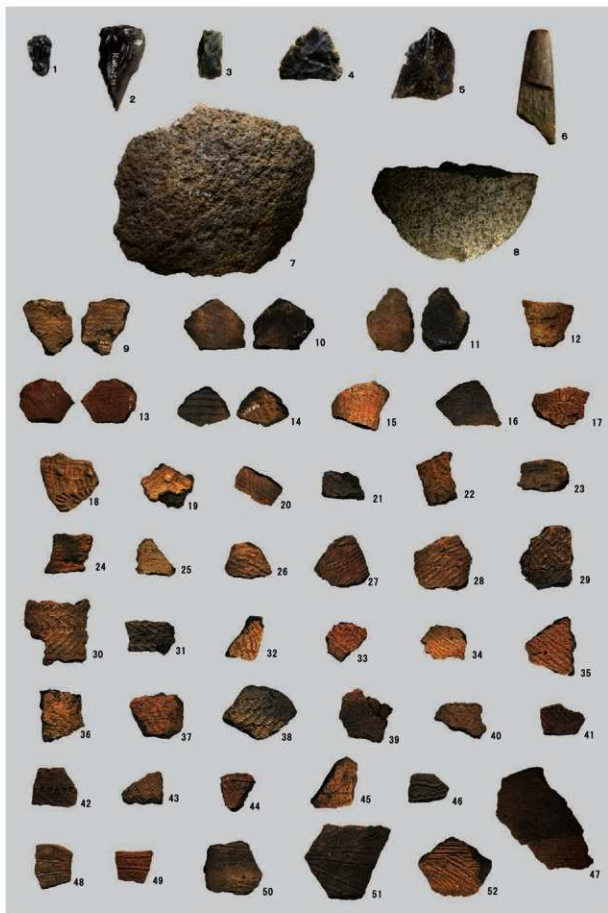
2. 95号住居跡出土遺物



3. 17・21号溝跡出土遺物



16号沟迹出土遗物



遺構外出土遺物 1



遺構外出土遺物 2



遺構外出土遺物 3



1. 調査区近景



2. 確認調査風景



3. 発掘風景



4. 96号住居跡遺物出土状態



5. 96号住居跡遺物出土状態



6. 96号住居跡遺物出土状態



7. 96号住居跡遺物出土状態



8. 96・97号住居跡



1. 発掘風景



2. 98号住居跡



3. 99号住居跡柱穴



4. 99号住居跡貯蔵穴



5. 100号住居跡遺物出土状態



6. 100号住居跡遺物出土状態



7. 100号住居跡



8. 82号土坑



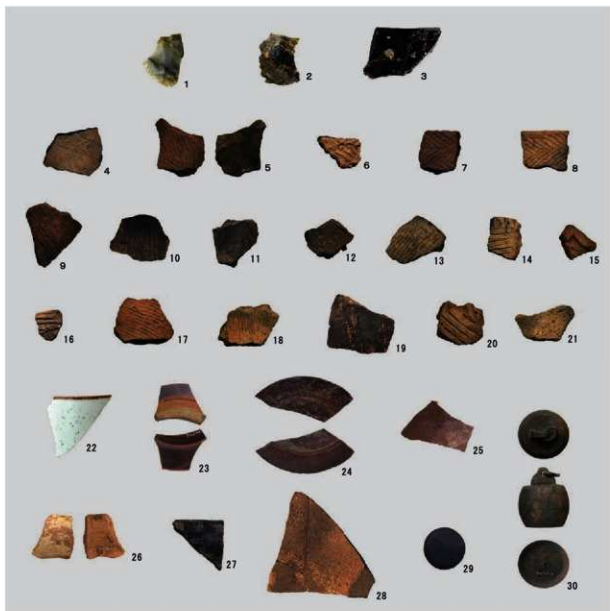
1. 96·97号住居跡出土遺物



2. 98号住居跡出土遺物



1. 100号住居跡出土遺物



2. 遺構外出土遺物



1. 表土剥ぎ風景



2. 調査風景



3. 3号炉穴



4. 発掘風景



5. 64号住居跡（東から）



6. 64号住居跡（南から）



7. 64号住居跡遺物出土状態



1. 101号住居跡遺物出土状態



3. 101号住居跡・86号土坑（南から）



2. 101号住居跡遺物出土状態



4. 86号土坑遺物出土状態



5. 86号土坑遺物出土状態



6. 86号土坑遺物出土状態



7. 86・87号土坑



1. 64号住居跡出土遺物



2. 101号住居跡出土遺物



3. 85号土坑出土遺物



4. 86号土坑出土遺物 1



1. 86号土坑出土遗物 2



2. 遺構外出土遺物



1. 調査区近景



2. 発掘風景



3. 102号住居跡遺物出土状態



4. 102号住居跡遺物出土状態



5. 102号住居跡遺物出土状態



6. 102号住居跡遺物出土状態



7. 102号住居跡遺物出土状態



8. 102号住居跡貯蔵穴付近遺物出土状態



1. 調査風景



2. 102号住居跡貯蔵穴



3. 102号住居跡入口ピット付近



4. 102号住居跡カマド



5. 102号住居跡



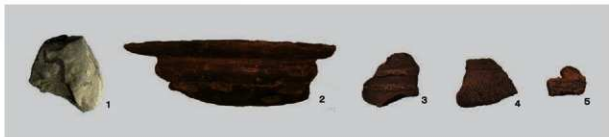
6. 2号集石



7. 2号集石



8. 2号集石調査風景



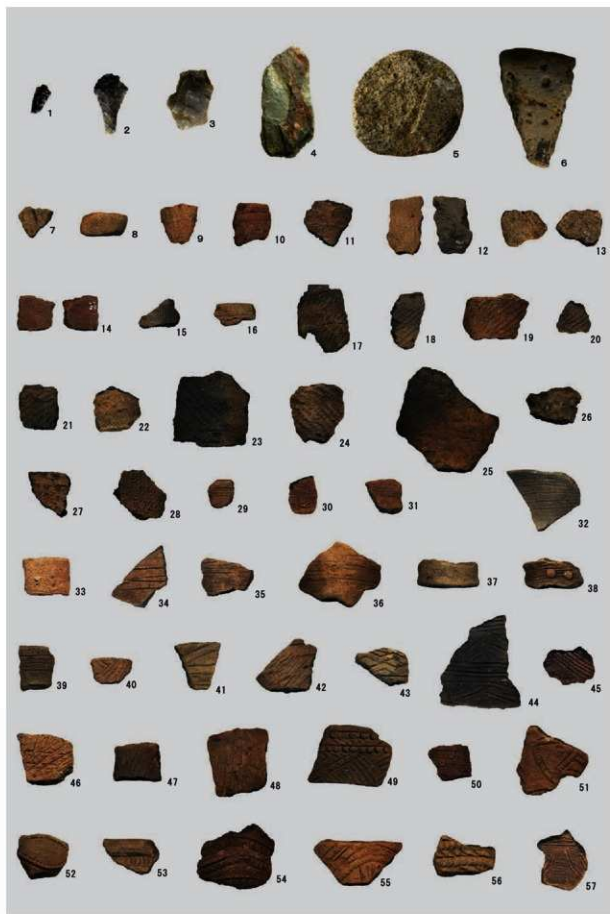
1. 2号集石出土遗物



2. 102号住居跡出土遺物1



1. 102号住居跡出土遺物 2



遺構外出土遺物 1



遺構外出土遺物 2



1. 遺構外出土遺物 3



2. 城山遺跡出土の板碑

志木市の文化財 第40集

埋蔵文化財調査報告書 4

発 行 埼玉県志木市教育委員会
埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号
発 行 日 平成 21 (2009) 年 3 月 31 日
印 刷 株式会社 白 峰 社